

九州大学統合移転地内埋蔵文化財調査報告書

Motooka Kuwabara

元岡・桑原遺跡群27

— 第18次・第60次・第64次調査の報告 —

2016

福岡市教育委員会

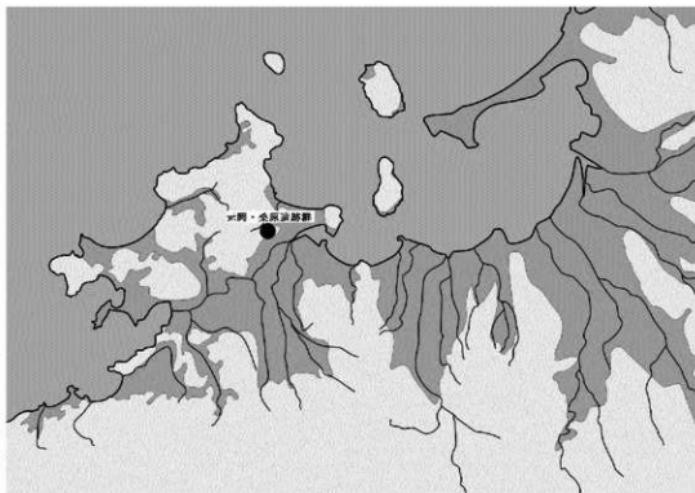
九州大学統合移転地内埋蔵文化財調査報告書

Motooka

Kuwabara

元岡・桑原遺跡群27

— 第18次・第60次・第64次調査の報告 —



遺跡略号	調査番号
MOT-18	9946
MOT-60	1306
MOT-64	1331

2016

福岡市教育委員会

序

福岡市は大陸に近く、日本列島での社会、文化の形成に窓口としての役割を古来より果たしてきました。

国立大学法人九州大学は、福岡市箱崎地区・六本松地区・春日市原町地区のキャンパスを統合移転し、福岡市西区元岡・同桑原・糸島市にまたがる新キャンパスを建設する事業を進めています。

本市は九州大学統合移転事業に伴い、移転予定地内での発掘調査を平成7年から開始しており、現在までに66次の発掘調査を実施し、25冊の報告書を刊行しています。

本書は第18次・60次・64次調査の報告を行うものです。いずれの調査もこの地域の歴史を語る上で欠かすことのできないものと考えています。

最後に調査にご協力いただいた九州大学をはじめとする関係各機関と地元の方々に厚く御礼を申しあげます。

平成28年3月25日

福岡市教育委員会
教育長 酒井 龍彦

例　　言

- 本書は、福岡市教育委員会が九州大学統合移転事業に伴い、福岡市西区大字桑原において発掘調査を実施した元岡・桑原遺跡群第18次、60次、64次調査の報告書である。
- 発掘調査および整理・報告書作成は、九州大学と受託契約を実施した。
- 報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
- 本書に掲載した遺構実測図の作成は、吉留秀敏・大塚紀宜・大森真衣子・清金良太が行った。
- 本書に掲載した遺物実測図の作成は、米倉秀紀・大森・清金・松崎友里が行った。
- 本書に掲載した遺構および遺物写真の撮影は、米倉・大森・清金が行った。
- 空中写真撮影は空中写真企画に委託した。
- 本書に掲載した挿図の製図は、米倉・大森・清金・松崎が行った。
- 本書に掲載した国土座標値は、日本測地系(第II座標系)によるものである。
- 本書で用いた方位は座標北で、真北より $0^{\circ}18'$ 西偏する。
- 遺構の呼称は、掘立柱建物をSB、土坑をSK、溝をSD、ピットをSP、包含層をSXと略号化した。
- 遺物番号は通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。
- 本書に記載する記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
- 本書の執筆および編集は、I・II・V章は清金、III章は米倉・山口謙治、IV章は大森が行った。

遺跡名	元岡・桑原遺跡群遺跡	調査次数	第18次	遺跡略号	MOT-18
調査番号	9813	分布地図図幅名	元岡140	遺跡登録番号	2782
調査地	福岡市西区大字桑原字別府			調査面積	16800m ²
調査期間	平成11年10月10日～平成14年2月15日				

遺跡名	元岡・桑原遺跡群遺跡	調査次数	第60次	遺跡略号	MOT-60
調査番号	1306	分布地図図幅名	元岡140	遺跡登録番号	2782
調査地	福岡市西区大字桑原字内			調査面積	271m ²
調査期間	平成25年5月22日～平成25年8月29日				

遺跡名	元岡・桑原遺跡群遺跡	調査次数	第64次	遺跡略号	MOT-64
調査番号	1331	分布地図図幅名	桑原西部139	遺跡登録番号	2782
調査地	福岡市西区大字桑原字内			調査面積	2900m ²
調査期間	平成25年10月1日～平成26年4月30日				

本文目次

I.	はじめに	1
II.	遺跡の立地と環境	2
1.	地理的環境	2
2.	歴史的環境	3
III.	第18調査の記録 - 5 -	
1.	はじめに	9
1)	これまでの報告	9
2)	第18次調査の概要	9
2.	出土遺物の報告	10
1)	土製品	10
2)	石器	10
3)	木製品	27
3.	おわりに	32
IV.	第60次調査の記録	
1.	第60次調査の概要	41
2.	調査の内容	42
3.	まとめ	49
V.	第64次調査の記録	57
1.	概要と層序	57
2.	I、II区の遺構と遺物	64
1)	掘立柱建物 (SB)	64
2)	溝 (SD)	64
3)	土坑 (SK)	65
4)	その他の遺構、遺物	67
3.	III区の遺構と遺物	81
1)	桑原錦田古墳群 A群	81
2)	その他の遺構、遺物	83
4.	まとめ	87
1)	I、II区の調査	87
2)	III区の調査	88

挿図目次

図1 元岡・桑原遺跡群位置図	2
図2 元岡・桑原遺跡群調査地点位置図	4

第18次調査

図1 第18次調査区の位置とグリッド配置図	9
図2 土製品・石廐丁・滑石製品・軽石製品実測図	11
図3 石錘実測図	12
図4 砥石実測図1	13
図5 砥石実測図2	14
図6 砥石実測図3	15
図7 磨石・敲石・凹石実測図1	17
図8 磨石・敲石・凹石実測図2	18
図9 磨石・敲石・凹石実測図3	20
図10 磨石・敲石・凹石実測図4	21
図11 磨石・敲石・凹石実測図5	23
図12 磨石・敲石・凹石実測図6	25
図13 石皿・台石実測図	26
図14 木製品実測図1	27
図15 木製品実測図2	29
図16 木製品実測図3	30

第60次調査

図1 確認調査時出土遺物 (S= 1 / 3)	41
図2 第60次調査区位置図	41
図3 第60次調査区全体図	42
図4 第60次調査区遺構配置図	42
図5 土層断面図 (S= 1 / 80)	44
図6 包含層内出土遺物① (S = 1 / 3)	46
図7 包含層内出土遺物② (S = 1 / 3, S = 1 / 2, S = 1 / 1)	47
図8 包含層内出土遺物③ (S = 1 / 2, S = 1 / 1)	48

第64次調査

図1 第64次調査区位置図	58
図2 I・II区全体図 (1 / 200)	59
図3 I・II区土層図 (1 / 200)	63
図4 SB001 実測図 (1 / 60)	64
図5 SB002・SB003 実測図 (1 / 60) および、SB003 出土遺物実測図 (1 / 3)	65

図6 SD105・SK007・SK104 実測図（1/60）および、SD105・SD104 出土遺物実測図（1/3）	66
図7 SX051 土層図（1/50）	67
図8 SX051 出土遺物実測図1（1/3）	68
図9 SX051 出土遺物実測図2（1/1、1/3）	69
図10 SX081 土層図（1/50）、および出土遺物実測図（1/3）	70
図11 SX108 出土遺物実測図（1/3）	70
図12 SX108 出土遺物実測図（1/1）	71
図13 ピット・試掘トレンチ出土遺物実測図（1/3、1/1）	72
図14 Ⅲ区全体図（1/200）	73
図15 Ⅲ区南西部全体図（1/100）	77
図16 桑原錦田古墳群A群実測図（1/20）、およびトレンチ土層図（1/60）	81
図17 桑原錦田古墳群A群石室実測図（1/40） および遺物出土状況、遺物実測図（1/1、1/3）	82
図18 SX246 地境石トレンチ（1/30）および出土遺物（1/3）	83
図19 SX210 出土遺物1（1/3、1/1）	84
図20 SX210 出土遺物2（1/3）	85
図21 SX210 出土遺物3（1/1）	86
図22 桑原錦田古墳群A群石室実測図（1/80）	88

図版目次

第18次調査図版

- 図版1 第18次調査出土遺物1
- 図版2 第18次調査出土遺物2
- 図版3 第18次調査出土遺物3
- 図版4 第18次調査出土遺物4
- 図版5 第18次調査出土遺物5
- 図版6 第18次調査出土遺物6

第60次調査図版

- 図版1 1. I区全景（西から）
2. II区全景（西から）
- 図版2 1. 遺構検出状況（西から）
2. a - a' 北側土層断面（南から）
- 図版3 1. b - b' 東側土層断面（南から）
2. SX01 検出状況（西から）
- 図版4 1. 包含層出土遺物

第64次調査図版

- | | |
|--|----------------------------|
| 図版1 1. I・II区全景（上空から） | 2. I・II区全景（上空西から） |
| 図版2 1. I区全景（上空から） | 2. SB001（南から） |
| 図版3 1. SK007（南から）
3. SX051 土層断面（南東から） | 2. SK107（東から） |
| 図版4 1. SX051 土層断面（南東から）
3. SX081 土層断面（南東から） | 2. SX051 - 2 陶質土器出土状況（東から） |
| 図版5 1. III区全景（東から）
3. 桑原錦田古墳群3号墳石室（北から） | 2. 桑原錦田古墳群3号墳石室（北から） |
| 図版6 1. 地境石（北東から）
3. 地境石Y-Y'土層断面（南から） | 2. 地境石X-X'土層断面（東から） |
| 図版7 出土遺物（1） | |
| 図版8 出土遺物（2） | |

表 目 次

表1 元図・桑原遺跡群調査一覧表.....	5
表2 元図・桑原遺跡群報告書一覧表.....	6
第60次調査	
表1 出土土器観察表.....	49
表2 出土土製品・鉄器・石器観察表.....	50
第64次調査	
表1 第64次出土石器観察表.....	87

I はじめに

1 調査に至る経緯

平成 6（1994）年に九州大学は福岡市内の箱崎・六本松キャンパスから福岡市西区元岡・桑原地区を含む伊都キャンパスに統合移転することを決定した。統合移転用地の取得については、福岡市土地開発公社が全城を先行取得した後、新キャンパス建設のための造成工事を行った後、九州大学が再取得することとなった。

これに伴い、平成 7 年 2 月に九州大学から福岡市に対して事業用地内埋蔵文化財の事前調査の依頼があった。これを受け福岡市教育委員会は、平成 7 年に踏査を行った。以後、平成 8 年秋から福岡市土地開発公社と福岡市の間で受託契約を締結する形で、順次移転用地内での埋蔵文化財発掘調査を進めてきた。しかし、造成工事計画が変更となり、未造成のまま九州大学が再取得した地区についても造成工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査が必要となった。その調査範囲は大規模な面積に及ぶことなどから、福岡市教育委員会が発掘調査を行うことで九州大学と協定書を締結した。平成 15 年（2003）年から九州大学との受託契約による発掘調査を開始し、現在整理、報告書の作成を行っている。

2. 調査の組織

平成 25 年度（発掘調査・整理報告）

福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課

課長 宮井善朗

調査第 2 係長 榎本義嗣

主任文化財主事 大塚紀宜（調査担当）

文化財主事 大森真衣子・清金良太（調査担当）

庶務 文化財部埋蔵文化財審査課管理係 横田忍

平成 26 年度（発掘調査・整理報告）

福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課

課長 常松幹雄

調査第 2 係長 榎本義嗣

主任文化財主事 大塚紀宜（調査担当）

文化財主事 大森真衣子・清金良太（調査担当）

庶務 文化財部埋蔵文化財審査課管理係 横田忍

平成 27 年度（発掘調査・整理報告）

福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課

課長 常松幹雄

調査第 2 係長 榎本義嗣

文化財主事 中尾祐太（調査担当）

庶務 文化財部埋蔵文化財審査課管理係 横田忍

II. 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

今回報告する元岡・桑原遺跡群は、玄界灘に突出する糸島半島の東側基部の丘陵部に位置する。丘陵には小河川により樹枝状に浸食された狭い谷が無数に入り込む。

現在の糸島半島はその全面で九州本島と繋がっているが、繩文海進以降、中世まで中央の一部が陸橋状に繋がっていた以外は、東は古今津湾、西は古加布里湾がそれぞれ大きく湾入していたと考えられる。この東西の湾入した海が干拓によって江戸時代に埋め立てられ、現在の形をなすに至っている。

元岡・桑原遺跡群は、その東側の古今津湾の北西に位置する（第1図）。

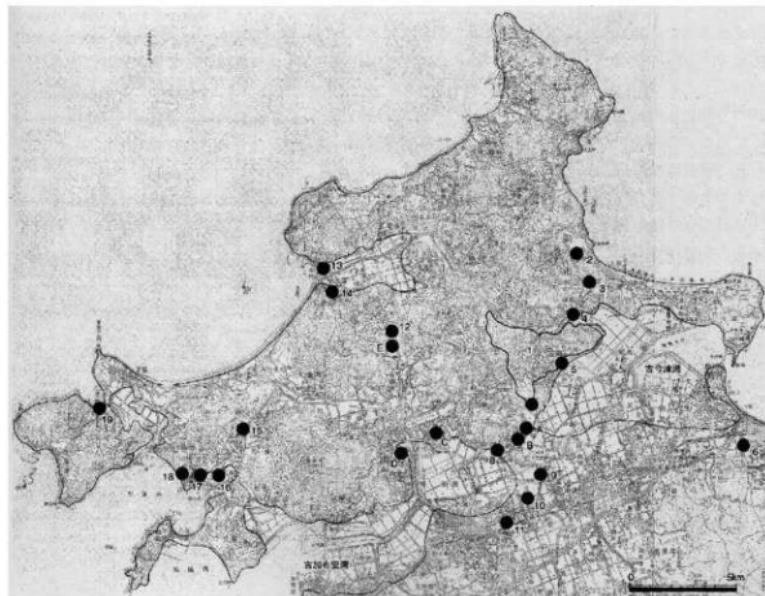


図1 元岡・桑原遺跡群位置図

- 1 元岡・桑原遺跡群 2 大原D遺跡 3 大原A遺跡 4 桑原飛櫛貝塚 5 元岡瓜尾貝塚 6 今宿五郎江遺跡
7 泊桂木・泊リュウサキ遺跡 8 泊熊野遺跡 9 志戸遺跡群 10 洞遺跡群 11 浦志遺跡群 12 蓬輪遺跡
13 吹切遺跡 14 久米遺跡 15 八熊製鉄遺跡 16 御床松原遺跡 17 新町遺跡 18 岐志元村遺跡
19 天神山貝塚 A 泊大塚古墳 B 御道具山古墳 C 津和崎椎現古墳 D 稲葉古墳群 E 井田原開古墳

2 歴史的環境

旧石器時代～縄文時代

第3次調査では、草創期から早期の遺物、石組炉などが出土している。また、第58次調査では、縄文時代早期の包含層、石組炉などが発見されている。桑原飛櫛貝塚では厚さ約80cmの貝層から後期の牙製品や貝輪が出土した。その他、第2次、20次、42次調査などで縄文土器が出土している。

弥生時代

前期～中期前半の遺構・遺物はほとんど確認されていない。中期中ごろになると遺物、遺構が見られるようになる。これは今回報告する第64次調査でも同様であった。第3次調査では中期後半の堅穴住居9軒以上、掘立柱建物が検出された。第20次調査では玄武岩製磨製石斧の未成品が出土し、今山遺跡以外での石斧製作が明らかとなった。また、第42次、52次調査では約1万箱の大量の土器とともに、小銅鐸、小型仿製鏡、貸泉などの青銅製品の他、木製琴といった木器や漆器と言った多彩な遺物が見つかった。

古墳時代

移転用地内には70基以上の円墳と6基の前方後円墳がある。移転用地周辺の古墳も含めて、前期から終末期にかけて、首長墓が築造される。前期には御道具山古墳、泊大塚古墳と大型の前方後円墳が築かれる。その後、元岡地区では丘陵上に位置を変え、元岡E-1号墳（第13次）、池ノ浦古墳、峰古墳と続く。また、桑原地区では塩除古墳、金屎古墳（第1次・確認調査）、経塚古墳（第36次）、石ヶ原古墳が築造される。終末期には元岡G-1号墳で圭頭大刀など装飾付大刀5振が出土し、元岡G-6号墳では「庚寅」銘大刀が出土した。また、石ヶ元古墳群では金銅製單鳳大刀、鳥足文叩きを持つ陶質土器の他、鉄鋸、金槌、鉄鐸などの鍛冶道具、鉄滓が副葬、供獻されている。背景には鍛冶集団の存在が想定されており、背景に渡来系集団の関与が想定される。

第64次調査では、Ⅲ区で円墳を1基検出した。墳丘・石室はほとんどが崩壊していたが、耳環、鈴の頭部などを検出した。

古代

生産に関係する遺構、遺物が多い。石ヶ元古墳群のように少なくとも6世紀後半には鍛冶が行われていたようで、7世紀後半になると製鉄炉が出現し、製鉄から鍛冶までの一貫した鉄器生産が開始される。奈良時代になると複数の谷で多数の精錬炉が出土しており、規模も大規模になる。

また、第7次調査では古代の建物群の他、鍛冶炉、製鉄炉が検出されている。なかでも池状遺構は祭祀関連の遺構とされ、湧水のある付近に「大磐」が設置されていた。池の排水溝とされた箇所から「壬辰年（692年）韓鉄」と記された木簡が出土しており、この時期に鉄生産が行われたことを示す資料として注目される。

また、糸島半島は、律令制度下における筑前國志麻（鳩）群に位置し、現在の行政区画では福岡市西区、糸島市、志摩町のそれぞれ一部に該当する。志麻郡は和名類聚抄には韓良、久米、登志、明敷、鶏水、川邊、志麻の7群が記載されており、韓良、久米、登志、鶏水はそれぞれ海岸沿いの韓泊、久米、今津、芥屋の地域に比定されているが、元岡・桑原遺跡群が該当する郷名は不明である。日本書紀には、久米皇子と朝鮮半島への派遣軍の志麻郡への藩在や大宝二年の鳩郡川辺里戸籍、鉄生産の記録などから地域の重要性を見ることができる。

中世

中世の遺構・遺物は少ない。元岡・桑原遺跡群には2つの中世山城があるが、水崎城のごく一部を調査し、堅堀状の遺構を検出したのみである。



調査番号	遺跡名	原因	調査期間	調査面積	古墳	内容等	報告書(集)
9602 第1次	確認	971201～981031				試験のみ	743
9656 桑原石ヶ元古墳群	公社	961111～980131	4737		円墳		743
9657 桑原金屋古墳	確認	960820～961129	500			前方後円墳	909
9685 元岡石ヶ原古墳	確認	960827～961129	1280			前方後円墳	909
9656 第2次	公社	961111～970325	3007			古墳時代・古代・溝、土坑、水田	722
9763 第3次	公社	971129～990222	3500	1		縄文時代石組炉、弥生時代住居跡、円墳	829
9764 第4次	公社	971201～980331	1219			古代・中世掘立柱建物、溝	829
9771 元岡古墳群第2次	確認	971110～971128	60				
9811 第5次	公社	980427～980623	2500			古代土坑、包含層	639
9812 第6次	公社	980630～980828	2800			古墳時代包含層	639
9813 第7次	公社	980506～990611	7500			古墳時代・古代住居跡、池塘道構、製鉄跡	1012
9829 第8次(元岡古墳群M群)	公社	980916～981228	300	1	円墳		829
9851 第9次	公社	981102～981210	190			弥生時代住居跡	1172
9854 第10次	公社	990106～990225	1336			古代・中世包含層	639
9855 第11次	公社	990106～990320	1650			古墳時代・古代土坑、包含層	829
9902 第12次	公社	990406～000328	5500			古代製鉄跡	860-1063
9903 第13次	公社	990412～000316	600	3	前方後円墳、円墳		861
9904 第14次	公社	990422～990722	1200			古代包含層	639
9923 第15次	公社	990611～990928	3500			古代包含層、中世水田	860
9933 第16次	公社	990602～991110	1200			古代包含層	639
9934 第17次(元岡古墳群日群)	公社	990910～991208	517	2	円墳		861
9946 第18次	公社	991010～020215	16800	2	古墳時代・古代住居跡、垂立柱建物、池塘道構、製鉄炉、円場	1063-1102-1172-本報告	
9947 第19次	公社	991016～991215	3000			古代包含層	743
0001 第20次	公社	000405～030523	20130			古墳時代住居跡、古代掘立柱建物、製鉄炉	962-1013-1063-1105
0002 第21次(石ヶ元古墳群)	公社	000405～000921	3170	3	円墳		861
0033 第22次	公社	000410～010225	4750			古代掘立柱建物、製鉄関係遺構	909
0019 第23次	公社	000601～010331	8110			確認調査	743
0034 第24次	公社	000821～030320	500			古墳時代住居跡、古代製鉄炉	860
0052 第25次(元岡古墳群A群)	公社	001124～011134	2200	7	円墳		861
0110 第26次	公社	010405～011130	5487	1		古墳時代住居跡、円墳、古代掘立柱建物	963
0153 第27次	公社	011201～020820	4495			古墳時代住居跡	909
0154 第28次	公社	020201～020704	2200			古代・中世包含層	909
0202 第29次(元岡古墳群N群)	公社	020405～030930	4000	11	円墳		861
0240 第30次	公社	020801～020930	2450			古代包含層	743
0242 第31次	九大	030401～060113	9000			古代窯、垂立柱建物、廻治炉、古墳時代祭祀遺跡	1103
0255 第32次	九大	030120～030331	1700			試験	
0303 第33次	九大	030408～030519	450	1	円墳		1064
0310 第34次(元岡古墳群J群)	公社	030401～030812	1200	3	円墳		909
0340 第35次(石ヶ原古墳)	公社	030520～050112	1853	1	前方後円墳		909
0341 第36次(經塚古墳)	公社	030901～050331	3500	1	円墳、中世墓群		1011-1105
0365 第37次(元岡古墳群O群)	九大	031020～040226	461	4	円墳		861
0371 第38次(水崎城)	公社	040308～050117	1000			中世山城	1105
0404 第39次	民間	040405～040416	88			弥生時代包含層	1064
0410 第40次	九大	040407～040430	1000			包含層	1064
0435 第41次	九大	040507～041130	900			古代包含層、製鉄関連遺構	1064
0451 第42次	九大	041001～050331	7000			古墳時代晴期～古墳時代初期自然道路	1174-1275-1275-1276
0486 第43次		050207～050308	500			古墳墓道	1173
0523 第44次	九大	050601～051020	1189			古墳・古代集落	1064
0535 第45次(桑原古墳群A群)	公社	050720～051122	1126	3	円墳		1105
0538 第46次		050808～051011	403	1		弥生・中世集落	965
0562 第47次(元岡I-1号墳)	九大	060105～060310	107			円墳	1064
0563 第48次	九大	060110～060223	447			弥生・古代集落	1173
0611 第49次	公社	060403～070322	4000			古墳時代・古代集落	1173
0709 第50次	公社	070401～070827	811			近世末～近代墓地	1173
0741 第51次	公社	070829～081003	6888			古墳時代・古代集落	1173
0763 第52次	九大	080121～081031	3000			弥生・古墳時代初期自然道路	
0764 第53次	九大	080215～080409	770			古代集落	
0844 第54次	公社	081006～090109	1872			古代集落	1173
1001 第55次	九大	100401～110330	3300	2	大型方墳		
1043 第56次	九大	110411～111228	6970	2	大型円墳、中世集落		1210
1103 第57次	九大	110413～130906	6700			古墳時代包含層、古代・中世集落	
1110 第58次	九大	110620～130315	1152			縄文時代中期集落、古代包含層	1301
1140 第59次	九大	120123～130315	2298			古墳時代・中世集落	
1306 第60次	九大	130522～130829	271			古墳・古代包含層	本報告
1315 第61次	九大	130701～131023	407			古代包含層	1275
1327 第62次	九大	130901～131115	1374			中世集落	
1328 第63次	九大	131001～140423	1244			古代・中世集落	
1331 第64次	九大	131110～140430	2900	1	弥生集落、円墳、中世集落		本報告
1413 第65次	九大	140501～141226	2451			弥生・古代包含層	
1525 第66次	九大	150829～151008	167			中世・近世包含層	

表1 元岡・桑原遺跡群調査一覧表

書名	シリーズ名	所収調査次数	発行年
九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書1	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 693 集		2001
九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書2	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 743 集		2003
元岡・桑原遺跡群1	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 722 集	第2次	2002
元岡・桑原遺跡群2	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 744 集	桑原石ヶ元古墳群	2003
元岡・桑原遺跡群3	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 829 集	第 3・4・8・11 次	2004
元岡・桑原遺跡群4	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 860 集	第 12・15・24 次	2005
元岡・桑原遺跡群5	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 861 集	第 13・17・25・29・37 次	2005
元岡・桑原遺跡群6	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 909 集	第 22・27・28・34 次・金屋古墳・石ヶ原古墳	2006
元岡・桑原遺跡群7	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 910 集	第 28 次	2006
元岡・桑原遺跡群8	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 962 集	第 20 次	2007
元岡・桑原遺跡群9	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 963 集	第 26 次	2007
元岡・桑原遺跡群10	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 964 集	第 46 次	2007
元岡・桑原遺跡群11	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1011 集	第 23・30・36 次	2008
元岡・桑原遺跡群12	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1012 集	第 7 次	2008
元岡・桑原遺跡群13	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1013 集	第 20 次・2	2008
元岡・桑原遺跡群14	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1063 集	第 12・18・20 次・3	2009
元岡・桑原遺跡群15	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1064 集	第 33・40・41・44・47 次	2009
元岡・桑原遺跡群16	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1102 集	第 18 次・2	2010
元岡・桑原遺跡群17	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1103 集	第 31 次	2010
元岡・桑原遺跡群18	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1105 集	第 20 次・4・36 次・2・38・45 次	2011
元岡・桑原遺跡群19	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1172 集	第 9・18 次・3	2012
元岡・桑原遺跡群20	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1173 集	第 43・48・49・50・51・54 次	2012
元岡・桑原遺跡群21	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1174 集	第 42 次・1	2012
元岡・桑原遺跡群22	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1210 集	第 56 次・1	2013
元岡・桑原遺跡群23	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1246 集	第 18・42・59 次	2014
元岡・桑原遺跡群24	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1275 集	第 42・61 次	2015
元岡・桑原遺跡群25	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1276 集	第 42 次	2015
元岡・桑原遺跡群26	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1301 集	第 58 次	2016
元岡・桑原遺跡群27	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1302 集	第 18・60・64 次	2016
桑原遺跡群1	福岡市埋蔵文化財調査報告書第集	第 1 次発掘調査報告	1995
桑原遺跡群2	福岡市埋蔵文化財調査報告書第集	飛鶴貝塚第 1 次調査	1996

表2 元岡・桑原遺跡群調査一覧表

第18次調査の記録－5－

第18次調査の記録 - 5 -

1. はじめに

1) これまでの報告

第18次調査は、すでに発掘調査報告書が4冊刊行されている（註）。当初、調査報告書は3冊で完結予定であったが、調査担当者である吉留秀敏が2冊目刊行後に病魔におそわれ、3冊目の報告書でもすべてを報告仕切れなかった。吉留は3冊目の報告書を刊行したほぼ1年後に他界した。

遺構・土層についてはほぼ3冊の報告書で報告済みであるが、第4面以下の遺物の一部と、弥生時代以前の遺物などが未報告となっていた。その後、本執筆者である米倉が未報告の遺物等を確認したところ、トレース済みの出土遺物図面約30枚、実測済み石器図面約50点、未実測の土器・石器が200点以上あることが判明した。これらの遺物を平成25年度中に報告すべく作業を行っていたところ、さらに未実測の木製品があることが判明したため、同年度中にSX101・404出土遺物の未報告分の内、土器・剥片石器・石斧を報告した。今回は残った最後の遺物である砾石器と木製品の報告を行う。なおSX101・404以外に、上面の遺構や整地層から出土した遺物も一部含んでいるが、報告は器種ごとに行う。今報告で第18次調査の報告は完結する。

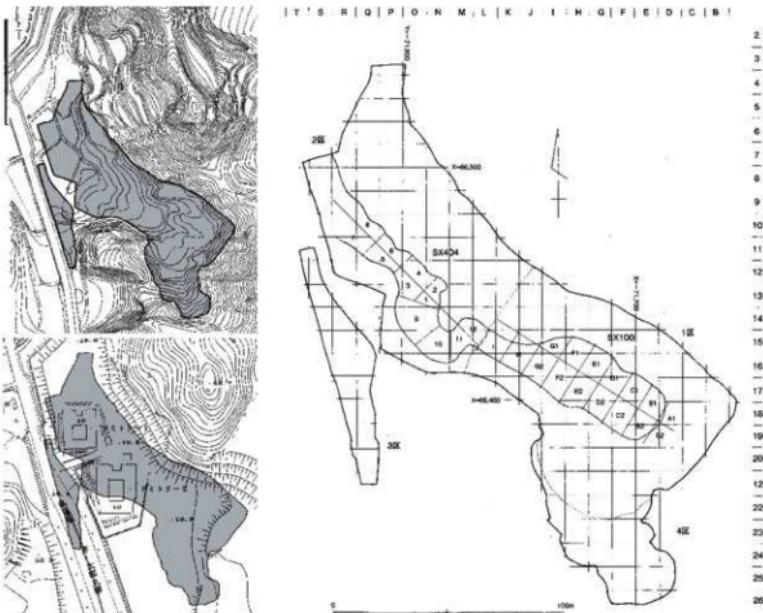


図1 第18次調査区の位置とグリッド配置図
※ 左上：調査前 左下：調査後

2) 第18次調査の概要

第18次調査は、水崎山から北に派生する二つの尾根に挟まれた谷の中に立地する。谷の幅約100m、奥行き300mを測り、その標高は12~46mで、上流に行くに従い急斜面となる。全体が谷の中の斜面のため、6m以上の埋没土及び造成土に覆われており、土層堆積物の様相は複雑であるが、基本的な土層は次のとおりである。I層：腐植土、II層：暗褐色砂～シルト質土、III層：褐色有機質シルト質土、IV層：黒色粘質土・上部砂礫、V層：黄褐色レス、VI層：下部砂礫、VII層：岩盤（花崗岩）となる。

遺跡は地下2~6mに埋没して全体が5面からなっている。表土直下～II層上位で第1面（近世）・第2面（中世）、II層上位で第3面（古代）、III層上位で第4面（古墳時代後期）、IV層上部～V層上部で第5面（旧石器時代～弥生時代）を認定している。ただしSX100とSX404と呼ぶ第5面の谷内包含層には、古代までの遺物を含んでおり、第3面・4面の生活期においてもこの谷は一部生きており、谷内にたまたま古墳時代や古代遺物がSX100・SX404として第5面で取り上げているものと思われる。本書では、SX100・SX404を中心とした遺物包含層と一部遺構内から出土した礫石器・木器等について報告する。

- 註)「元岡・桑原遺跡群14」 2009 福岡市教育委員会
「元岡・桑原遺跡群16」 2010 福岡市教育委員会
「元岡・桑原遺跡群19」 2012 福岡市教育委員会
「元岡・桑原遺跡群23」 2014 福岡市教育委員会

2. 出土遺物の報告

1) 土製品（図2、図版1）

1は土製円盤である。直径6.5cm~7.5cmを測る。両面ともナデ調整で仕上げ、周縁部は磨いている。SX358出土。

2) 石器

① 石庖丁（図2、図版1）

3点出土したが、1点は石斧刃部の可能性もある。2~4は石庖丁の破片である。2は刃部の破片であるが、やや厚みがあり石斧の可能性もある。凝灰岩製か。3は立岩産で、SX380出土。4はSX100の出土である。凝灰岩製か。

② 滑石製品（図2、図版1）

用途がわからない滑石を利用したものを集めた。3点掲載したが、滑石の小片は他にも多くあり、また用途のわかる製品は、それぞれの器種分類した。5は長さ10.9cm、幅8.2cm、厚さ2.5cmを測る。一部を欠失している。両面、周縁部のほほ全面を磨き、楕円形に仕上げている。6は石鍋の再利用品で、一部を除き粗く削っている。SX111出土。7は周縁部を粗く調整し、直径10cm前後の円形に仕上げているが、あるいは未製品かもしれない。J16区出土。

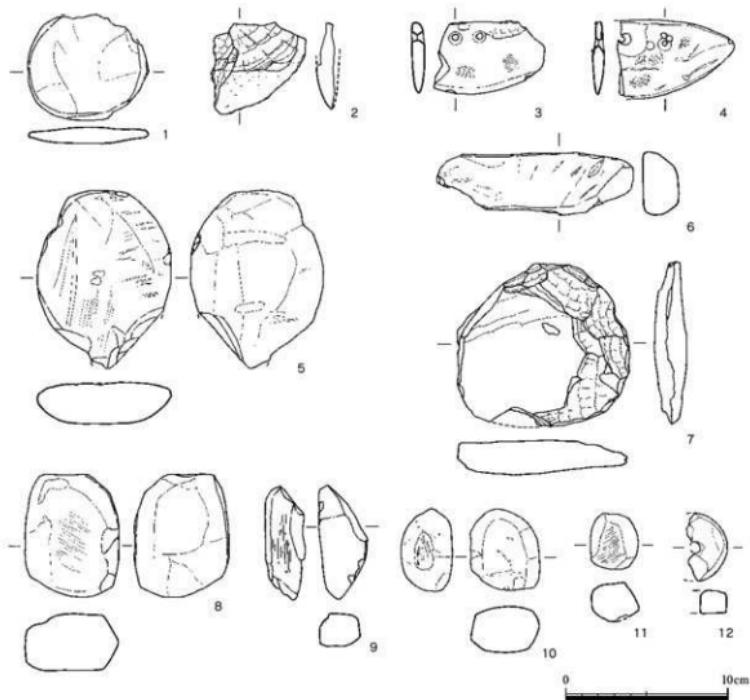


図2 土製品・石庵丁・滑石製品・軽石製品実測図（1/3）

③ 軽石製品（図2、図版1）

軽石を利用したもので、用途は判然としない。図化した以外にも加工痕跡の無い軽石が数点ある。8は厚さ3.6cmの軽石の片面を磨いている。G区出土。9も一面のみを磨いている。10は球形に近い軽石のごく一部を磨いている。SX100の出土である。11も球形に近いものの一部を磨き平坦にしている。

④ 紡錘車（図2、図版1）

12は紡錘車で、滑石製か。直径4.2cm、厚さ1.4cmを測る。SD511出土。

⑤ 石錘（図3、図版1・2）

石錘と考えられる石器であるが、一部不明確なもの、磨石・敲石等の転用品も含んでいる。石錘と考えられるものは全点掲載した。13は四辺の中央付近を打ち欠いているが、打ち欠きは大きくはない。明確な研磨痕は確認できないが、両面の中央付近を中心に敲打痕が見られる。砂岩系の石材で、長さ12.1cm、幅9.5cm、厚さ4.6cm、重さ779gを測る。SX100のG区出土である。14は両面を磨いて形を整え、両側縁の中央付近を大きく窪ませている。滑石製で長さ12.5cm、幅7.2cm、厚さ4.5cm、

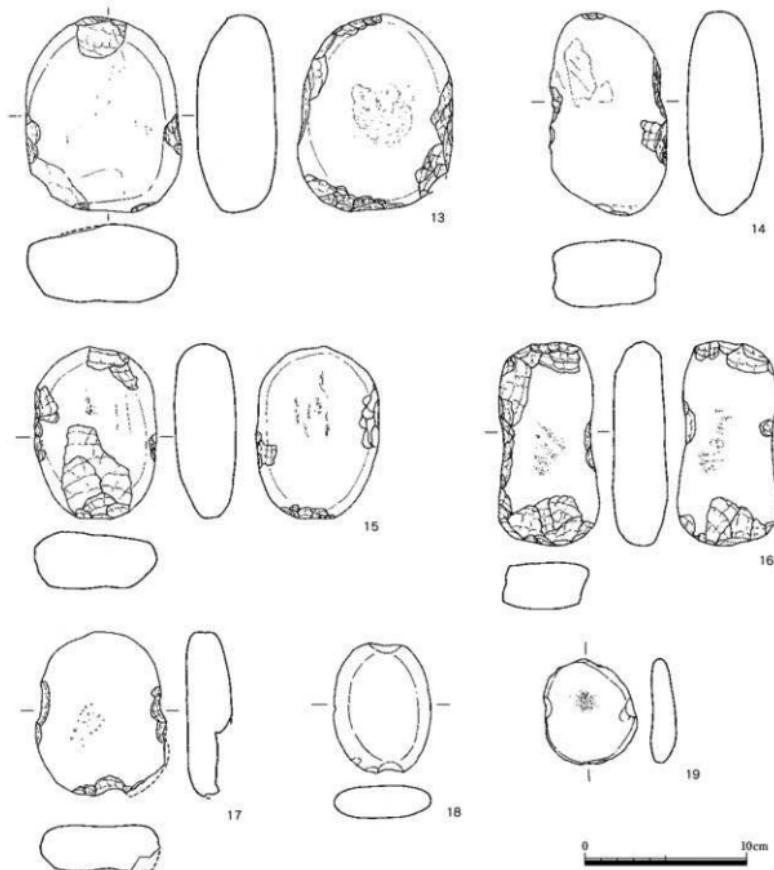


図3 石錘実測図 (1 / 3)

重さ 641g を測る。SX100 の出土。15 は両側縁にわずかに紐ずれ状の窪みがあり、両小口端部に打ち欠きがあるため石錘としたが、明確ではない。片面中央に敲打痕がある。安山岩系の石材で、長さ 10.5cm、幅 9.5cm、厚さ 3.6cm、重さ 469g を測る。SX404 出土。16 は両側縁中央を大きく窪ませ、両端部を打ち欠いている。両面に敲打痕が少し確認できる。玄武岩製で、長さ 12.5cm、幅 6.1cm、重さ 417g を測る。17 は玄武岩製で、長さ 10.0cm、幅 8.0cm、厚さ 2.6cm、重さ 298g を測る。両側縁を大きく打ち欠いている。端部は、片側を打ち欠いているものの、反対側に打ち欠きの痕跡は認められない。片面中央に敲打痕がある。反対面は大きく欠失している。SX100 G 区の出土。18 は扁平な石の両端部を打ち欠いている。石材は玄武岩に近いが不明確である。長さ 7.9cm、幅 5.9cm、厚

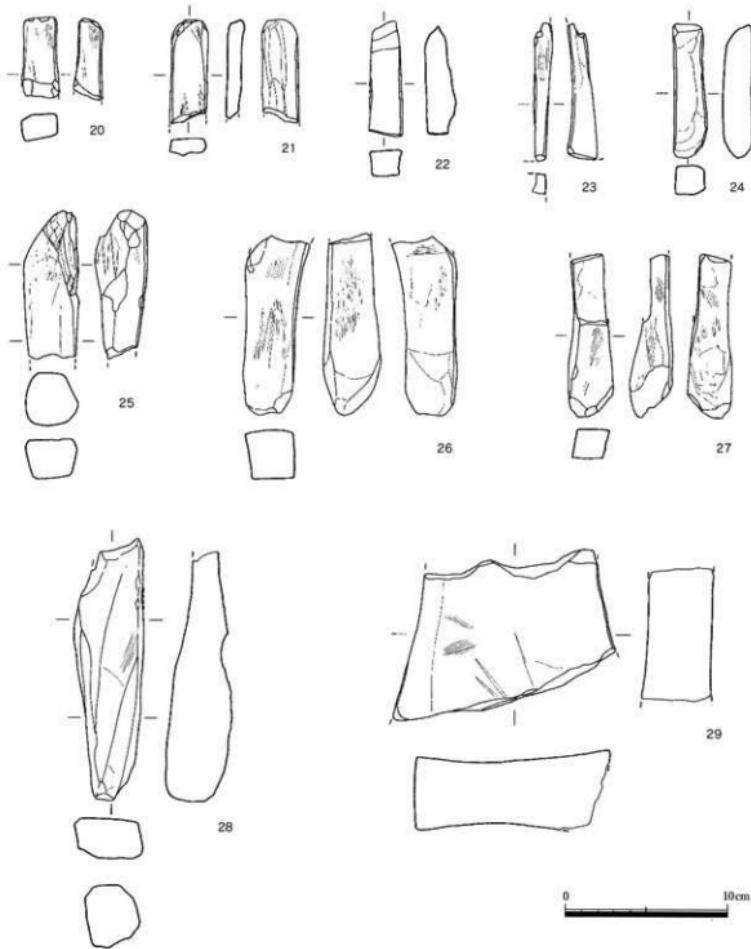


図4 砥石実測図1 (1/3)

さ2.1cm、重さ147gを測る。敲打痕等は認められない。SX100H-16区出土。19は扁平な暗緑色を呈する滑石状の石の両側縁中央を打ち欠いている。片面中央に敲打痕らしきものがあるが不明瞭。SX100のD-2区出土で、長さ6.4cm、幅5.7cm、厚さ1.5cm、重さ81gを測る。

⑥ 砥石(図4~6、図版2・3)

砥石は小片にわれているものがかなりあり、元の点数はわからない。20~28は泥岩系の石材か。

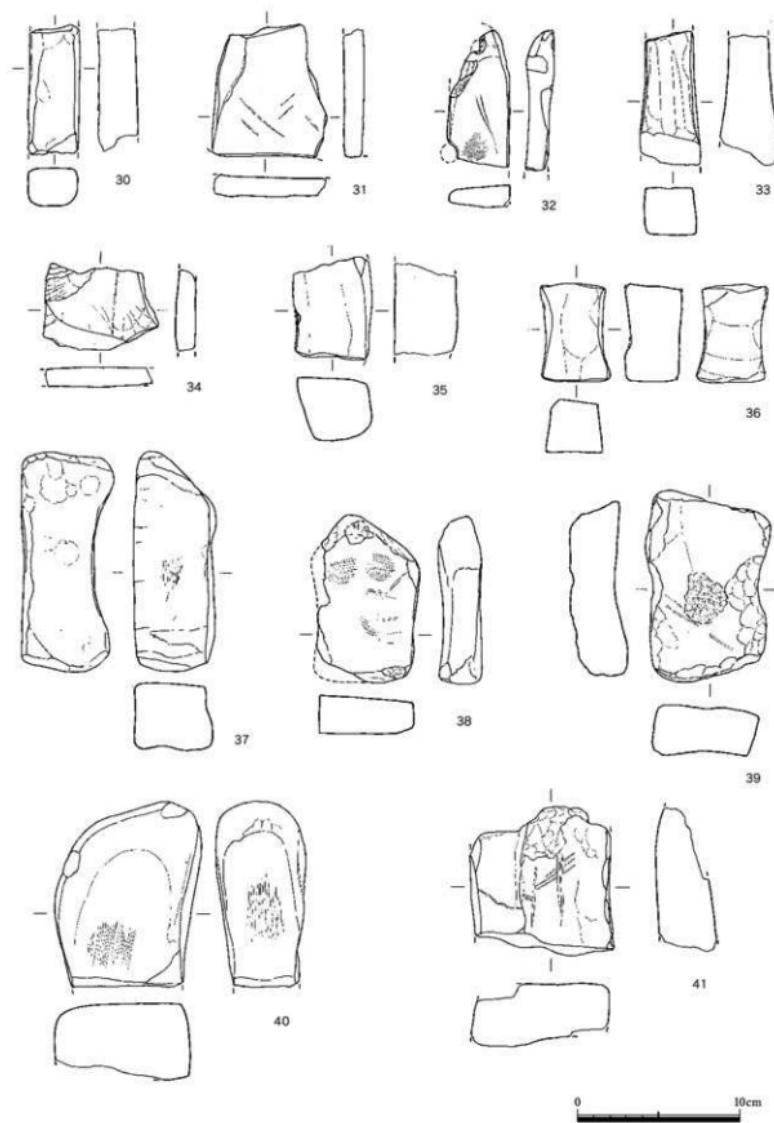


図5 砥石実測図2 (1/3)

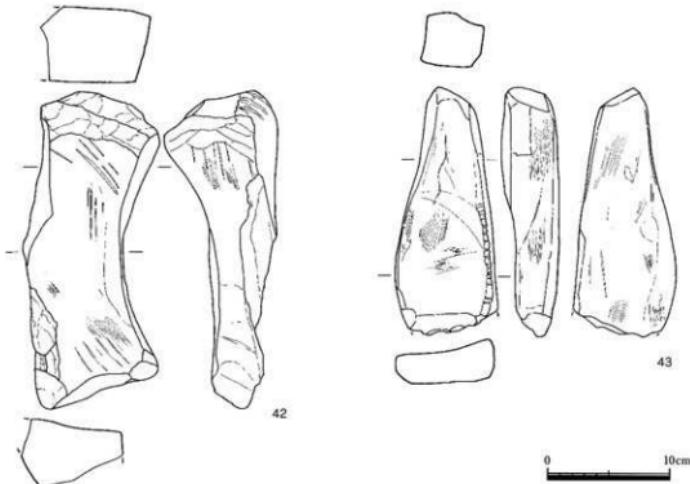


図6 砥石実測図3 (1 / 4)

20は細長い砥石である。4面のほぼ全面を使用している。現存の幅2.4cm、厚さ1.7cmを測る。SD58周辺の出土。21は片面と両側縁を使用している。反対面は途中で段が付いており使用した痕跡は無いが、自然剥落の可能性もある。SX100 C-1区出土。現存の幅2.2cm、厚さ2.0cmを測る。22は片面のみ使用痕跡がある。他の面は凹凸があり、使用痕は無い。SX100のE区出土で、現存の幅1.9cm、厚さ1.8cmを測る。23は片面と側縁1面のみ使用痕があるが、これ自体がもう少しきな砥石の剥落した可能性が強い。SX100のF-2区の出土である。24は小さいながらも完形の砥石で、長さ8.2cm、幅2.1cm、厚さ1.8cmを測る。1面をほぼ全面使用している。砥石というより本体を持って動かす研磨器のような使い方か。25は4面とも使用している。図の右側面先端の小さな1面も使用している。SX100のF-2区の出土。26は3面を使用。図の左面は線刻状の擦痕が無数についている。欠失している部分は大きく広がっているものと推察できる。現存の最大幅3.5cm、厚さ3.3cmを測る。27は4面とも使用している。最大幅・最大厚とも2.4cm、最小幅・最小厚とも1.7cmを測る。K・L-15区出土。28はE-1区下段テラス整地層内の出土。それぞれの面の形に応じて各面を使用している。現存の長さ16.0cm、最大幅4.2cmを測る。29は砂岩系の石材で、扁平で大型砥石の一部である。両面と側縁も使用している。現存の最大幅約14cmを測る。SX404出土。

30は砂岩製で、4面とも使用している。また各面の角も使用し、角が研磨によって丸みを帯びている。両端とも欠失している。SX100 E-1区出土。31も砂岩製であるが、大型の砥石が剥離したものと思われ、1面のみ全面を砥面として使用している。SX100のD-2区出土。32も剥離した砥石の一部か。SX100のG区出土。33は砂岩製で、4面とも使用。最大幅3.7cm、最小幅2.8cmを測る。SX100のG・H-19区出土。34は厚さ1.2cmの扁平な白色の石材を使用している。両面をほぼ全面使用している。一部が焼けているため黒化している。SX100のG-19区出土。35は厚手の泥岩系の石材で2面を使用している。SX352出土。36は砂岩製の砥石で、ほぼ全面使用している。一部が鉄分付

着のため黒化している。SX100 の F - 2 区出土。37 は白色の石材で、完形品である。長さ 13.1cm、幅 5.5cm、厚さ 4.8cm を測る。1 面のみをかなり使用し、側面の一部を少し使用している。SX100、D - 1 区出土。38 は 4 面とも使用している。頂部を山形に整形し、山形の上部に穿孔を施している。紐でぶら下げた携帯用の砥石と思われる。長さ 10.2cm、幅 5.8cm、厚さ 2.5cm を測る。SX111 の E・F 区出土。39 は粘板岩系か。主に片面と一側面を使用している。使用面の中央付近に敲打痕があり、砥石利用後のものと思われる。SX404 の 6 区出土。40 は SX100 の D - 1 区出土。厚さ 5cm と厚い。石材は不明。片面と側面 1 面を使用している。SX100 の H - 18 区出土。41 はやや緑色を帯びた砂岩製。4 面とも使用している。片面中央には幅 2mm ほどの線刻状の刻みとそれに切られる斜めの刻みがあり、反対面には細い線刻状擦痕が多くついている。42 は長さ 26.2cm の大型の砥石で、砂岩製。かなり多く欠失しているが 4 面とも使用しているものと思われる。SX100、H・I - 16・17 区出土。43 は先端部を一部欠き、現存の長さ 20.5cm、重さ 788g を測る。一部の面はかなり凹凸しているが、それでもほぼ全部の面を使用している。左図右端の側面との境は辺と直交するように細かな傷が無数についている。また右面は縱方向の擦痕が多くついている。E - 1 区北側下段テラス出土。

⑦ 磨石・敲石・凹石（図 7～12、図版 3～6）

いわゆる磨石を中心にを集めているが、磨石には敲打痕や一部窪んでいるものがあることから、磨いた痕跡・敲打の痕跡があるものを集めた。棒状の敲石（いわゆる敲打具）等もここに含めた。中には磨滅のため自然石との見分けがつかないものもあり、総数は判然としないが、51 点を掲載し、総数は 100 点前後かと思われ、出土石器中もっとも数が多い。いくつかの形態に分けられるが、詳細はまとめた。

44 は玄武岩製の磨石で、ほぼ全面磨いている。側面との稜線は無く、全形は卵形を成している。敲打痕がかすかに観察できる。長さ 6.4cm、幅 4.3cm、厚さ 3.7cm、重さ 153g を測る。SX509 出土。45 は玄武岩製で、片面全面を欠失している。遺存している面は全面を磨き、中央に敲打による窪みがある。窪み部分以外には敲打痕は無い。両側縁との間には明瞭な稜ができる。両側面は面と直交する方向に細かな擦痕状の敲打痕が無数ある。長さ 8.6cm、幅 7.5cm、現状の重さ 307g を測る。SX100、C - 1 区から出土した。46 は花崗岩製で、ほぼ全面を磨いている。両面は平らになり、両側面も一部を除いて磨かれ、その結果両面と両側面の稜線はほぼ垂直を成している。両側面は磨いた面が直線的になり、全体として六角形に近い平面形を呈している。両面中央には敲打痕が残っている。片面は窪むほど明瞭であるが反対面は少ない。また片面は全体が赤化しているが、敲打痕の部分のみ赤色が落ちており、使用前から赤化していたことがわかる。直径 8.9～9.4cm、厚さ 3.0cm、重さ 410g を測る。SX100 の M - 12・13 区出土。47 は石材不明。全面磨かれているが、稜線がまったく無く、研磨の人为的な痕跡がうかがわれず、あるいは自然によるものかもしれない。ただし、両面中央と両側面中央付近に敲打痕がある。SX100 出土。48 も自然により磨かれていると思われるが、両先端部が敲打により潰れている。特に細くなっているほうの先端部には敲打痕が多く残っている。片岩系の石材か。長さ 11.8cm、幅 6.8cm、厚さ 5.8cm、重さ 749g を測る。E・F 1 区中段テラス出土。49 は厚さ 5.4cm とやや厚く、両面と側面の稜線は無いものの、同じ方向に研磨状の擦痕があり、人为的に磨いたものと考えられる。両面中央・両端部・両側面中央付近に敲打痕がある。長さ 11.9cm、幅 7.9cm、重さ 791g を測る。SX404 の 4 区出土。石材は玄武岩か。50 は両面を磨いている。両面と側面の間には稜線が走る。両面中央には敲打痕がある。両側面と両端部は窪みが多く、打撃後に磨いたものか判然としないが、図の下部はほぼ打撃・敲打の後に磨いているものと考えられる。玄

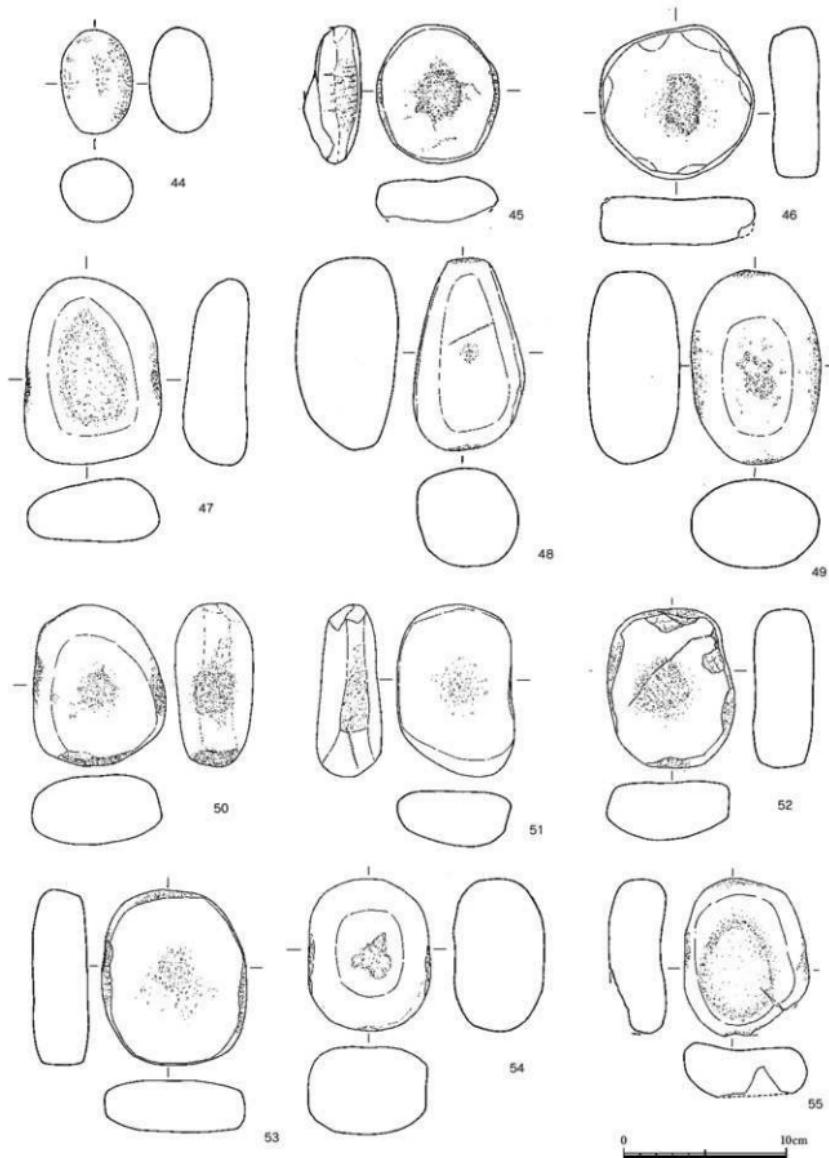
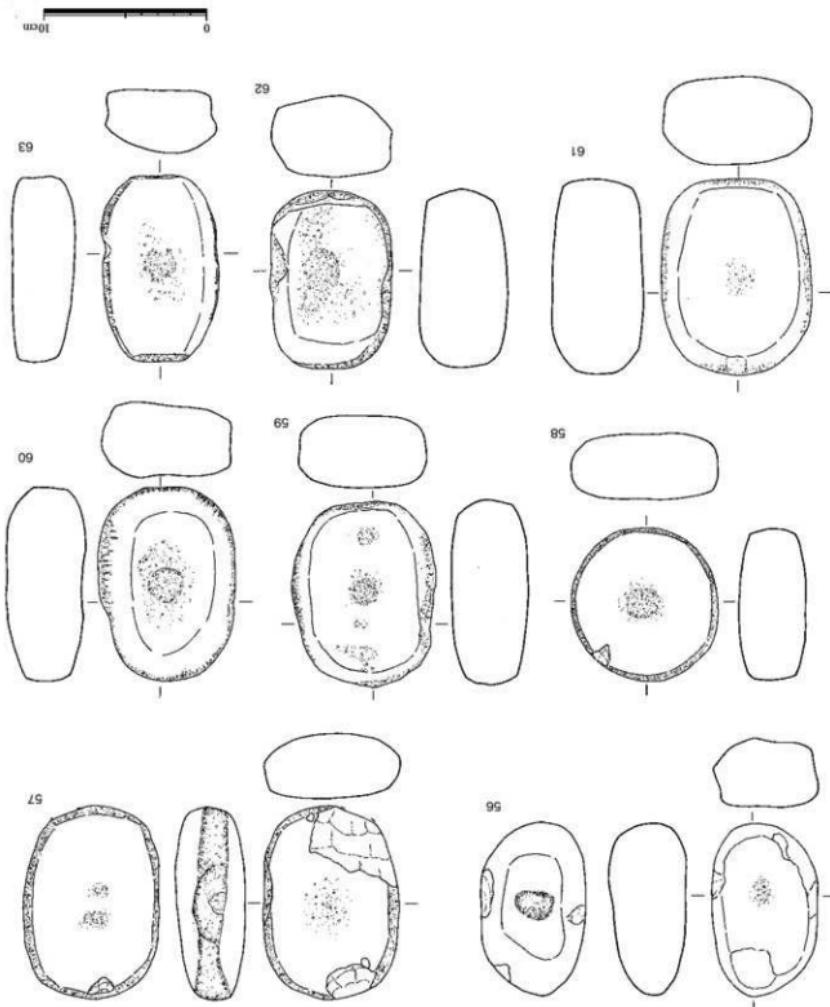


图7 磨石·敲石·凹石实测图1 (1/3)

圖 8 磷石・鐵石・四石英圖 2 (1 / 3)



武岩質の石材で、長さ 10.0cm、幅 8.1cm、厚さ 4.6cm、重さ 592g を測る。SX100 の F 区出土。51 は玄武岩製で、やや風化しているが、全体わずかに磨かれた痕跡が残る。両面中央と両端部に敲打痕がある。側面は、長さが短い方の面には敲打痕があるが、反対面は中央付近が窪んでおり、敲打により窪んだものが、その後の研磨・風化によって敲打の痕跡がわかりづらくなつたものか、あるいは元からのものか判断がつかない。長さ 10.6cm、幅 7.1cm、厚さ 4.0cm、重さ 490g を測る。F - 2 区西側斜面出土。52 はいわゆるせっけん形の磨石である。両面はかなり磨き込み、側面との稜線は明瞭である。中央部分は敲打によってわずかに窪む。上下端部にも敲打痕がかなりあり、一部剥離している。両側面はそれぞれ 2 ヶ所窪んでいる。あるいは石錘に転用したしたものとも思われるが、明瞭ではない。長さ 9.8cm、幅 7.9cm、厚さ 3.6cm、重さ 459g を測る。白い石材を使用している。SX100 の G 区出土。53 も両面をよく磨き込み、側面との稜は明瞭である。両面中央に敲打によってできた小さな窪みがある。すべての側面に、面と垂直方向に細かな擦痕状のものが観察できるが、一種の敲打痕と考えられる。両側面と上下面に小さな窪みが 1 ヶ所ずつあるが、敲打時の剥離痕か。玄武岩製で、長さ 10.7cm、幅 8.9cm、厚さ 3.3cm、重さ 603g を測る。SX100 の F 区出土。54 は厚さ 5.4cm と厚みのある製品である。全面に鉄分が付着しているため磨きの状況は明瞭ではないが、側面との間に明確な稜線は観察できない。両面中央に敲打によると思われる窪みがあり、両側面中央付近にも窪みがある。上下端部の敲打は明瞭ではない。石材は片岩系の石に似ている。長さ 9.3cm、幅 7.4cm、重さ 578g を測る。SX297 出土。55 は表面中央が大きく窪んでいる。敲打による窪みというよりは石皿のような窪みに近い。裏面は大きく欠けている。両側面中央付近が少し窪んでいるのは他と同じである。上下端部もややざらついており、敲打の痕跡と思われる。緑色片岩に近い石材を使用しているがよくわからない。長さ 9.5cm、幅 7.6cm、厚さ 3.5cm、現状の重さ 424g を測る。

56 は風化が進み、磨きの状況がよく観察できないが、側面との間に稜線は無い。ただし図の裏面はほぼ平坦を成している。表面中央は明瞭に窪みを成し、裏面中央もわずかに窪む。両側面中央付近も明瞭な窪みがある。上下端部は敲打痕等は確認できない。石材はよくわからない。長さ 10.7cm、幅 6.4cm、厚さ 4.7cm、重さ 428g を測る。SX202 出土。57 は片面（図の左面）のみがほぼ風化色に覆われている。反対面と側面にはこの風化色は無く、側面と風化色との境は稜を成していることから、磨きによって風化色が取れたことは明瞭である。ただし、風化色の面も一見磨きのような表面であるが、これは自然になったものとの判断ができる。図の左面はほぼ平坦を成している。風化面の中央付近にわずかに敲打痕らしきものが取看できるが明瞭ではない。他に敲打痕らしきものは認められないが、両側面中央近くには、他の石と同じく窪みがある。図の下側の片面を大きく欠き、同じ面の上部も若干欠いている。玄武岩製で、長さ 11.9cm、幅 8.3cm、厚さ 4.2cm、重さ 680g を測る。SX100 の F - 2 区出土。58 はほぼ円形の平面を成している。両面とも平坦を成すほどよく磨かれ、側面とは明瞭な稜を成している。両面中央には敲打による窪みがある。側面は手で触るとざらざらするが、これが敲打によるものなのか判然としない。側面には他の石にあるような窪みは無い。目の細かい花崗岩系の石材を使用している。径 9.0 ~ 9.4cm、厚さ 3.9cm、重さ 541g を測る。SX100 の C - 1 区出土。59 はほぼ全面を風化色が覆っているが、両面中央付近側面の大部分はその風化色が取れ、その部分に敲打の痕跡がある。両面とも一見は磨きがかかっているような手触りであるが、側面との境には稜が無く、風化色がかかっていることからも、石の使用以前に自然に磨かれたものと判断できる。したがって、この石は側面を敲きに使い、両面中央部には別の敲打具で何かを置いて敲いたか、ハンマーのように中央部で何かを敲いたものと考えられる。特に上下端部には敲打痕が激しくついている。また両側面には窪みが取看できる。石材はよくわからないが、凝灰岩質の石に似ている。長さ 11.4

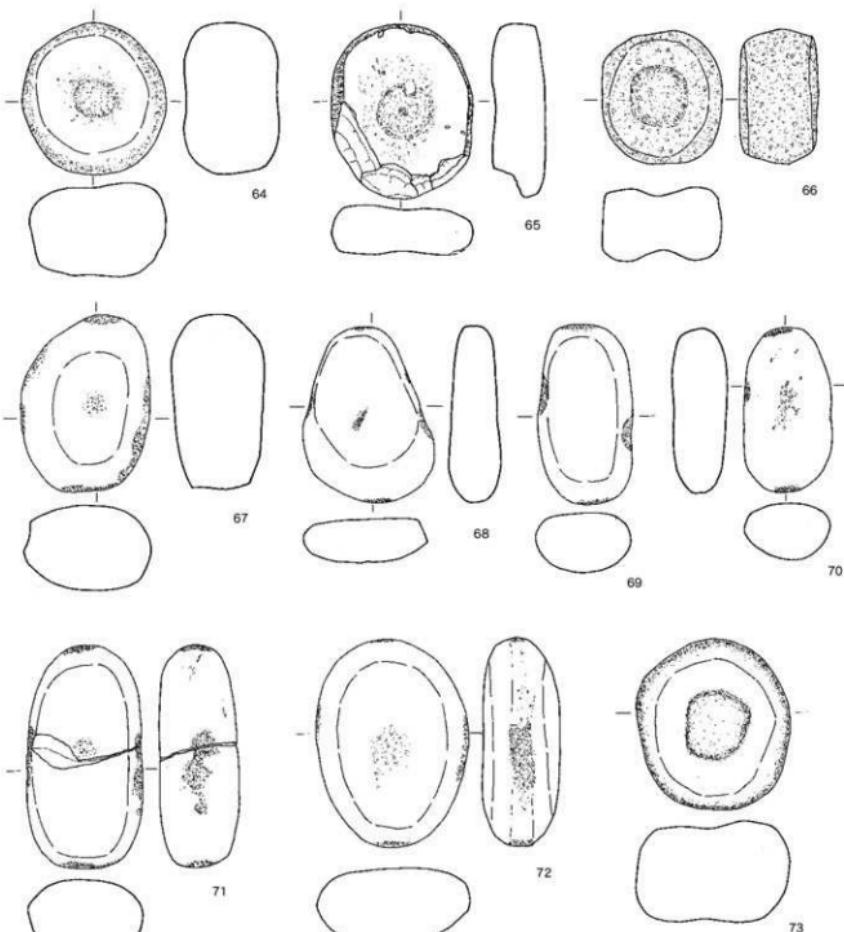


図9 磨石・敲石・凹石実測図3 (1/3)



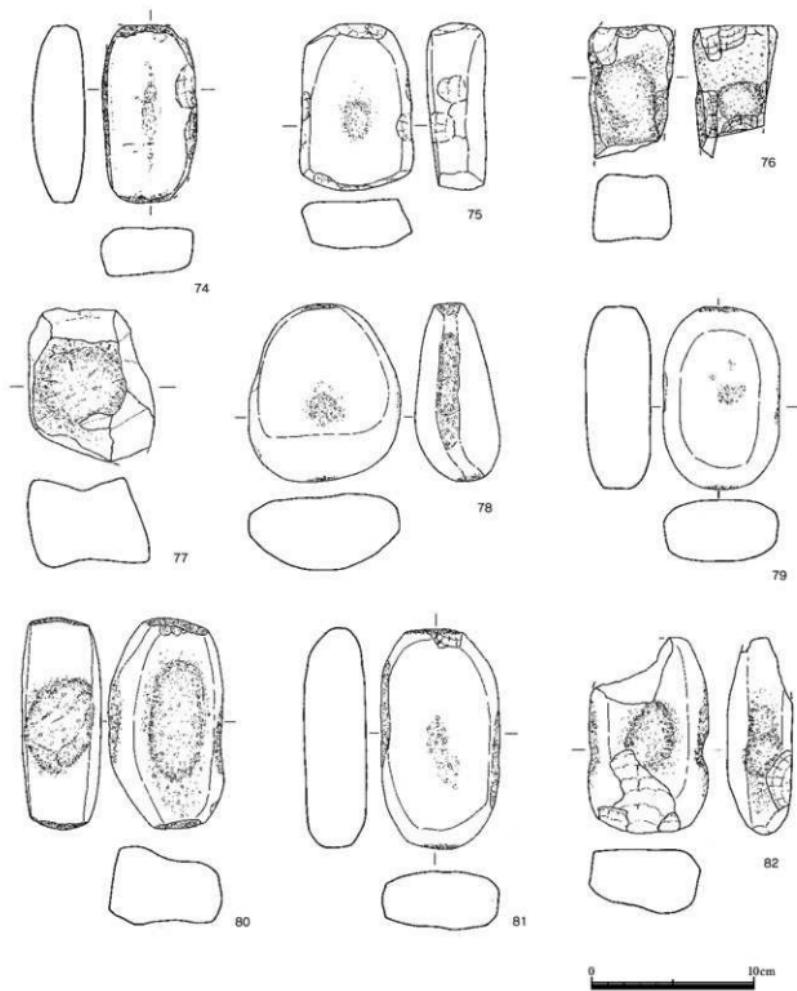


図10 磨石・敲石・凹石実測図4 (1/3)

cm、幅 8.9cm、厚さ 4.5cm、重さ 742g を測る。SX100 の E-2 区で出土した。60 は全面風化色は無く、表面の手触りもスベスベしているが、稜線は無く、人為的な磨きを感じられない。両面中央部は大きく窪み、その周辺には敲打痕が残っている。側面のほぼ全面に、面の方向と直交する短い擦痕状のものがり、敲打痕と考えられる。図の下端部は敲打によって一部が平坦になっている。また両側面に窪みがある。玄武岩製で、長さ 11.9cm、幅 8.4cm、厚さ 4.6cm、重さ 853g を測る。SX100 の C-D-1 区で出土した。61 は花崗岩製で、両面とも磨かれているような印象を受けるが明瞭では無い。両面中央にわずかに敲打痕があり、側面はほぼ全面敲打のようである。特に図の下端部は平坦になるほど敲打されている。両面中央や下部がわずかに窪んでいる。長さ 12.1cm、幅 9.2cm で、厚さは 5.4cm と厚く、重量は 1 kg を超えて 1075g を測る。SX404 の 4 区で出土した。62 は 57 と同じく、片面に風化色が残る。反対面は点々と風化色が残り、風化色が無い部分は磨きもしくは敲打によって風化色が取れたものと思われるが、表面には小さな凹凸があり、おおむね敲打によるものと思われる。風化色がある面も中央や右寄りだけ風化色がとれており、その部分には敲打が成されている。側面はほぼ風化色が無く、ほぼ全面に敲打痕が残り、点々と小さな窪みが認められる。玄武岩製で、長さ 11.0cm、幅 7.4cm で、厚さ 5.2cm と厚い。重さは 779g を測る。SX100 の F 区で出土した。63 は白色の石材を用いている。片面はほぼ平坦で、反対面と比べてツルツルしている。反対面の中央近くにはわずかに敲打痕がある。両端部はほぼ平坦を成しているが、図の下端面はむしろ窪んでいる。敲打によるものと考えられる。両側面には大きな窪みが 1 ヶ所と小さな窪みが 1 ヶ所あるが、この石を持つと、この窪みが指にかかるって良い具合ではある。長さ 11.5cm、幅 7.0cm、厚さ 3.8cm、重さ 502g を測る。F-1 区中段テラス上部から出土した。

64 はほぼ円形の平面形で、厚さ 5.8cm と厚い。両面の磨きは明瞭ではなく、中央付近に敲打による窪みができている。側面はほぼ全面敲打に使われたのではないかと考えられる。また側面に窪み等は無く、他の石とは異なっている。花崗岩製で、長さ 9.4cm、幅 8.8cm、重さ 756g を測る。SX404 の 4 区出土。65 は両面とも風化色に覆われている。中央部分に敲打による窪みがあり、その部分だけ風化色がとれている。従って磨きは施されていないものと判断される。側面には風化色が無く、面と直交する短いしわ状の痕跡が多く残っている。基本的に敲打の道具と思われ、両側面の一部が欠けているのは敲打の際の打撃時によるものか。片岩系の石材で、長さ 10.8cm、幅 8.6cm、厚さ 3.3cm を測る。SX100 の C-2 区出土。66 は小さく厚い花崗岩の両面中央が大きく窪んでいる。敲打による窪みというよりは、一見すると石皿のように深い窪みであるが、くぼみを詳細に観察すると細かな敲打痕が無数についている。側面にも同じように敲打痕が無数についているが、窪み状のものは無い。敲石に分類されるものである。SX100 の C 区出土で、長さ 8.3cm、幅 7.3cm、厚さ 4.6cm、重さ 515g を測る。67 は両面ともツルツルしているが、自然によるものか磨きによるものか判断がつかない。表面中央はわずかに敲打状の痕跡があるが明瞭ではない。両端部、特に図の下端部には敲打痕が多くつき、平坦面を成している。また両側面の下部には小さな窪みが 1 ヶ所ずつある。これも敲石に分類できそうである。花崗岩製で、長さ 10.9cm、幅 7.9cm、厚さ 5.71cm、重さ 715g を測る。SX100 の G-1 区から出土した。68 は平面形が三角形に近い。両面は風化色が残り、中央付近にわずかに敲打痕が残る。側面には特に敲打痕が多くつき、窪みが 1 ヶ所ずつある。また上端部にも敲打痕が多くついている。白い石材で、長さ 10.9cm、幅 8.0cm、厚さ 3.1cm、重さ 365g を測る。SX100 の G-2 区出土。69 は白色の石材の全体に黄色い風化色がついているが、磨きや敲打が施されている部分は風化色がついていない。表面はほぼ全面風化色で、下部中央に敲打を施し、その部分は風化色を帯びていない。裏面は平坦に近いが、風化色がとれており、磨きと思われる。両側面・両端部は全体的

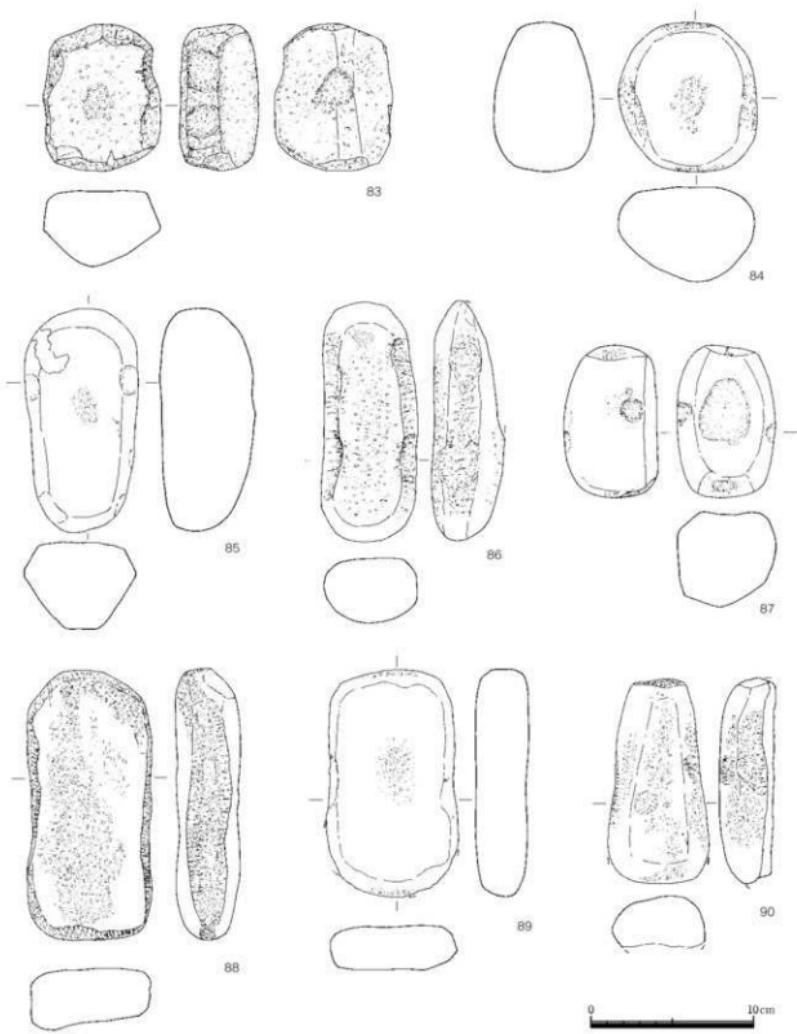


图11 磨石·敲石·凹石实测图5 (1/3)

に敲打痕があるが、特に両端部は敲打によって平坦化している。また両側面にはそれぞれ異なる位置に窪みが作られている。長さ11.1cm、幅5.8cm、厚さ3.7cm、重さ386gを測る。SX521の出土。70は磨きの痕跡はほぼ観察できず、両面中央から上部、一部を除く側面・端部に敲打痕が残っている。特に両端部に多く敲打がなされ、頂部は敲打によって一部が剥離している。図の左側面も敲打によつてやや窪んでいる部分が2ヶ所ある。ただし他の石にあるような両側面にやや大きめの窪みは無い。長さ10.0cm、幅5.4cm、厚さ3.2cm、重さ312gを測る。E-1区北側テラス出土。凝灰岩系の石材か。71は半折している。花崗岩系の石材で、全体がツルツルしているが、側面との間に稜は無く、自然による磨きか人為的なものか判断がつかない。両側面中央付近と両端部に敲打痕があり、特に端部には激しく付き、一部剥落している。また両側面もそれぞれ1ヶ所ずつ敲打による小さな窪みがある。長さ13.6cm、幅7.3cm、厚さ4.7cm、重さ729gを測る。SX111のE-2区出土。72も側面との間に稜が無く、全体同じ調子で見分けがつかないが、図の表面が平坦になっており、あるいはこの面は磨きがかかっているかもしれない。両面中央と側面中央付近及び両端部に敲打痕がついているが、量的に多くは無い。また剥離しているところや窪みになっている部分も無い。花崗岩系の石材を使用している。長さ12.7cm、幅9.4cm、厚さ4.6cm、重さ825gを測る。SX100のF-2区出土である。73は平面形が円形に近く、厚さ6.0cmと厚い。両面中央には一見石皿のような窪みがある。側面には敲打痕が多くついている。平面形は五角形に近くなっているが、これは側面を磨いた結果であろうか。形状・厚み・窪みなど全体として66に近い。花崗岩製で、長さ10.2cm、幅9.2cm、重さ1065gを測る。SD511下層出土。

74は縦断面形を見ると、表面は平坦で、裏面は両端部の方が薄くなってしまっており、磨きによる結果である。図の右側面にも磨きの痕跡が残っているが、両側面・両端部には敲打痕が多く残り、両端部は敲打による小さな剥離が見られる。両側面にも敲打によって窪んでいる部分がある。また裏面中央付近にも敲打痕が残る。片岩系の石材で、長さ11.0cm、幅5.8cm、厚さ3.2cm、重さ382gを測る。SX100のF-2区の出土。75は両面磨かれているが、片面は平坦面を成し、反対面はかまぼこ状を成している。両面中央付近に小さな窪みがある。両側面には2ヶ所ずつ、両端部にも2~3ヶ所の窪みがある。全体が磨きまたは摩耗のため明瞭には見えないが、両面中央は敲打によるもので、両側面・端部の窪みも敲打によるものであろう。花崗岩製で、長さ10.3cm、幅7.0cm、厚さ3.5cm、重さ479gを測る。SX100のG区出土。76は途中で折れており、遺存部は直方体に近い形態を呈している。端部面を除く4面のすべてに敲打によりできた窪みがある。窪みの中央から周辺にかけて敲打痕が無数についている。切断面近くに別の窪みも看守できる。また端部面は平坦に近いが、やはり敲打痕が残っている。磨きの痕跡は見当たらない。現存の長さ8.3cm、幅5.3cm、厚さ5.0cmを測る。SX100のE-2区出土。77は砂岩製の角礫を使用し、一部を欠失している。各面に敲打による窪みが見られる。図の表面には大きな窪みが1ヶ所、他の面には小さな窪みが1~2ヶ所ある。磨かれているとみられる部分は無い。SX100のF-2区出土で、長さ9.4cm、幅7.7cm、厚さ5.5cm、現存の重さ518gを測る。78は花崗岩製の円礫を用いている。礫には風化色が付き、礫自体は自然に磨かれたと考えられる。礫の側面はすべてと両面中央付近が敲打によって風化色がとれ、表面が平坦化している。両側面に1ヶ所ずつ敲打による小さな窪みがついている。窪みは、左側面は中央より上、右側面中央より下にある。SX100のF-2区出土で、長さ10.9cm、幅9.3cm、厚さ4.9cm、重さ676gを測る。79は両面のはば全面を磨いていると思われる。両面とも中央付近にわずかに敲打痕が残っている。両側面ははば全面敲打痕があり、両側面とも中央付近が窪んでいる。両端部には敲打痕が多くあり、部分的に平坦化している。花崗岩製で、長さ11.1cm、幅7.1cm、厚さ3.8cm、重さ530gを測る。SD-014出土。

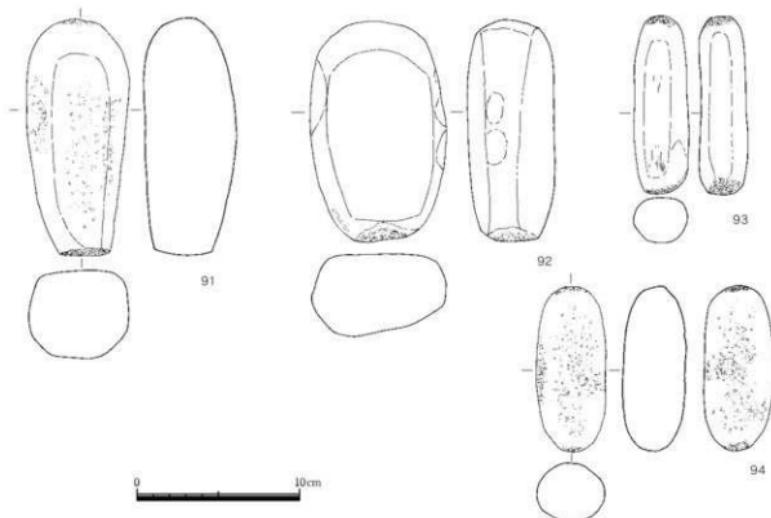


図 12 磨石・敲石・凹石実測図 6 (1 / 3)

80は玄武岩製の角礫を用い、その全面を敲打具として利用している。両面は中央に大きな窪みができる。その中央から周辺に敲打痕が残っている。表面には線状の痕跡も見られる。図の右側面は2ヶ所の窪み、左側面は1ヶ所の窪みがあり、両端部は全体として平坦化し、小さな窪みができる。磨きの痕跡は確認できない。長さ12.9cm、幅7.0cm、厚さ4.4cm、重さ771gを測る。南斜面G区包含層中層出土。81は両面を平坦になるまで磨いている。両面中央には敲打痕が少量残っている。両側面も敲打によって平坦化し、側面との境の稜が明確な部分がある。中央付近は少し窪んでいる。両端部も敲打によって平坦化し、一部剥落している。花崗岩製で、長さ13.4cm、幅7.2cm、厚さ3.6cm、重さ530gを測る。I-20区整地層下部から出土した。82は玄武岩製で、折れている。図の下部が弥生前後後半の石斧頭部の形態と似ており、あるいは石斧の転用品かもしれない。表面は磨きを施していると思われ、中央部分が敲打によって窪んでいる。両側面は敲打痕が全面につき、中央付近が窪んでいる。遺存している部分の端部は両側から剥離を加えており、上述のように石斧の頭部、または未製品の刃部の可能性もある。現存の長さ12cm、幅7.3cm、厚さ3.8cm、重さ508gを測る。

83は断面三角形の柱状節理で剥落した玄武岩の破片を利用している。三角形の頂部中央には敲打による小さな窪みがつき、反対面中央にも敲打痕がわずかに残る。両側縁部分にはともに2ヶ所の窪みがある。両端部面にも敲打が施され、それぞれ2~3ヶ所の窪みが認められる。磨きの痕跡は無い。SX202の出土で、長さ8.9cm、幅7.2cm、厚さ4.7cm、重さ489gを測る。84は玄武岩製の円礫を使用している。片面は磨きにより平坦となり、その中央付近にわずかに敲打痕が残る。反対面の断面山形を呈している部分にも敲打痕が少量観察できる。側面も敲打痕が残り、5、6ヶ所の窪みができる。F·G-16·17区出土で、長さ9cm、幅8.5cm、厚さ6.1cm、重さ748gを測る。85は断面三角形を呈し、その各面が平坦に成るほどよく磨かれている。2面には敲打痕は無く、図の表面のみ中

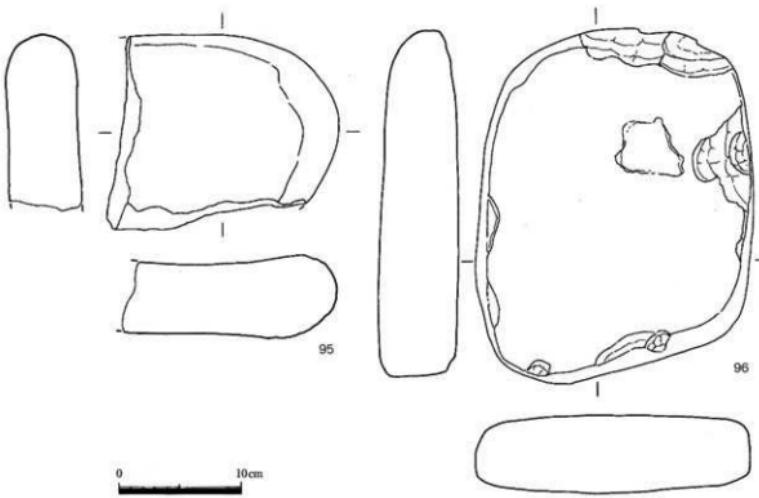


図13 石皿・台石実測図（1/4）

央付近にわずかに敲打痕が確認できる。また各面の境の各辺上のほぼ同じ位置に窪みがある。両端部は敲打痕が明瞭には見えない。花崗岩製で、J-15・16区出土。長さ13.7cm、幅5.3cm、厚さ5.5cm、重さ757gを測る。86は長めの玄武岩を使用している。一見石斧の転用品のようであるが、剥離痕や研磨痕は、図の上端の一部を除いてまったく観察できない。剥離をほぼ全部叩き潰したと考えられなくもないが、その場合、図の上が刃部となるが、玄武岩製石斧ではきわめて異形である。ほぼ全面に敲打痕が付き、特に両側面に多くついている。裏面上半部は、図の上（石斧であるなら刃部）からの打撃によって大きく剥離している。長さ14.8cm、幅5.9cm、厚さ4.4cm、現状の重さ602gを測る。SX100のE-2区で出土した。87は1面が丸い断面三角形を呈している。ほぼ全面磨きを施しているような印象を受ける。平坦な2面の内1面は中央部が窪んでいる。丸い面の両側縁にそれぞれ窪みが1、2ヶ所ある。この3面はいわゆる敲打状を呈している部分は少ない。両端部も平坦状を呈しており、部分的に窪んでいる。両端部には敲打痕が多く残っている。花崗岩製で長さ9.4cm、幅6cm、厚さ5.6cm、重さ507gを測る。SX404の4区出土。88は平たい長方形を呈している。両面に部分的に磨きの痕跡が認められる。磨き以外の部分には両面・両側面・両端部に粗い敲打痕、線状の敲打痕がかなり多く残っている。両面と両側面に1～2ヶ所窪みがあるが、相当量の敲打痕がついており、くぼみの部分だけ敲打の状況が異なるわけではなく、あるいはもともとの石材の窪みかもしれない。ひたすら敲打に使った石、という表現がよくあう石器である。玄武岩質で、長さ16.6cm、幅7.5cm、厚さ3.8cm、重さ850gを測る。西側谷部遺構検出面で出土した。89も平たい長方形を呈する。表面がかなり風化しており、磨きや敲打の判別がつきにくいが、両面中央部と両側面中央部付近が若干窪んでいる。両面に比べて両側面と両端部の凹凸が激しいことから、敲打を受けているものと判断できる。花崗岩製で、長さ14cm、幅8.1cm、厚さ3.1cm、重さ697gを測る。SX100のG-6区出土。90は玄武岩製で、図の反対面を全面欠失している。86と同様に一見石斧の転用品に見え、頭の形態は

中期前半の今山産石斧の形態に近い。剥離の痕跡はうかがえないが、磨きの後に全面敲打を受けていたためとも考えられる。表面中央近くに窪みがあり、両側面も1ヶ所ずつ窪みがある。石斧の刃部にあたる部分も敲打によって潰れている。長さ12.5cm、幅6.1cm、現状の重さ403gを測る。SX100のE-1区で出土。

91は厚手で棒状の花崗岩を石材とする。断面形は、半分が平坦な面を成し、残り半分が円状を成している。平坦面は2面ともよく磨かれ、部分的に敲打痕がある。円状部分には敲打痕が多く残り、側縁部に1ヶ所窪みがある。両端部も叩かれていると考えられ、特に図の下端部は平坦面を成している。長さ14.6cm、幅6.3cm、厚さ5.7cm、重さ788gを測る。SX100のF-2区で出土した。92はやや大型の花崗岩を使用している。断面形は台形に近く、一方の側面がもう片方の側面の倍くらいの幅がある。短い方の側面と両面には明瞭な稜があり、両面はほぼ平坦であることから人為的に磨いているものと判断できる。両側面には小さな窪みが1ヶ所ずつある。両端部には敲打痕がつき、片側は平坦化している。長さ13.7cm、幅8.3cm、厚さ5.2cm、重さ997gを測る。SX111のD-1区出土。93は全面すべすべして磨かれているが、自然によるものか人為的なものか判断がつかない。ただし、1面が平坦になっており、人為的な磨きの可能性がある。両端部には敲打痕が見られるが、端部以外には敲打痕は認められない。長さ11cm、幅・厚さ3.5cm前後、重さ201gを測る。SX100のF-1区出土。石材はよくわからないが、付近の河原石を使っているようである。94は断面は円形に近い。両端部を含めたほぼ全面に敲打痕がついている。自然に磨かれた花崗岩系の石材を利用している。敲打痕は小さく剥離している部分も無いことから、こつこつと敲打したような印象を受ける。長さ10.1cm、幅・厚さ4cm前後、重さ256gを測る。SX100 D-1区出土。

⑧ 石皿・台石（図13、図版6）

95は花崗岩製の石皿である。両面とも使用しているが、特に図の表面をよく使っている。現状の長さ19.1cm、幅16.0cm、厚さ6.5cm、を測る。F-2区の中世水田面下から出土した。96は玄武岩質の石材で、表面はよく磨かれており、側面・裏面は自然面のままである。石皿と呼んでもよいかもしないが、まったく窪んでいないことから台石に分類できる。長さ29.1cm、幅22.7cm、厚さ6cm、重さ8990gを測る。SX404の9区で出土した。

3) 木製品

本調査では、谷部のSX100・104・111・404から古墳時代後期（6世紀～）～奈良時代（8世紀）にかけての工具（※Fig.101・102-13・14・18～20）、農具（※Fig.102-23～25）、編み具（※Fig.101・102-9・10・17）、運搬具（※Fig.102-22）、漁労具、武器・武具（※Fig.101-3）、馬具（※Fig.101-15）、服飾具（※Fig.101-102-4・16）、容器（※Fig.101-8）、食事具、調度、祭祀具（※Fig.101-102-2・21）、遊戯具、文房具（※Fig.101-1）、建築部材などの木製品が、また、SE321からは中世の曲物など（※Fig.101-28・29）が出土している。木製品の一部はすでに報告済みである（※吉留秀敏編2010『元岡・桑原遺跡群16-第18次調査の報告2-』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1102集）。ここで報告する木製品は、整理・報告書作製過程で次回報告予定となっていたもので、古墳時代後期から奈良時代にかけてのものが主体を占めている。また、ここでは、日本列島出土木製品分類表（伊東隆夫・山田昌久編2012『木の考古学』海青社）に準拠し、分類群ごとにふれていく。

工具（図14）刀子・槌・製陶具がある。1は広葉樹の芯持ち材を用いており、中央部に幅1.4cm

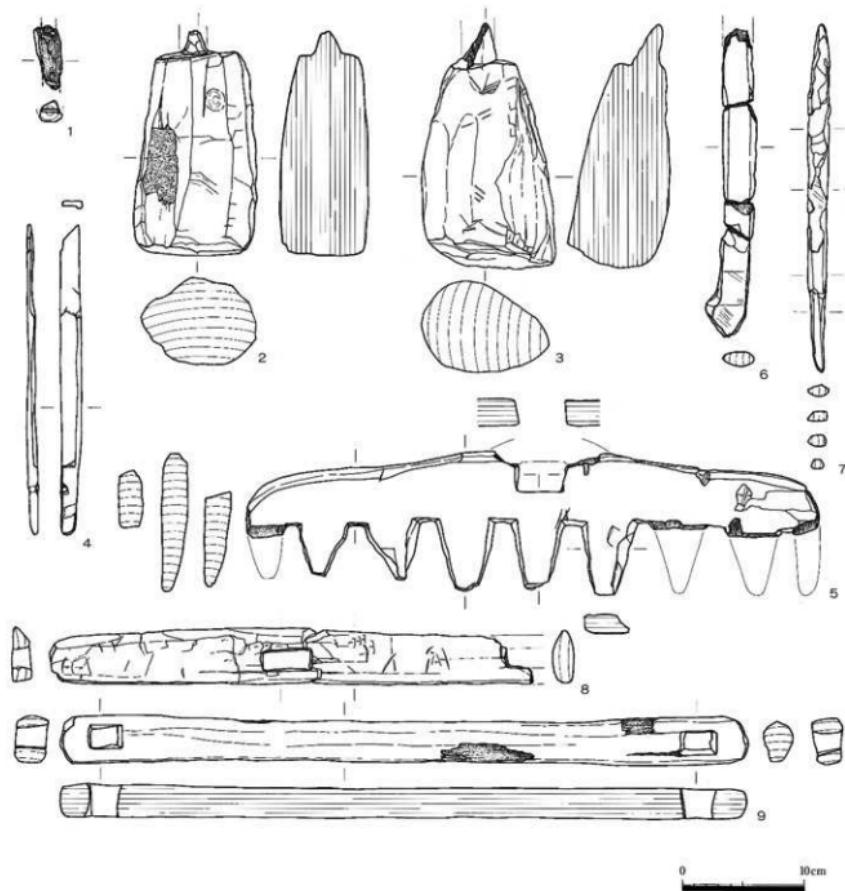


図14 木製品実測図1 (1 / 4)

で厚さ1.4mmの削り抜きがみられることから刀子の鞘と考えられる。2・3は広葉樹の割材を用いており、対をなす同一個体の可能性が高く掛矢といえる。4はスギの板目取りを用い、板状をなし、片方端部は面取り加工で丸く仕上げた基部とし、少し厚めの背を造り出し、他端近くから薄くさせ、先端は背から斜めに仕上げ、基部近くには保管用の紐通しと考えられる穿孔があり、箆状品で製陶具として使用されたと考えられる。長さ25.3cm、幅1.6cm、最大厚6mmを測る。1~4はSX404出土。

農耕土木具(図14) 鋸・鎌・田下駄がある。5はカシの柾目取り材を用い、背中央に方形着柄孔をもち、直柄を組合わせる横鋸で、9本の刃を造り出している把(サラエ)であるが右端刃欠損後は8本の刃で使用したと考えられる。器長(11.5cm)、器幅46.8cm、最大厚2.2cmを測る。SX100出土。

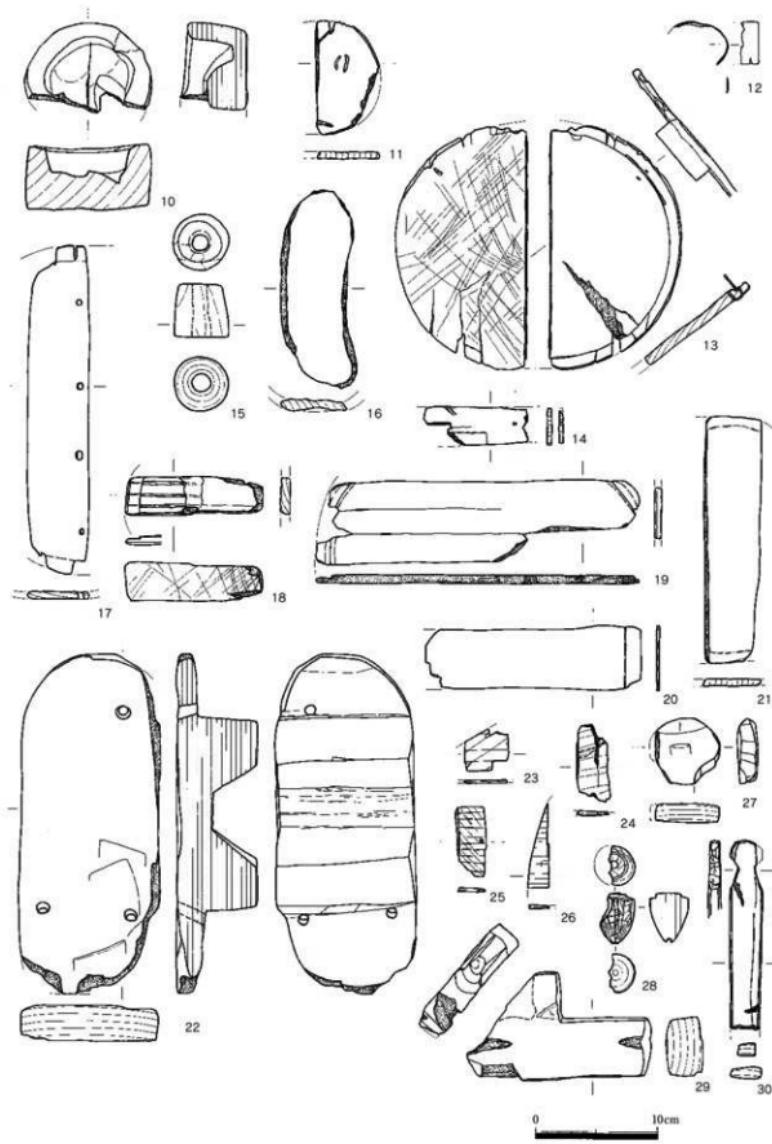


図15 木製品実測図2 (1/4)

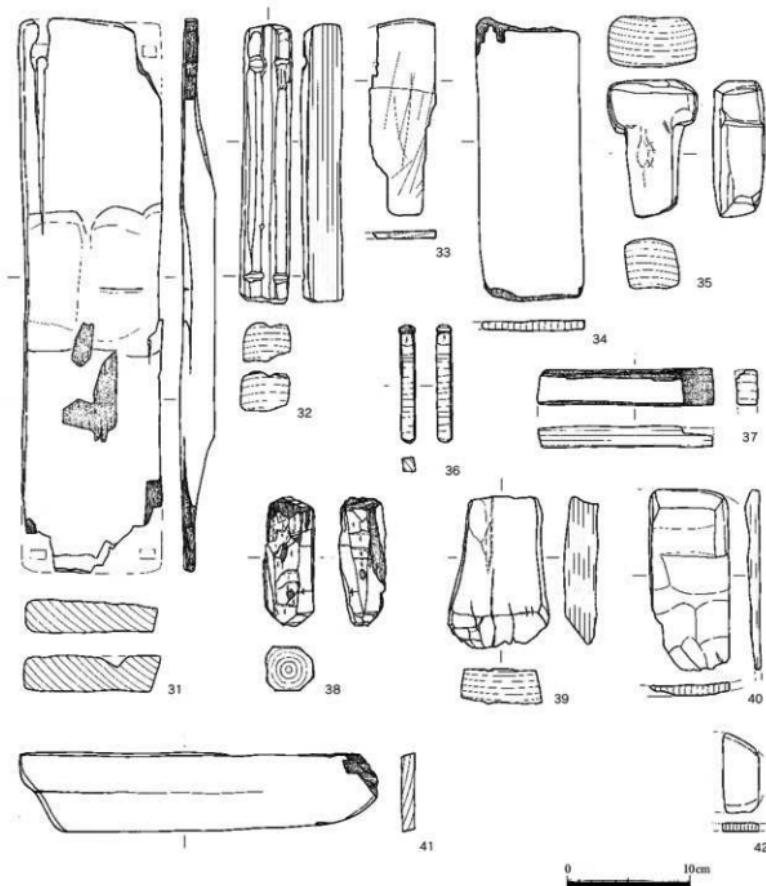


図 16 木製品実測図 3 (1 / 4)

6は広葉樹の柾目取り材を用い、基部端に手掛かりを造り出した鎌柄であるが、鉄鎌着部は欠失している。残存長25.4cm、基部幅3.3cm、最大厚(1.3cm)測る。8はヒノキの板目取り材を用いた幅4~4.5cmの板材で端から17.5cmに3.9×1.5cm前後の長方形枘孔を穿ち、16cmあけて長方形枘孔を穿っているが欠失している。厚さ1.8cmを測り角型田下駄の柄か。9はスギの柾目取り材を用いた56.5×3.3~3.8×2.5~2.7cmの角材で両端近くをやや幅広とし、端から2.4cm前後に2.2×1.7cmの枘孔を穿っている。枘孔中心間は48.8cmあり、馬鍔のハンドル幅として使用された可能性がある。組み合わさった状態で出土していないため器種としては、施設材・器具材の孔段有りの棒である。6・8・9はSX111出土。

漁労具（図14・7） イスノキの柾目取り材を用い、削り加工により柄組合せ部を細く造り出し、先端を尖らせており。ヤスリで器長28.7cm、器幅1.8cm、最大厚1cmを測る。北側テラス整地層最下部の黒灰色砂質土出土。

武器・武具（図15） 23～26はいずれもスギの柾目取り材を用い3～5mmの厚さとし、片面に横・斜めに等間隔で刃線痕があり、綴り合せタイプの板物短甲と考えられる。27はスギの柾目取り材を用い面取り加工で端を円形の板に仕上げている。前回報告の※3と対をなすものと考えられ、刀装具とされているが器具材の板といえる。すべてSX404出土。

服飾具（図15） 22はスギの柾目取り材を用いた一本造りの連歛の下駄である。左足用で、長さ27.8cm、幅11.5cm、高さ6.5cm前後を測る。SX404出土。

容器（図15） 刃物と曲物がある。16はスギのナメ取り材を用いた刃物容器の底で鉢か。SX111出土。10は広葉樹の割材を用い、5cm強の円筒を造り片面から削り貫き作業を始めている。SX404出土。13はスギの柾目取り材を用いた曲物の底・蓋で径20cm強の外縁を1cmほど薄くし、スギの柾目取り材を用いた高さ1.6cmの側板を組合せてサクラ皮で固定している。なお、裏面には無数の刃線痕がみられる。18・11も同種で18はスギの柾目取り材を11は柾目取り材を用いている。12はサクラ皮で結合部材として使用するため保管されたもの。15は広葉樹の芯持ち材を用いた容器の栓で芯が抜けたか。11・13・17はSX100、12・15・18はSX404出土。

食事具（図15） 14・21はスギ、19はヒノキの柾目取り材を用いた御敷の底・蓋板で、外縁から1.2cmを薄く仕上げ側板組合せ部を造り出している。14は補修組合せのためと考えられる小孔がみられる。20はスギの柾目取り材を用いた御敷の側板か。14は谷底の溝群、19・21はSX404、20はSX100出土。

調度（図16） 31はスギのナメ取り材を用いた指物椅子の座板で、中央を抉り、小口近くに脚組合せのための方形小孔を4孔穿ち、裏面は両小口を薄くなるように仕上げている。45×11.7×1～3cmを測り、SX404出土。

遊技具（図15） 28は広葉樹の芯持ち材を用い丁寧な削り加工で紡錘形に仕上げた独楽。最大径3.2cm、高さ4cmを測り、約半分遺存し、芯は抜けたか。SX404出土。

計量具・文房具（図15・16） 36はスギのナメ取り材を用いた方形の棒で、端部近くに紐結びのためと考えられる浅い切り込みを、4面には3～8mmの間隔で刃線痕を巡らせている。秤か。SX010出土。30はスギの柾目取り材を用いた札と考えられる。厚さ1cmあることから角型田下駄の横木の可能性もある。SX404出土。

建築部材（図16） 35はスギの柾目取り材を用いた結合補助材の栓。SX404出土。

器具材（図15・16） 板と棒がある。29・33はスギの柾目取り材を用いた板で、29は丁寧に面取りし、レ字状に整形しており、返し面に凹まりを造り出している。33は孤をなす端部があり、片面に刃線痕があることから曲物の底・蓋の可能性がある。34・37・40・42はスギの柾目取り材を用いた板で、42はハケ目工具の可能性がある。41はヒノキの柾目取り材を用いた板、39は広葉樹の柾目取り材を餅田板である。32はスギの柾目取り材を22.6×4×3.2cmに整形した棒で、小口近くの一画高いところに何かに紐結びし固定するためにV字の刻みをいれている。38は芯持ちの棒で、片方を尖りぎみとし、他端は粗い面取り加工を加えている。楔の可能性あり。29・32・37はSX100、40はSX111、33・34・38・39・41・42はSX404出土。

（山口謙治）

3. おわりに

第18次調査は、冒頭でも述べたように当市職員吉留秀敏が発掘調査し、すでに4冊の調査報告書が刊行されている。吉留は3冊目の報告書制作前に病魔に襲われ、3冊目の報告書刊行を予定より1年遅らせ、さらに予定の半分以下で刊行せざるを得なかった。その後、4冊目の報告書の準備を行っていたものの、その刊行を果たすことなく、平成25年3月5日に逝去された。奇しくも57歳の誕生日の前日であった。

その後、未報告の遺物について米倉が平成26年度に4冊目の報告書を刊行し、包含層出土遺物の内、土器・剥片石器・礫石器の一部について報告を行った。今回、残りの礫石器と木製品の報告を行い、第18次調査についてすべての報告を行うことができた。

第18次調査の全体像については、吉留が報告した3冊の報告に凝縮されている。第1面は近世・中世で、12～14世紀には、方形の造成面を複数形成し、建物・井戸など生活遺構の他、水田も營まれている。第2面は奈良時代後期頃で、同じく造成面を作り出し、建物群を造営している。そのほか製鉄炉・鍛冶炉などがある。第3面は奈良時代前期頃で、造成区画の中にある第4面は古墳時代後期で、竪穴住居と建物から成る。何度も造成を繰り返した結果、2mを超す盛土造成となり、広い平野部の無い糸島半島における遺跡の立地の典型例として今後取り上げられることであろう。

さて、本報告書では、調査区内から出土した礫石器の内、石斧以外の石器と木器を掲載した。その多くは谷部中央を流れる流路SX100とSX404から出土したものである。この流路は古代まで存続し、特に古墳時代後期から古代の土器を大量に包含している。また量的には多くは無いものの、旧石器時代・縄文時代・弥生時代遺物も包含している。

出土した礫石器の内、特に磨石・凹石の類は、総点数は計数しきれていないが、実測した分だけで51点あり、概ねこの2倍量はある。その中には非常に特徴的なものがいくつかある。

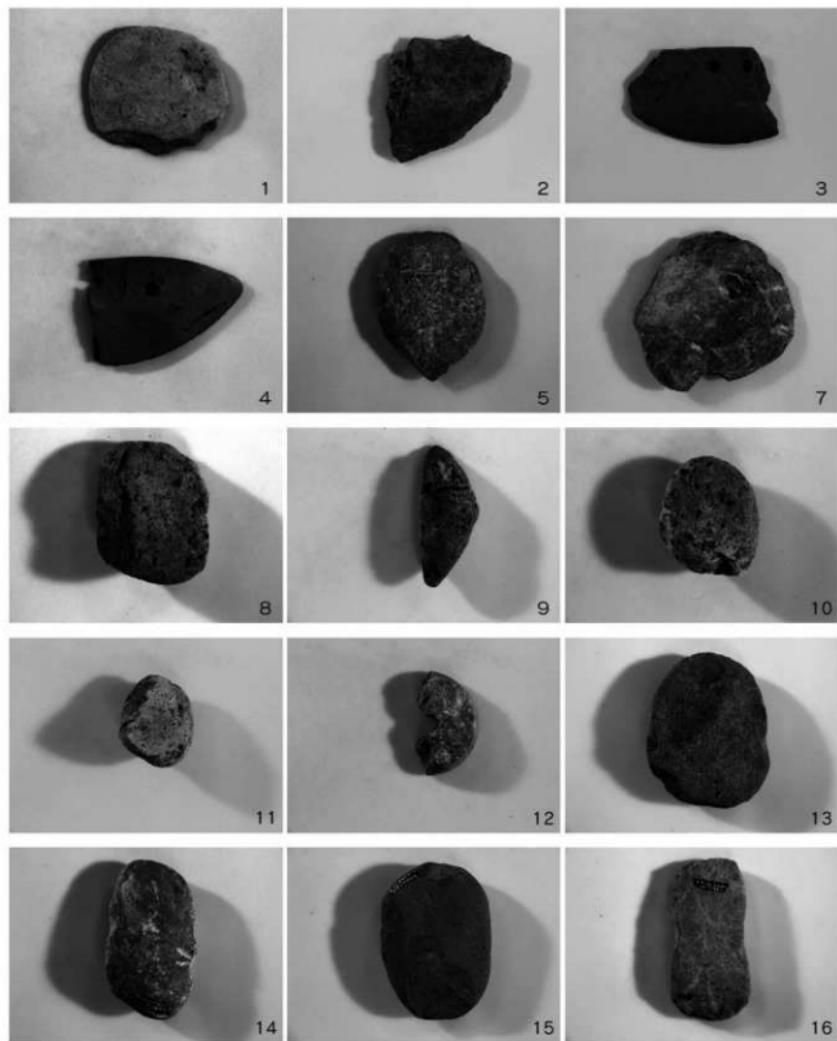
まず第1に両側縁の中央からやや外れた位置に窪みを有するものである（例えば53）。あたかも石錘のような形態を成しているが、この窪みは剥離などによるものではなく、敲打の結果としての窪みと思われる。両端部にも敲打が多くみられ、激しいものは平坦となっている。また両面中央にも敲打があり、中には少し窪んでいるものもある。ミガキがかかっているものとかかっていないものがある。量的には多く、図化した内の半分を超える。

2つ目は両面中央部が大きく窪んでいるものである（例えば77）。その窪み方はあたかも石皿のようである。側縁部はほぼ全面叩いている。量的には少ない。

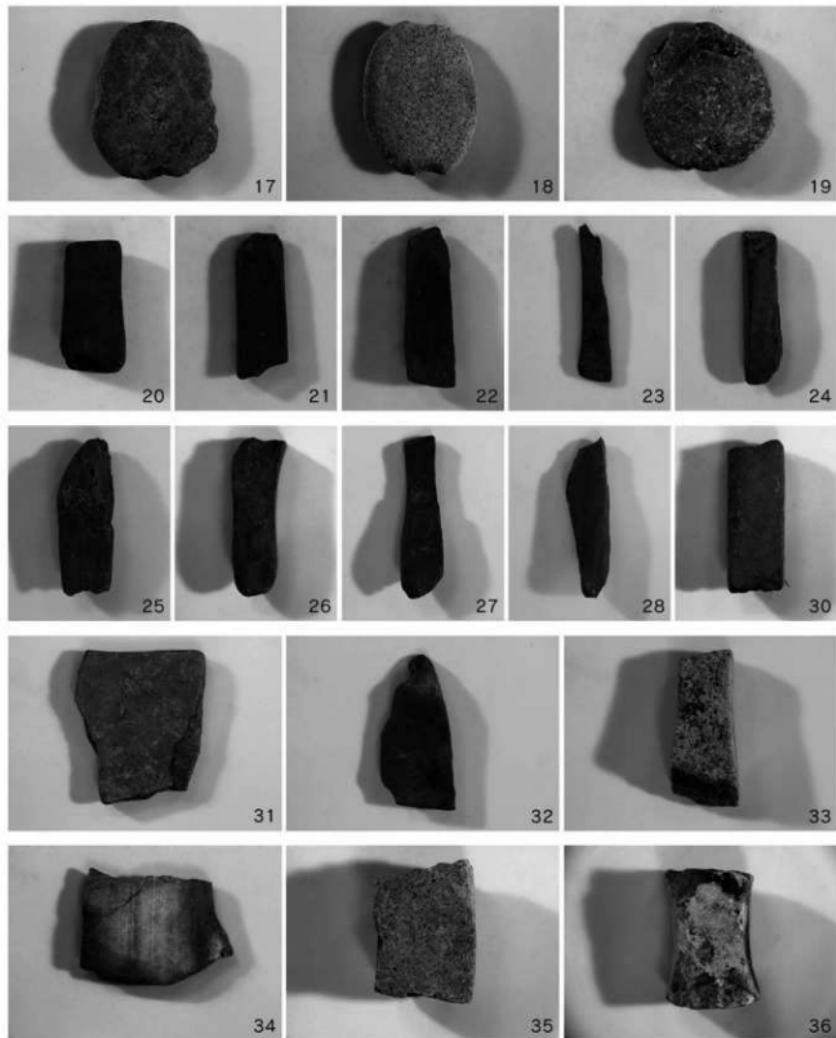
3つ目は断面が三角形を呈するものである（例えば85）。3点図化しているが、平面形は統一性が無く、側面への敲打も異なっている。

以上は素材や最終的な形態に関することであるが、敲打の特徴として細かく、明瞭な打撃痕がみられるものが多いことである。また、往々に側縁の一部にやや縦長の引っ張いたような痕跡がみられることがある。例えば88は両面に部分的に磨いた痕跡があるものの、両面の多くは細かく深めの明瞭な打撃痕が無数についており、側面の縁よりの部分にはやや縦長の痕跡が多くついている。この88にもさほど深くは無いが、敲打の結果としての浅い窪みが、それぞれ1ヶ所ずつ確認できる。

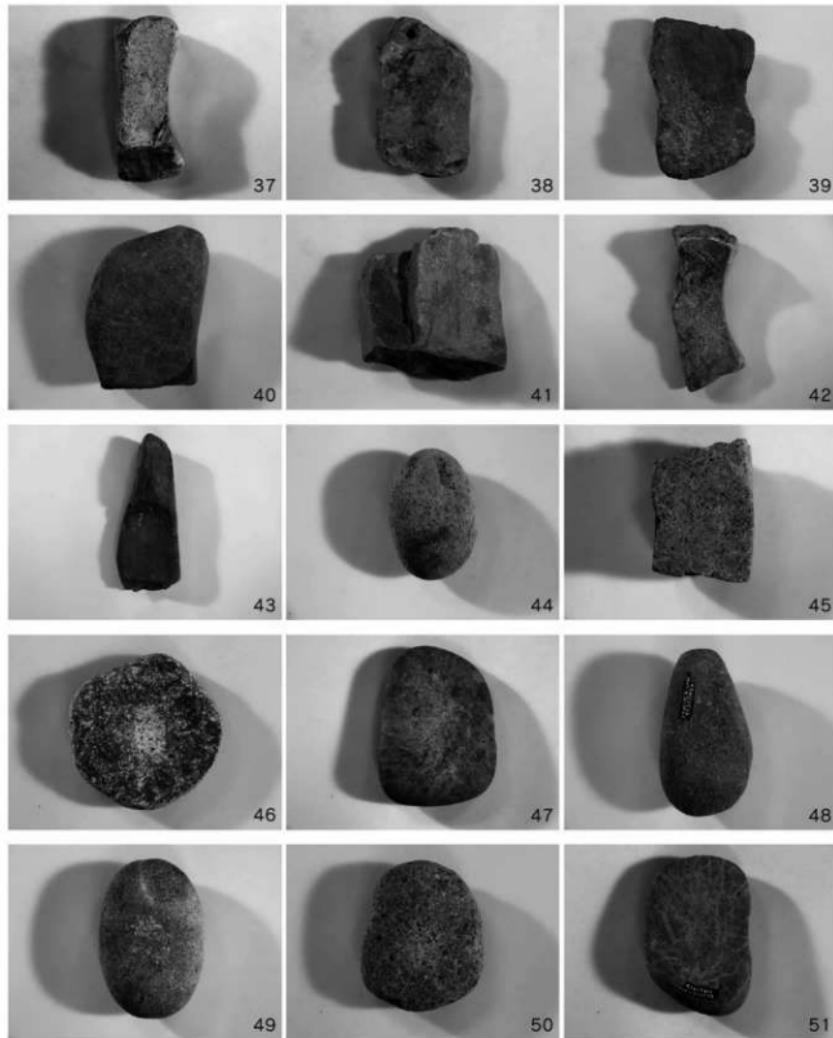
以上の諸特徴は、縄文時代の石器にはあまり見ない特徴と思われる。上述のように古墳時代後期から古代の土器を最も多く含んでおり、小さく深い敲打痕であることを考えると、あるいは鉄釘を打つハンマーではないかとも考えられるが、推測の域を出ない。



第 18 次調査出土遺物 1

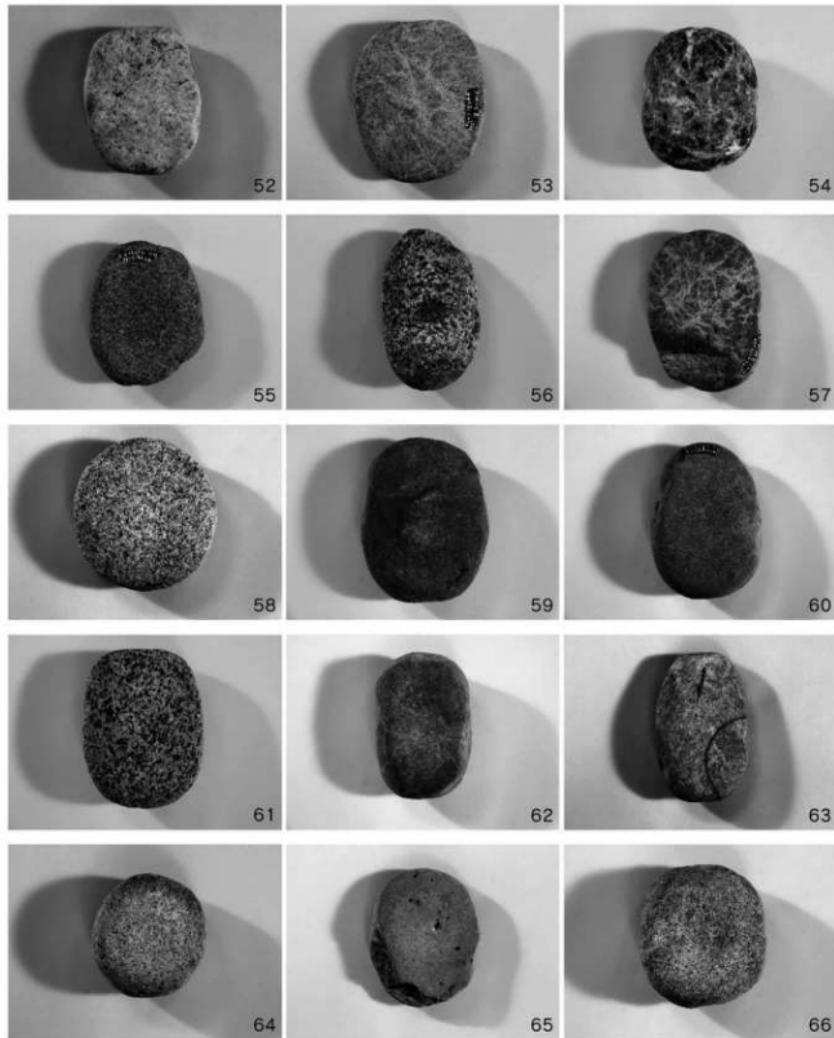


第18次調査出土遺物2

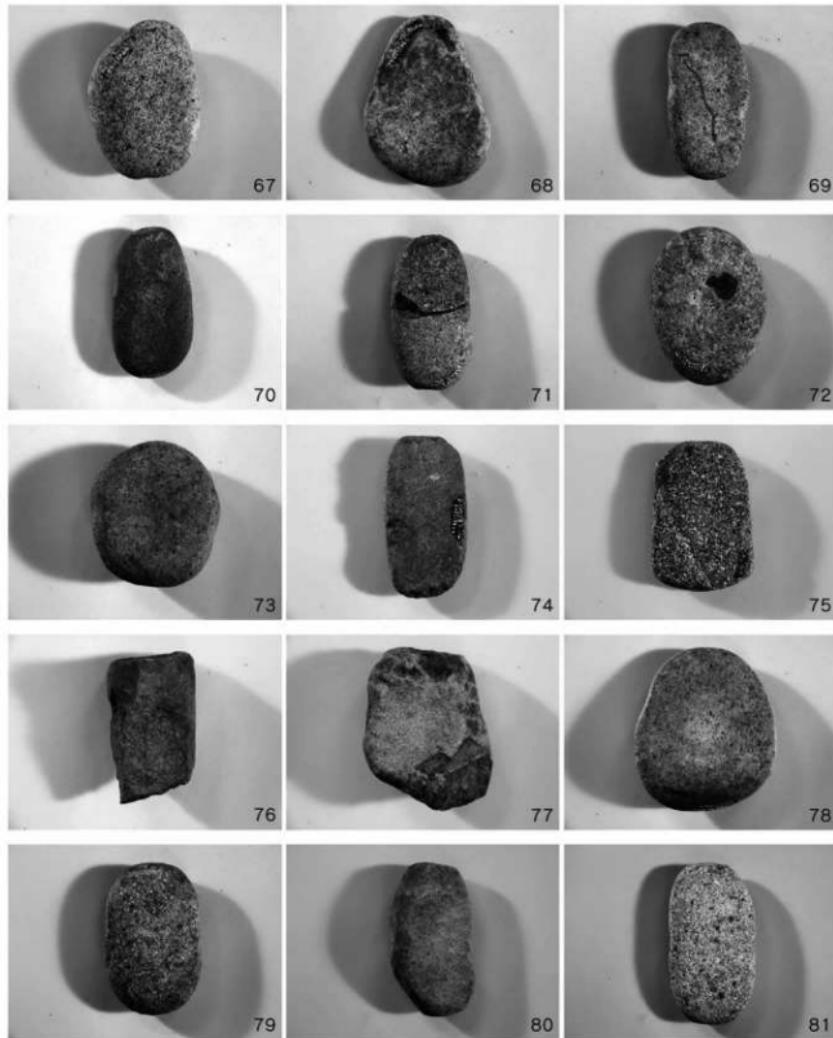


第 18 次調査出土遺物 3

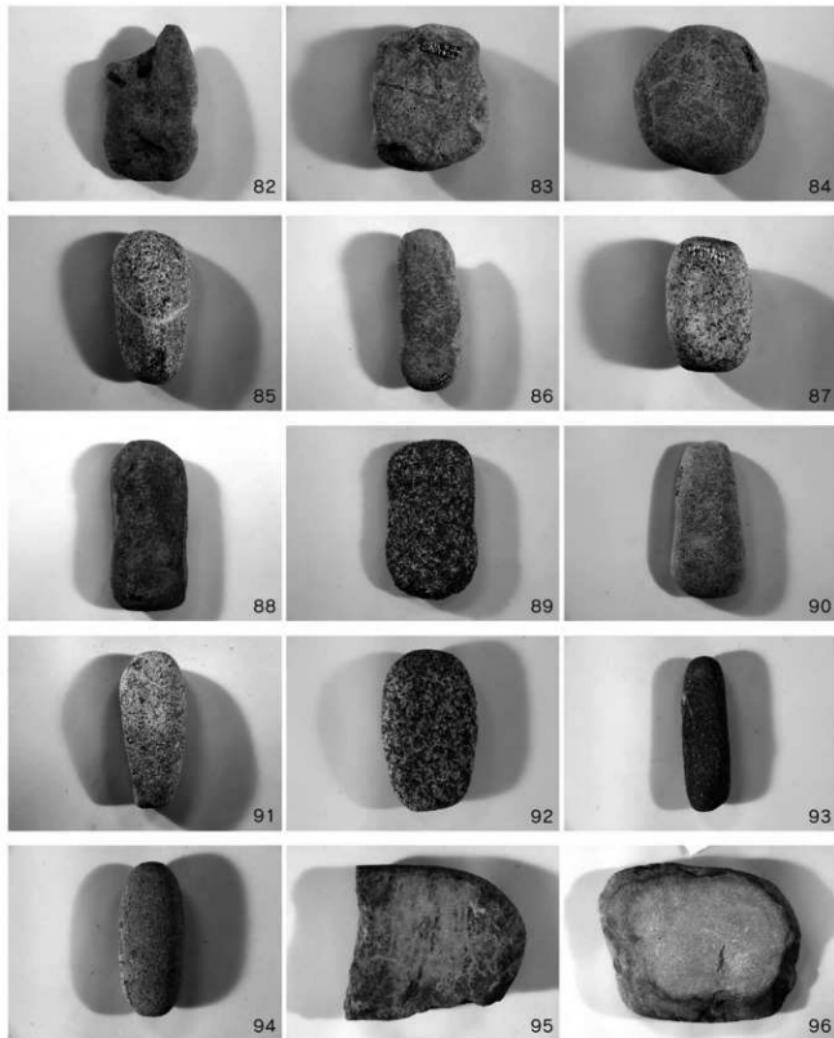
図版 4



第 18 次調査出土遺物 4



第 18 次調査出土遺物 5



第 18 次調査出土遺物 6

第 60 次調査の記録

III. 第60次調査の記録

(1) 第60次調査の概要

元岡・桑原遺跡群第60次調査区は遺跡の中央に位置し、池ノ浦古墳の西側の南西方向に開口する小さな谷部にある。近隣では7次調査が実施されており、古代の製鉄炉が確認されている。この地区は、九州大学統合移転に伴って理学部植物圃場造成が計画されていたが、工事範囲の拡張のため、拡張範囲に対して確認調査を平成25年1月22日に実施し、埋蔵文化財の有無の確認を行った。

確認調査では、GL - 40cm ~ 100cmで谷の堆積土に達し、埋土中から高台付の壺(図1)等が出土した。その形態的特徴から7~8世紀代の集落痕跡が遺存していることが予想された。また、円面鏡(図1-2)といった官衙関連遺物が出土したことと鉄滓が確認されたことにより、元岡・桑原遺跡群第7次調査との関連があることが想定され、当遺跡の律令期を考える上で重要な位置づけであるとして、平成25年5月22日~8月28日の約3ヶ月にわたって谷部分を中心に発掘調査が実施された。廃土処理の関係上、調査区を2分割し、調査範囲の4分の3をI区、残り4分の1をII区として調査を行った。調査面積はI・II区合計で271m²である。

調査は、平成25年5月22日から表土はぎ、および休憩所設置等の事前準備を行い、27日より作業員を動員して本格的な作業を開始した。I区は7月19日に高所作業車による全景写真撮影を行い、同月23日からII区の表土はぎを行った。II区の全景写真撮影を8月9日におこない、同月27・28日で埋め戻しを行い、調査を終了した。調査の結果、当初想定されていた集落跡は検出されず、ピットが数基と鉄滓集中箇所は検出されたが、調査の中心は約1.5mにわたって堆積する遺物包含層の調査であった。遺物包含層からはパンケース22箱の遺物が出土している。

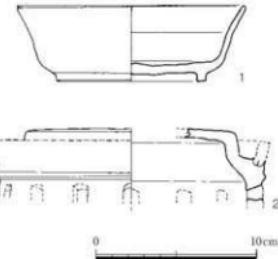


図1 確認調査時出土遺物(S=1/3)



図2 第60次調査区位置図(1/1000)

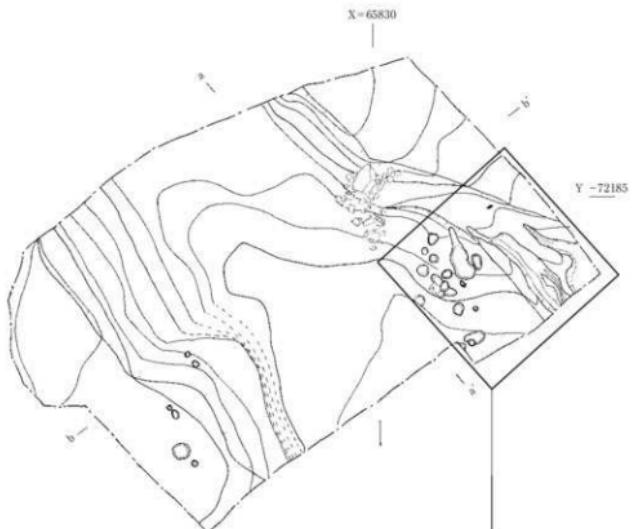


図3 第60次調査区全体図



図4 第60次調査区遺構配置図

(2) 調査の内容

基本層序

本調査地点は南西方向に開口する谷に位置している。約190cmにわたって谷の埋没土が堆積している。ここでは、表土部分のGL-50cm以下の土層の堆積状況を報告する。

1層は暗オリーブ褐色砂質土である。遺物をまばらにふくみ、粘性及びしまりともない。2層はにぶい黄褐色砂質土である。南側にのみ堆積する。遺物をまばらにふくみ、炭も少量確認できた。砂をブロック状に含んでいる。3層は北側を中心に堆積する。黒褐色粘質シルト層で、粘性やしまりもある。φ1cm程度の白色砂粒を多く含んでいる。遺物をまばらに含む。4層は黒色粘質シルト層で、3層と類似した土質、粘性やしまりがあり、炭化物も含まれている。人頭大の礫が谷の落ち際に多く堆積している。5層は最も遺物の出土が多い層である。黄褐色粘質シルト層で、粘性・しまりともにある。一部にオリーブ褐色土が垂直方向で筋状に見られる。砂層が部分的に確認できる。6層は黄褐色粘質シルト層である。遺物が含まれているが、ごく少量である。7層は、褐色粘質シルト層である。遺物はなく拳大の礫を含んでいる。8層は明黄褐色粘質土層、9層は暗茶褐色粘質シルト層、10層は暗褐色粘質シルト層であり、遺物をふくまない。

土層の堆積は谷の傾斜に沿っており、自然に谷が埋没していく過程で遺物を巻き込みながら堆積したものと考えられる。これらの層の中でも5層では垂直方向に褐色土がいく筋も確認できることから、上面が地表面となっていた時期が一定時期あった可能性が考えられたため、この面で遺構検出を行ったが確認されなかった。遺構は、遺物包含層が終わり無遺物で安定する7層上面で確認されており、この面を生活面としていた時期があると考えられる。

本調査地点では、谷の傾斜に沿って堆積していることと6層よりも上層はすべて遺物包含層で生活利用の痕跡は確認できていないことから、7層上面で何らかの土地利用を行った後は、人の手が加えられているとは考え難い。ただし、谷の埋没速度の速遅は当然存在し、それによって遺物量の差や色調にも変化があったのではないかと考えられる。

検出遺構

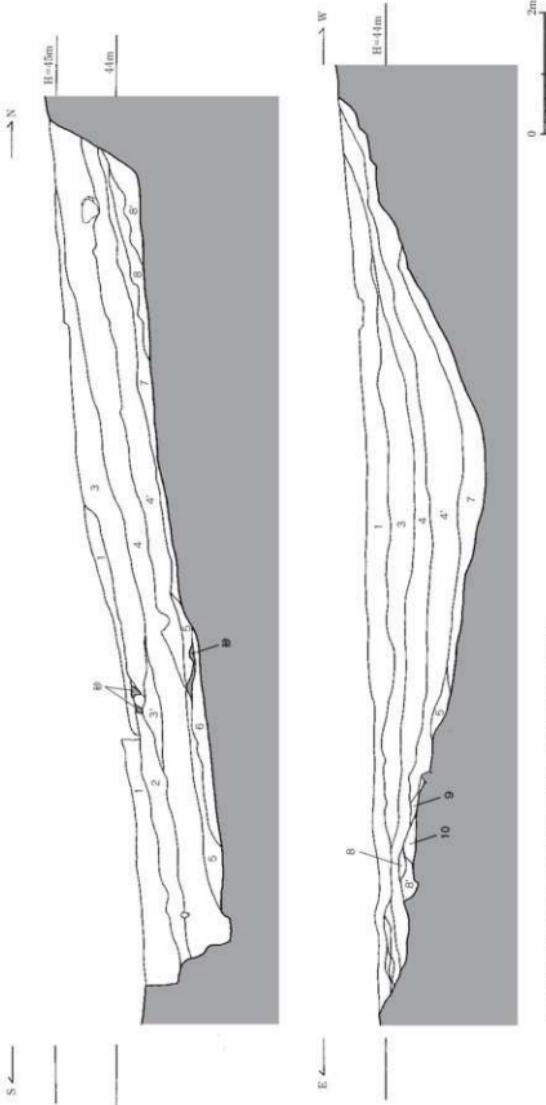
第60次調査地点においては7層上面、谷の北東斜面を中心にピット数基を確認したが、それ以外の明確な遺構は確認されていない。ここでは、数基のピットのうち、鉄滓がまとまって出土したものを不明土坑(SX01)として報告する。

SX01(図4・図版3-2)

南西方向に開口する谷の北東斜面において、長軸90cm、短軸50~60cmの範囲で鉄滓集中部分が検出された。鉄滓の中には流動滓と思われる破片もみられ、製鉄炉の廃滓土坑の可能性も考えられたが、周辺は被熱により激しく赤変した部分は見られないと集中している鉄滓同士は連結しておらず、流れた方向もバラバラであることから、遠くない場所に存在したであろう炉から廃棄された鉄滓が自然と堆積したものと考えられ、製鉄炉に直接伴うものではないと判断された。

出土遺物(図6~8)

先述のように、第60次調査においては明確な遺構が検出されず、出土遺物は包含層のみの出土である。以下、出土遺物の記載をおこなう。なお、出土層位・法量等の詳細については表1(土器・陶磁器)表2(土製品・鉄器・石器)の遺物観察表を参照されたい。



- 1 層：褐色オーラル岩層地帯。薄暗い岩質で、風化・浸食作用により、表面・側面に凹凸がある。
- 2 層：にじみ青緑色の砂岩地帯。薄暗い岩質で、風化・浸食作用により、表面・側面に凹凸がある。
- 3 層：薄青緑色の砂岩地帯。薄暗い岩質で、風化・浸食作用により、表面・側面に凹凸がある。
- 4 層：薄青緑色の砂岩地帯。薄暗い岩質で、風化・浸食作用により、表面・側面に凹凸がある。
- 5 層：にじみ青緑色の砂岩地帯。薄暗い岩質で、風化・浸食作用により、表面・側面に凹凸がある。
- 6 層：薄青緑色の砂岩地帯。薄暗い岩質で、風化・浸食作用により、表面・側面に凹凸がある。
- 7 層：薄青緑色の砂岩地帯。薄暗い岩質で、風化・浸食作用により、表面・側面に凹凸がある。
- 8 層：薄青緑色の砂岩地帯。薄暗い岩質で、風化・浸食作用により、表面・側面に凹凸がある。
- 9 層：薄青緑色の砂岩地帯。薄暗い岩質で、風化・浸食作用により、表面・側面に凹凸がある。
- 10 層：薄青緑色の砂岩地帯。薄暗い岩質で、風化・浸食作用により、表面・側面に凹凸がある。

図5 土解断面図 ($S = 1/80$)

出土土器

3～5は土師器の甕である。3は口縁部から胴部まで残存している。胴部中位に最大径をもち、直線的に外に開く口縁部にいたる。外面にはタタキの痕跡が明瞭に残っており、2次的な被熱の痕跡なのかは不明であるが、表面が剥落している部分も見られる。製塙土器の可能性も考えられる。4は3と同様の形態をもつ甕の口縁部である。口縁部は丁寧にナデられており、肩部内面は丁寧なヘラケズリの痕跡が確認できる。5は甕の底部に近い部分である。外面は3と同様のタタキ、内面は粗いハケメ状の痕跡が確認できる。6は土師質の高坏である。指頭圧の痕跡が明瞭に残っており、手づくねに近い。7は須恵器の短頸壺である。底部は欠損しており不明である。丸みを帯びた胴部から直線的に内傾する肩部を持ち、直立する口縁部に至る。8・9は長頸壺である。8は口縁部片である。口縁部は直線的に外傾して開き、口縁短部は水平近くまでねる。口縁上位に2条の沈線がめぐる。9は底部から胴部にかけての破片である。外に開くハの字を呈した隅丸方形の高台が付き、表面はやや凸凹気味の外傾する胴部を持つ。肩部は直線的に内傾する。

10から18は須恵器の壺蓋である。壺蓋は全体的なフォルムとして扁平なもので、つまみも宝珠つまみがつぶれた、扁平な2～4cm大のものである。かえりもわずかな折り返しによるものである。19から32は須恵器の高台付の坏である。高台が外に開くもの（19～23）と直立するもの（24～31）の2グループに分けられる。前者の高台の位置は底部と胴部境で、やや大きめのものが貼付けられている。胴部もやや内湾しながら外に開き口縁部へと続く。23に関しては、底部に1条の沈線文が確認され、ヘラ記号と考えられる。後者は底部と胴部境よりもやや内側に高台がつけられ、胴部は直線的に外に開き口縁部へと続く。31は高台が貼り付けられた痕跡は残っているが、高台そのものは剥落しており確認はできない。貼り付けられた痕跡から考えると、おそらく直立する高台であったと推測される。32は土師質の高台付坏である。この資料も残存状況は悪く、高台の貼り付けられた痕跡のみ確認できる。須恵器製の坏は多く確認できたが、土師質の坏はこの一点のみの出土であった。33・34は土師器の坏である。34は厚みもあり、全体的に丸みを帯びている。また、底部と胴部境も明瞭ではない。一方34は、器壁は薄く底部から胴部の境も明瞭で胴部自体も直線的で全体的にシャープなつくりである。以上の遺物はその形態的特徴から、7世紀後半から8世紀初頭の所産であると考えられる。

出土陶磁器

35～42は陶磁器である。35は備前陶磁の古唐津の皿である。高台から緩やかに外傾しながら口縁部へと至る。釉薬は胴部中位程まで非常に丁寧なつくりである。16世紀末の所産と考えられる。36～38は青磁である。36は龍泉窯系青磁II類と考えられる皿あるいは碗の口縁部片である。口縁部付近に連弁のしひが入る。13世紀の所産と考えられる。37は口縁部が強く屈曲する坏あるいは皿である。形態から15世紀代の所産と考えられるが小片のため詳細は不明である。38は龍泉窯系青磁の碗の底部片である。高台は厚く腰がはっている。I-1a類に近いものと考えられ、12世紀代の所産と考えられる。39～42は白磁である。39は皿の口縁部片である。口縁端部が強く屈曲する。15世紀代の所産であろうか。40は碗の口縁部である。直線的に外傾する口縁部の内面には一条の沈線が巡る。碗V類にあたると考えられ、13世紀の所産と考えられる。41は皿あるいは碗の口縁部片である。口縁端部付近で強く屈曲している。時期は不明である。42はいわゆる口禿げの白磁皿（IX類）の底部片と考えられる。底部全面に釉薬が塗布されているのが確認できる。時期としては13世紀後半であろうか。43は瓦質の三足釜の脚部である。脚部の外面はススが付着している部分や被熱の影響であろうか、黒色化している部分も見られる。中世期の所産と考えられる。

その他の特殊遺物として、瓶（44）と土鈴（45）がある。45は瓶の取っ手に当たる破片で口縁部は欠損しており詳細は不明であるが、口縁部があったであろう部分に銅あるいは鉄といった金属が付着している。その周囲は金属付着の影響であろう、土器の色調が変化している。この破片の具体的な用途は不明であるが、一度融解した金属が付着していることから鉄あるいは銅生産関連遺物であることは間違いない。

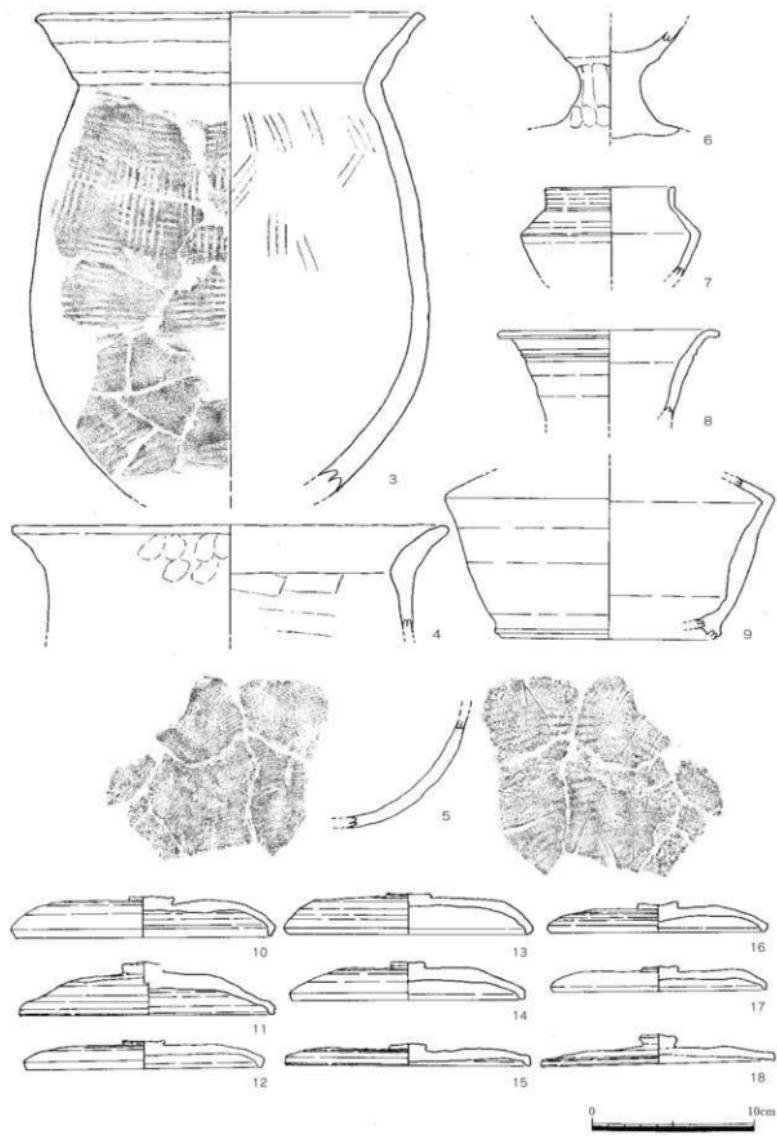


図6 包含層内出土遺物① (S = 1 / 3)

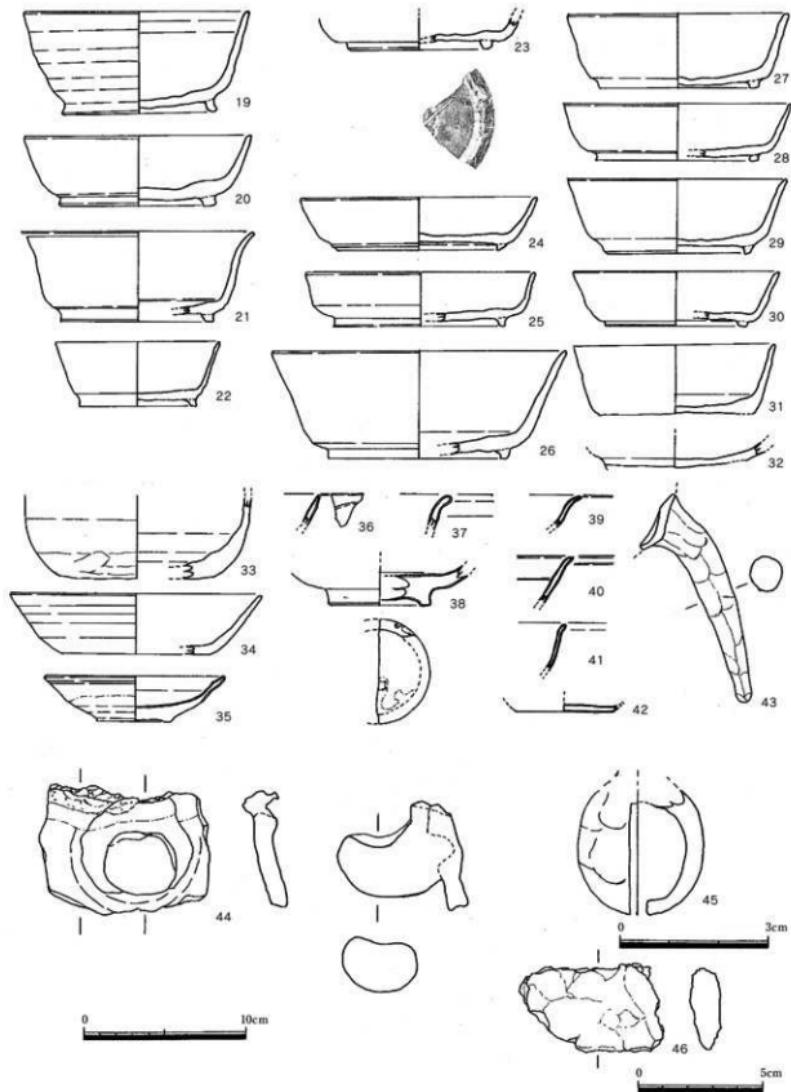


図7 包含層内出土遺物② (S = 1 / 3、46S = 1 / 2、45S = 1 / 1)

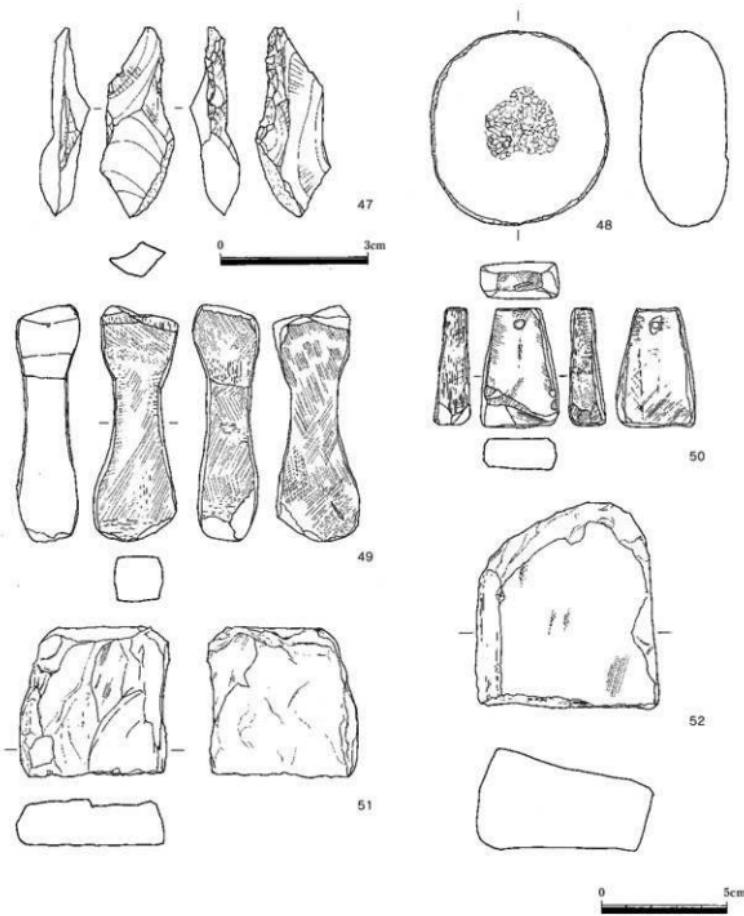


図8 包含層内出土遺物③ (47・50 S = 1 / 1、その他 S = 1 / 2)

しかし、破片の内面全体に金属の付着が見られないことから坩堝とはいえず、また、積極的に金属生産と結びつく道具や製品であったとは考え難いことから、近辺に金属生産にかかわる場所があり、たまたま融解した金属が付着したと考えた方が妥当である。つまり、偶然の産物である。ただし、偶然落ちていた瓶片に金属が付着したのか、融解した金属をぬぐう等の作業のために偶然瓶片を使用したのか遺物だけではわからない。いずれにしても、金属生産関連の遺跡が近くにあったことを裏付けるものとして重要である。

出土鉄器

46は大部分は欠損して不明であるが、おそらく刀子であろうと考えられる。

出土石器

47～52は石器である。47は台形様石器である。48は凹み石である。表面の敲打痕のほか、上部にも見られることから叩き石としての使用も想定される。49～52は砥石である。49・50は小型の砥石で、全面に研磨痕跡が確認できる。49に関しては中央よりやや上でくびれがあり、くびれ付近で横方向に擦れた痕跡が確認できること、50では上部に穿孔があることから、紐状のものを引っ掛けたあるいは孔に通して使用していたと想定できる。51・52は石材の一部に研磨痕跡が確認できる資料である。49・50とは形態もサイズも研磨痕跡のあり方も異なることから、同じ砥石ではあるが違った使用をされたと考えられる。

(3)まとめ

本調査地点では、明確な遺構は検出されなかった。しかし、出土遺物からは、古代の金属器生産の関連遺物が確認されているということ、また、試掘調査においては円面硯、包含層中からは小型の砥石が出土していることから、一般集落とは様相を異にしている。この調査では遺構が検出できなかったとはい、製鉄遺構を検出し、出土品には馬具や木簡、硯、墨書き土器、木簡、権、錫筒具、瓦、荷札、郡符木簡などを確認した7次調査地点の様相と類似したものがあり、関連ある包含層の可能性が高い。何らかの公的機能を有していたことが指摘されている7次調査地点の性格の一端を知る上でも、古代における元岡・桑原遺跡群の位置づけを考える上でも、今回の調査成果は重要であるといえる。しかし今回、7次調査地点とのより細密な比較や検討はできおらず、十分に情報を引き出せたとは言い難い。その点は今後の課題とし、調査成果の報告のみとする。

表1 出土土器観察表

図版番号	遺物番号	種類	器種	出土層位	法量(cm)			色調	
					(復元)口径	底部径(高台)	器高	外面	内面
6	1	須恵器	杯	試掘トレンチ	14.2	9.4	4.7	褐色	にぶい赤褐色
	2	須恵器	円面硯	試掘トレンチ	13	—	—	灰色	灰色
	3	土師器	甕	5層	24	—	—	褐色	褐色
	4	土師器	甕	ベルト内	27	—	—	褐色	褐色
	5	土師器	甕	5層	—	—	—	明赤褐色	明赤褐色
	6	土師器	高杯	2・3層	—	—	—	褐色	褐色
	7	須恵器	短頸壺	5層	8	—	—	灰色	灰色
	8	須恵器	長頸壺	5層	13.8	—	—	暗灰色	暗灰色
	9	須恵器	長頸壺	5層	—	14	—	灰色	青灰色
	10	須恵器	杯蓋	5層	16.5	—	2.65	灰色	灰色
7	11	須恵器	杯蓋	5層	15.9	—	3.3	灰色	灰色
	12	須恵器	杯蓋	5層	15	—	1.8	灰色	灰色
	13	須恵器	杯蓋	5層	15.6	—	2.55	灰白色	灰白色
	14	須恵器	杯蓋	5層	14.8	—	2.4	灰色	灰色
	15	須恵器	杯蓋	5層	15.4	—	1.4	灰白色	灰白色
	16	須恵器	杯蓋	5層	13.8	—	1.9	灰色	灰色
	17	須恵器	杯蓋	5層	13.6	—	1.5	にぶい黄褐色	褐色
	18	須恵器	杯蓋	5層	14.8	—	1.8	灰色	灰色
	19	須恵器	杯身	5層	14	9.6	6.4	灰色	にぶい橙
	20	須恵器	杯身	3・5層	14.4	9.9	4.4	灰白色	灰白色
8	21	須恵器	杯身	5層	14.4	9.4	5.6	灰色	灰色
	22	須恵器	杯身	5層	10.2	7.3	5	暗灰色	暗灰色
	23	須恵器	杯身	5層	—	9	—	灰色	暗灰色
	24	須恵器	杯身	5層	14.6	9.8	3.3	淡灰色	淡灰色
	25	須恵器	杯身	5層	14.2	10.6	3.4	暗灰色	暗灰色
	26	須恵器	杯身	5層	9.2	11.2	6.7	淡灰色	淡灰色
	27	須恵器	杯身	5層	13.8	10	4.7	灰白色	灰白色
	28	須恵器	杯身	5層	14	10	3.6	灰色	灰色

図版番号	遺物番号	種類	器種	出土層位	法量(cm)			色調	
					(復元) 口径	底部径(高台)	器高	外面	内面
	29	須恵器	环身	5層	13.7	9.2	4.7	灰色	灰色
	30	須恵器	环身	5層	12.6	8.8	3.4	暗灰色	暗灰色
	31	須恵器	环身	5層	12.4	—	—	暗灰色	暗灰色
	32	土師器	环身	5層	—	—	—	浅黄褐色	黑色
	33	土師器	环身	5層	—	—	—	棕色	灰黑色
	34	土師器	环身	5層	15.6	9	3.8	棕色	棕色
	35	国産陶磁器	皿	トレンチ	11.2	4.6	2.8	緑) グリーン 白) オリーブ 赤) ブラック	緑) グリーン 白) オリーブ 赤) ブラック
	36	青磁	皿	3層	—	—	—	オリーブ灰色	オリーブ灰色
	37	青磁	杯あるいは皿	1層	—	—	—	オリーブ灰色	灰白色
8	38	青磁	碗	4層	—	6.4	—	緑) グリーン 白) ホワイト 赤) ブラック	緑) グリーン 白) ホワイト 赤) ブラック
	39	白磁	碗	トレンチ	—	—	—	乳白色 白色	乳白色 白色
	40	白磁	碗	トレンチ	—	—	—	緑) 灰白色 白) ホワイト 赤) ブラック	緑) 灰白色 白) ホワイト 赤) ブラック
	41	白磁	碗	トレンチ	—	—	—	緑) 灰白色 白) ホワイト 赤) ブラック	緑) 灰白色 白) ホワイト 赤) ブラック
	42	白磁	皿	5層	—	6	—	緑) 黄白色 白) ホワイト 赤) ブラック	緑) 黄白色 白) ホワイト 赤) ブラック
	43	瓦質土器	三足釜	1層	—	—	—	灰白色 一部黒色	灰白色
	44	土師器	瓶	5層	—	—	—	棕色	棕色

表2 出土土製品・鉄器・石器観察表

図版番号	遺物番号	種類	器種	出土層位	法量			備考
					長さ	幅	重さ	
8	45	土製器	鉢	5層	—	2.5	—	浅黄褐色
	46	鉄器	不明	2・3層	3.3	—	—	
9	47	石器	台形棒石器	5層	3.84	1.58	3.00 g	黒曜石
	48	石器	凹石	4層	7.7	7.2	304.45 g	花崗岩
	49	石器	砥石	5層	4.85	3.27	102.98 g	石材不明
	50	石器	砥石	5層	9.62	3.25	32.85 g	砂岩
	51	石器	砥石	4層	6	6	117.85 g	粘板岩
	52	石器	砥石	4層	8.3	7.8	353.10 g	砂岩



1. I区全景（西から）



2. II区全景（西から）



1. 遺構検出状況（西から）



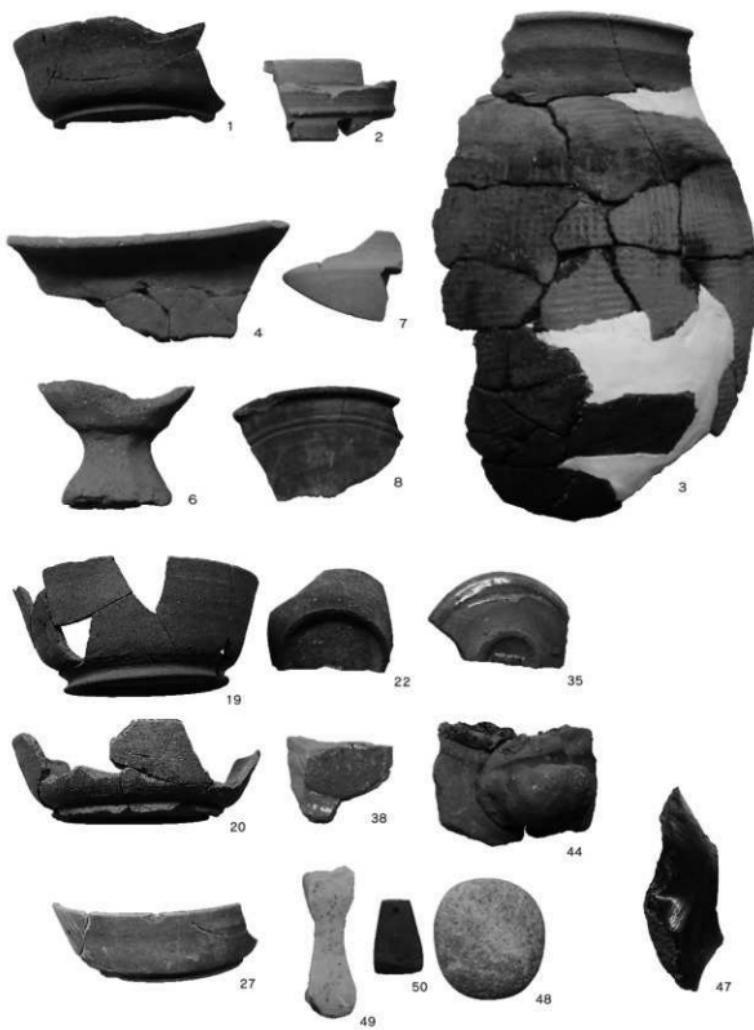
a - a' 北側土層断面（南から）



1. b - b' 東側土層断面（南から）



2. SX01 検出状況（西から）



包含層出土遺物

第 64 次調査の記録

IV. 第 64 次調査の記録

1. 調査の概要と層序

元岡・桑原遺跡群第 64 次調査区（図 1、2、13、14）は、元岡・桑原遺跡群の北側に位置しており、北東方向に開口する谷部にあたる。西側には平川池があり、近隣の調査では第 2、第 12、第 15、第 33 次調査が行われている。

第 2 次調査は調査区の南側にあたり、旧石器時代末から縄文時代草創期、弥生後期後半から古墳時代初頭の石器・土器が包含層などから出土している。第 64 次調査の I 区 II 区はこれにつづくとされる包含層、溝等を主体に調査した。第 12 次調査では 8 世紀中ごろから後半にかけて 27 基の製鉄炉が出土した。元岡・桑原遺跡群には石ヶ元古墳群で 6 世紀代の鍛冶具を副葬した古墳の存在や、第 7 次調査で 692 年に比定されている「壬辰年韓鉄」銘の木簡の存在から 6～7 世紀には製鉄工人の存在が想定されている。第 64 次調査では III 区の古墳の調査から、鍛冶具などは出土しなかったが、鎧、耳管が出土した。

第 15 次調査では縄文時代から中世までみられ、8 世紀代に遡る礪に関わる資料として、三行 70 文字の「解除」木簡が出土した。第 33 次調査は調査区の西側にあたり、桑原錦田古墳群 B 群にあたる 6 世紀後半の古墳 1 基が確認された。また、桑原錦田古墳群 A 群は 2 基の古墳がすでに調査されており、7 世紀後半の遺物が出土している。

第 64 次調査区は、平成 25 年 10 月 29 日から I 区の表土剥ぎを重機によって行った。11 月 8 日にはレベル移動、座標移動を行った後、本格的な調査を開始した。12 月 11 日から II 区の表土剥ぎを重機によって開始した。12 月 17 日に高所作業車を使用して I 区の写真撮影を行った後、II 区の本格的な調査を開始した。

年が明けた平成 26 年 1 月 15 日に、III 区の表土剥ぎを重機によって行った。その間に I 区 II 区の残る 1/20 の図面、平板図等の実測作業、写真撮影を終わらせた後に、1 月 28 日に III 区の本格的な調査を開始した。3 月 4 日にバルーンを使用した空撮を行い、I 区 II 区の全景写真撮影、III 区については一部写真撮影を行った。その後 III 区の図面、平板図等の実測作業、写真撮影を行い、III 区の全景写真をタワー建てて撮影した後、残る図面、平板図の作業を終わらせた後 4 月 30 日に作業が終了した。

第 64 次調査区は、大原川の右岸に形成された沖積地上に位置し、その一部は砂礫台地上にあたる。調査区の標高は 18～14 m を測る。また、付近は昭和 40 年代の大規模な圃場整備によって地形が改編されており、さらに北西には平川池が隣接しており、近世以降の地形改編も考えられる。よって、遺構の残りとしては良くなく、I 区 II 区の西側でそれが顯著であった。

第 64 次調査区の土層図は I 区 II 区の中央部で作成した（図 2、3）。現況は荒地であり、層序は上層から現代の耕作土（1、2 層）、または擾乱である（10 層）。その下に時代は明らかではないが、黄褐色土の水成堆積土があり、耕作土の可能性がある（3～5 層）。さらに褐色土の堆積層が 10～50cm あり（6、7 層）、その下は黒褐色の包含層が 50～60cm 堆積しており、遺構番号は 051 である（9 層）。北側では同じく黒褐色の包含層が 20～45cm 堆積しており、遺構番号は 081 である（15 層）。なお、9 層と 15 層はもともとは同じ時期に形成されたものであろう。

出土遺物はパンケース 45 箱出土した。

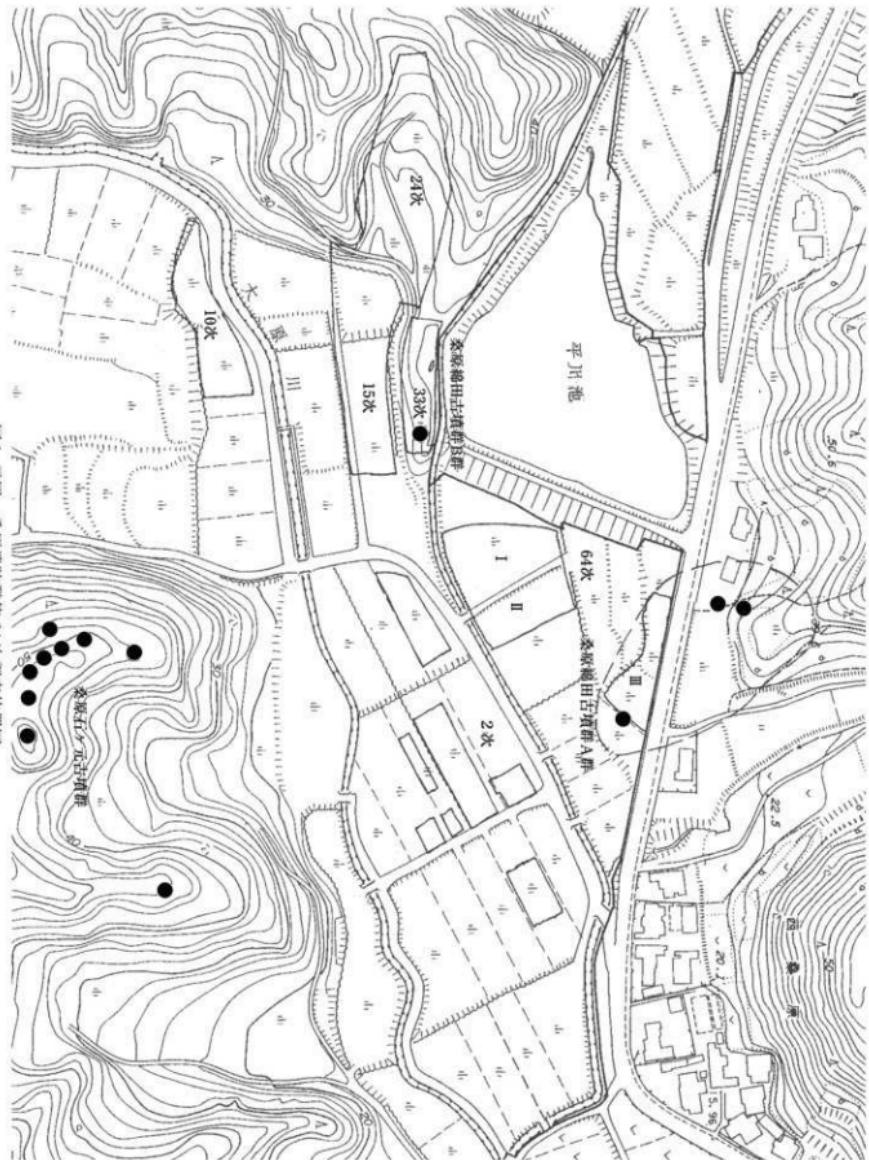


図1 元図・桑原遺跡群第64次調査位置図



図2 I区II区全体図(1/200)

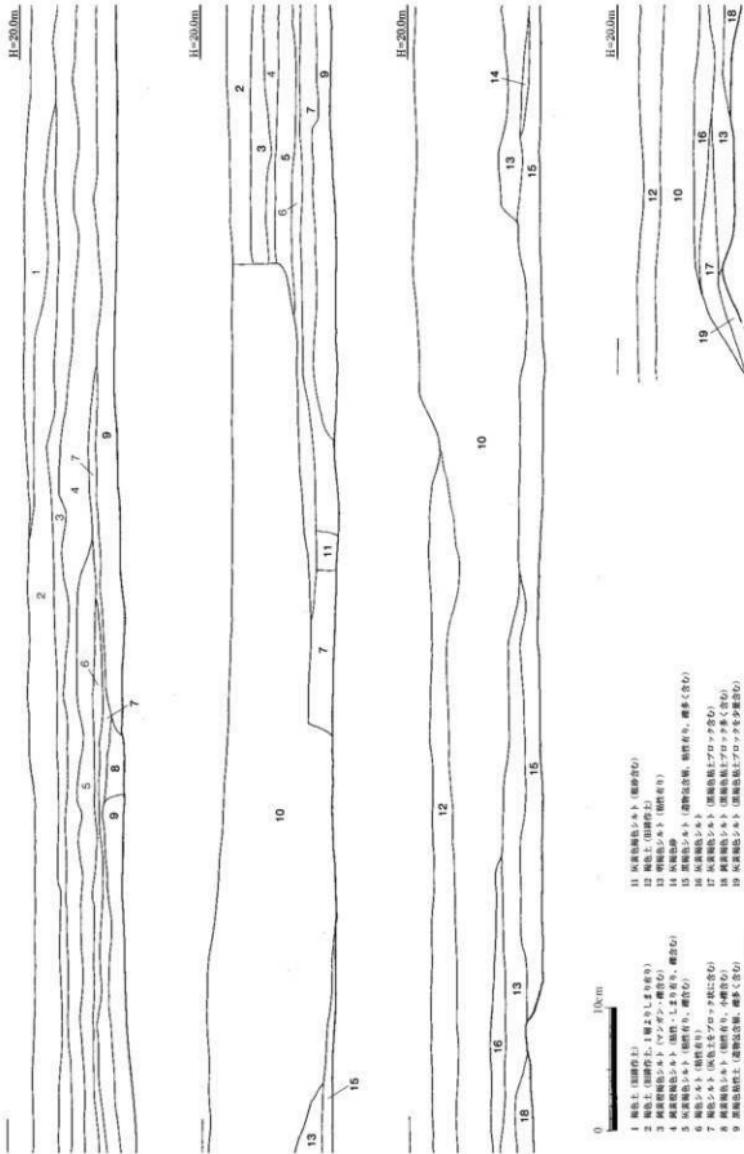


図3 I区II区土壤図 (1/200)

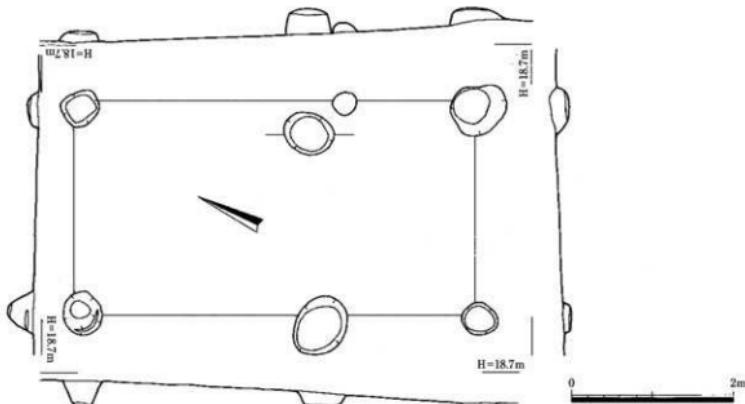


図4 SB058 実測図（1/60）

2. I、II区の遺構と遺物

以下、遺構種別ごとに報告を行なうが、調査区での遺構位置を本文中で示す際には、調査時における世界測地系による10m単位の平面座標を基準とした英字（北から南にA～E）と数字（東から西に1～6）の組み合わせによるグリッド標記を用いる（図2）。

1) 挖立柱建物 (SB)

I、II区において合計3棟の建物を復元することができた。

SB001（図4）調査区のD、E-4、5で検出した1・2間の建物である。主軸方位はN-26°-Eで桁行全長4.9m、柱間1.9m、3.0mである。梁間全長2.6mを測る。柱穴は円形もしくは楕円形であり、径0.3～0.7mで深さは0.1～0.3mであり、南東方向の柱穴は浅い。上には包含層が堆積しており、削られたと想定される。出土遺物は弥生土器の破片が出土したが、図化できなかった。

SB002（図5）調査区B-2で検出した、1・1間の建物である。主軸方位はN-85°-Wである。柱間は南北が2.8mと長く、東西が1.9mであった。柱穴は円形であり、直径約0.5～0.8m、深さ約0.25～0.35mを測る。出土遺物は弥生土器の破片が出土したが、図化できなかった。

SB003（図5）調査区のC、D-3で検出した、1・1間の建物である。主軸方位はN-18°-Eである。柱間は南北が1.8m、東西が2.4mを測り長い。柱穴は円形もしくは楕円形であり、直径約0.5～0.7m、深さ約0.2～0.4mであった。

出土遺物（図5）1はSP040から出土した。風化が激しいが、小型丸底壺であろう。

2) 溝 (SD)

SD105（図6）調査区のC、D-6で検出した。東西方向に伸びており、長さは約3.0m、幅は約0.85m、深さは約0.15mであった。元岡・桑原遺跡群第2次調査で検出されたSD3107とつながる可能性がある。第2次調査では遺物の出土ではなく自然流路とされているが、第64次調査ではわずかながら遺物が出土した。

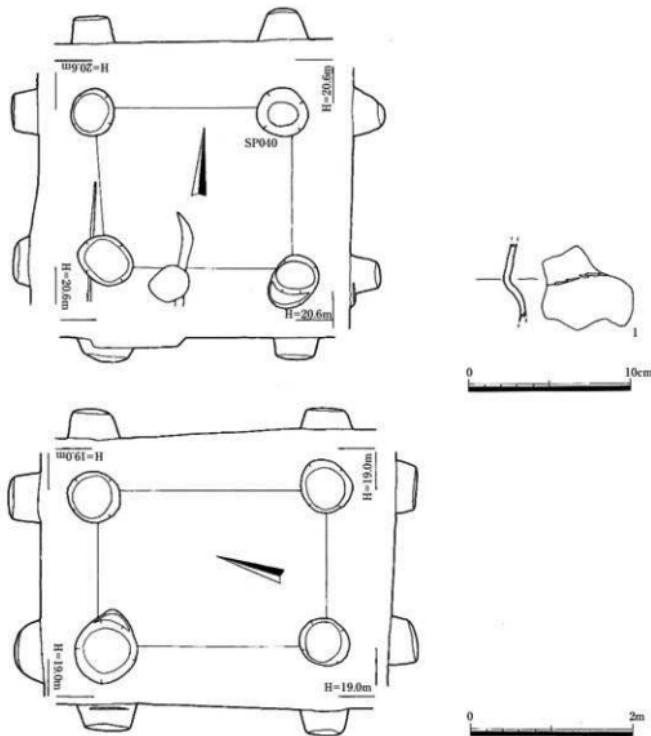


図5 SB039・064 実測図（1/60）およびSB039 出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（図6）2は高坏である。脚部のみの出土で、時期は弥生時代後期であろう。

3) 土抗 (SK)

SK007（図6）調査区のE-3で検出した。楕円形プランの土抗であり長径約2.4m、短径約1.5mを測る。深さは約0.35mであった。覆土は黄茶褐色細砂または暗茶褐色シルトであり、下位は礫が多くた。出土遺物は小片が出土したが、図化できなかった。

SK104（図6）調査区のC-4、5で検出した。楕円形プランの土抗であり長径約3.0m、短径約1.9mを測る。深さは約0.7mであった。覆土は暗茶褐色シルトなどである。SK007と同じ時期の可能性がある。

出土遺物（図6）3は弥生終末～古墳初頭の大型広口壺の口縁部である。口縁部の外側端部にハケ工具による斜めの刻み目を施す。4も同じく弥生終末～古墳初頭の大型広口壺の口縁部である。口縁部の外側端部にハケ工具による斜めの刻み目を施す。5は複合口縁壺の口縁部である。竹管文を

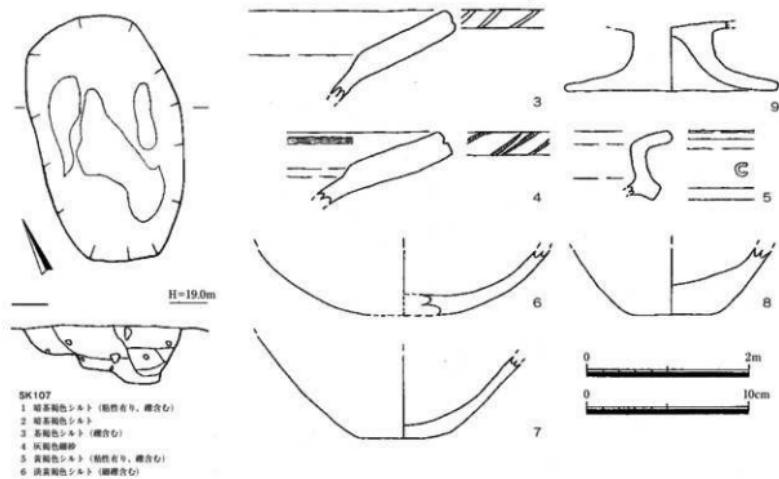
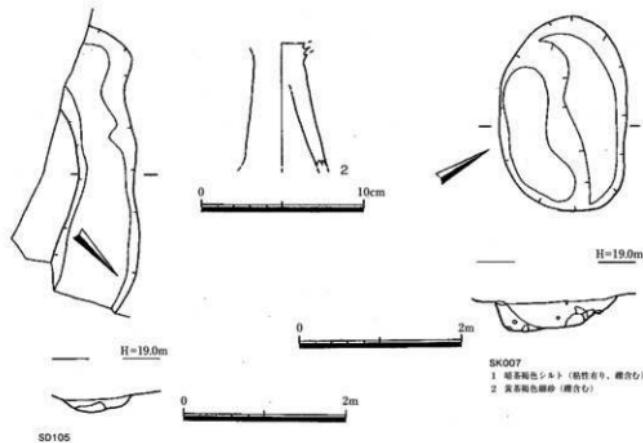


図6 SD105, SK007・104 実測図 (1/60) よび SD105, SK104 出土遺物実測図 (1/3)

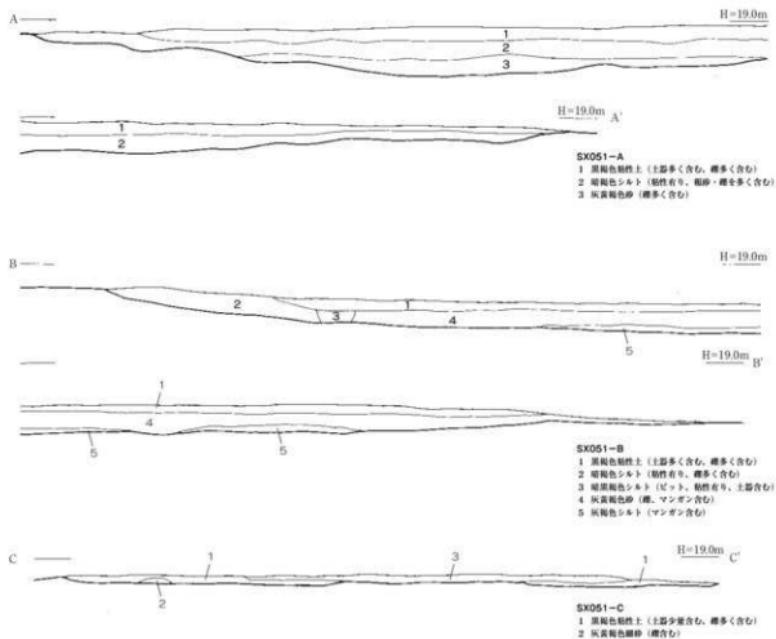


図7 SX051 土層図 (1/50)

施す。6～8は壺の底部であろうか、文様等は摩滅してみられない。7は底径4.9cmであり、底部が厚い。8は底径4.0cmである。9は高壺である。底径は12.8cmである。肩部から上は不明である。

4) その他の遺構、遺物

SX051 (図7、8、9) 調査区のC、D、E-4、5で検出した。層序はA-A'で上から黒褐色シルト、褐色シルト、灰褐色シルトであった。B-B'で上から暗茶褐色シルト、茶褐色シルト、灰褐色シルト、C-C'では暗茶褐色シルト、黄褐色細砂であった。第2次調査で確認された包含層と時期的には同じであろう。

出土遺物 (図8、9) 10～14は壺である。10は高さ22.8cm、口径約17.0cm、最大径22.2cm、底径5.0cmである。胎土は淡橙褐色であり、外面にはハケ目を施す。また内面底部には指押さえがみられる。11は高さ約11.7cm、口径約14.0cm、最大径約18.6cmである。胎土は橙褐色であり、外面は摩滅してわからないが、内面下部にはハケ目、上部には指押サエを施す。13は口径約15.0cmで内外面共にハケ目を施す。14は口径約15.9cmで、調整は不明である。外面に列点文を施す。15、16は大型広口壺の口縁部である。15の外面にはハケ目がみられる。16は壺である。胎土は橙褐色で、高さ約13.8cm、口径約14.2cmである。調整は不明であるが、内面には指押サエがみられる。

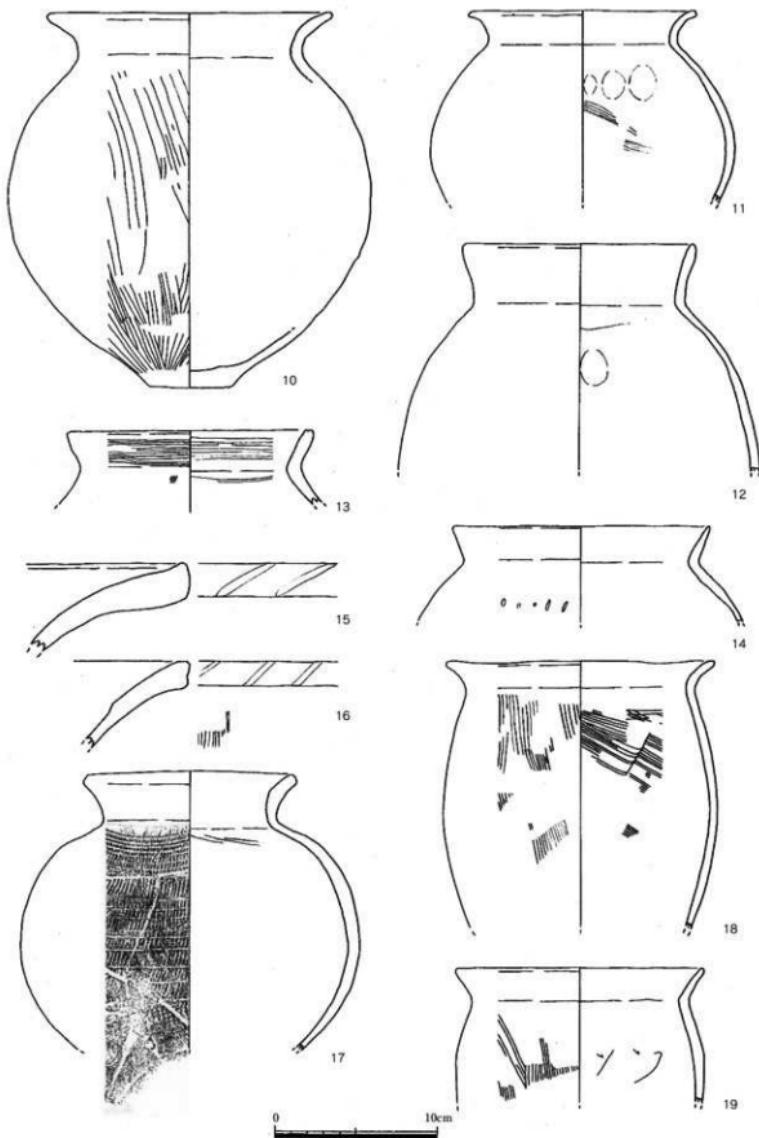


图8 SX051 出土遗物实测图 (1 / 3)

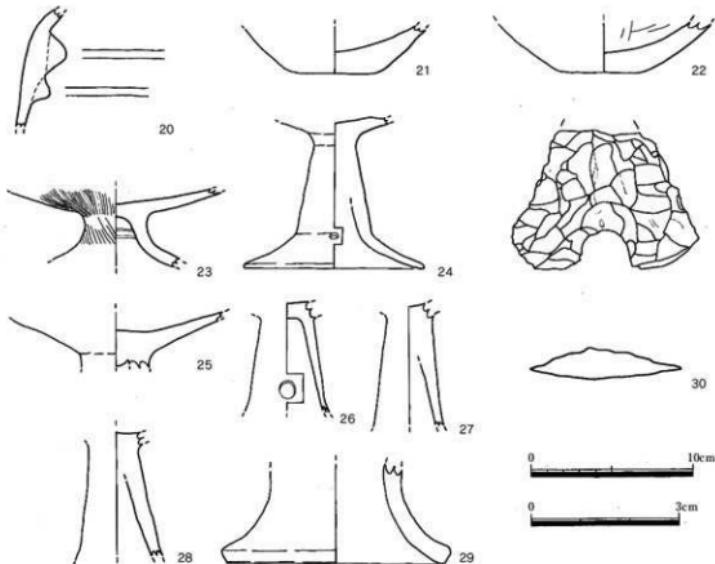


図9 SX051 出土遺物実測図 (30は1/1、他は1/3)

17は韓半島系の陶質土器で短頸壺である。胎土は灰褐色を呈する。口縁部は内外面共にナデ、胴部外面上は縱位平行タタキの後に螺旋沈線を廻らす。胴部外面下は格子目タタキである。また、内面はナデであるが、頸部にかけてヘラ状工具で刻んだ跡がみられる。18、19は壺である。18は高さ約16.6cm、口径16.4cm、胎土は灰黄褐色である。内外面共に口縁部はナデ、胴部はハケ目を施す。19は口径約15.0cm、胎土は橙褐色である。口縁部は内外面共にナデ、胴部外面上はハケ目、内面はケズリを施す。

21、22は壺である。21の胎土は淡橙褐色で、底径3.8cmである。22は淡黒褐色で、底径が4.2cmである。また、内側にはヘラ削りがみられる。23～28は高坏である。23は外面ハケ目、内面上部はナデ、脚部はシボリからケズリを行っている。24の胎土は明茶褐色で底径11.0cmである。底部と脚部の間に穿孔されている。26の胎土は淡赤褐色で、脚部に2箇所穿孔がみられる。29は器台で、底径13.2cmである。胎土は淡橙褐色を呈する。30は石鐵である。石材は黒曜石である。先端部分がかけている。幅は38mmである。

SX081 (図10) 調査区のB-3、4で検出した。層序はX-X'で黒褐色粘性土と灰黄褐色細砂からなる。もともとはSX051と同じであったと考えられる。

出土遺物 (図10) 31は高坏である。胎土は橙褐色である。摩滅が激しく調整は不明である。32は壺の口縁部が残る。胎土は淡茶褐色である。

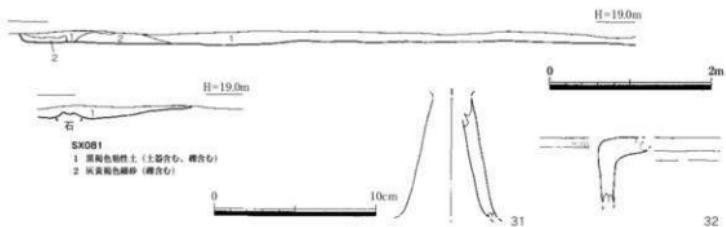


図10 SX081 土層図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/3)

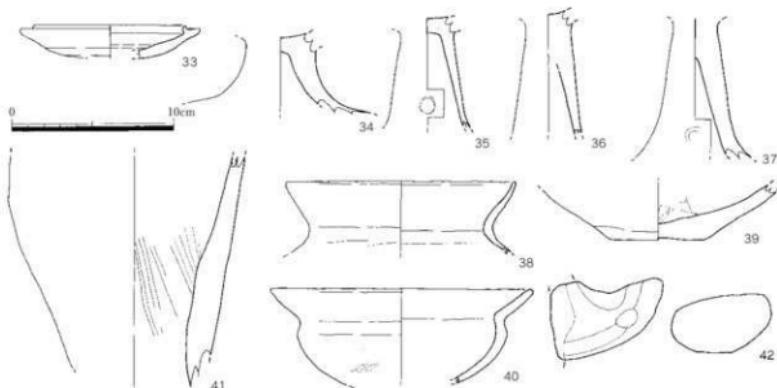


図11 SX103 出土遺物実測図 (1/3)

SX103 (図11) 調査区のB、C、D-5、6で検出した。SX081と同じでもともとはSX051と同じであったと考えられる。

出土遺物 (図11) 33は須恵器の杯である。口径9.2cmをはかる。須恵器片がみつかったのはこれだけである。34～37は弦生土器の高杯である。35、37は脚部に穿孔がみられる。38、39は弦生土器の壺である。38は口縁部が残り、口径6.8cmで、外面口縁部から肩部にかけてナデ、内面も口縁部から肩部にかけてナデ、肩部から下はヘラケズリを施す。39は底径5.6cmで、内面にはヘラ削り、指押サエがみられる。40は小型丸底壺である。口径16cmで、胎土は暗橙褐色である。内外面共に口縁部から肩部にかけてナデ、胴部外面はハケ目、内面はヘラケズリを行う。42は盤である。

出土遺物 (図12) SX103から石器が出土した。本来なら座標を落として調査すべきであった。

43～48は石鏸である。43は黒曜石である。縦22mm、横16mm、厚さ3mmであった。44は黒曜石である。縦29mm、横22mm、厚さ7mmであった。厚さが他と比べると厚く未製品か。45は安山岩である。縦25mm、横15mm、厚さ4mmであった。46は安山岩である。縦21mm、横17mm、厚さ5mmである。縁側に調整剥離を施す。47は安山岩である。縦27mm、横16mm、厚さ3mmであった。48は黒曜石である。縦26mm、横20mm、厚さ6mmであった。49～52

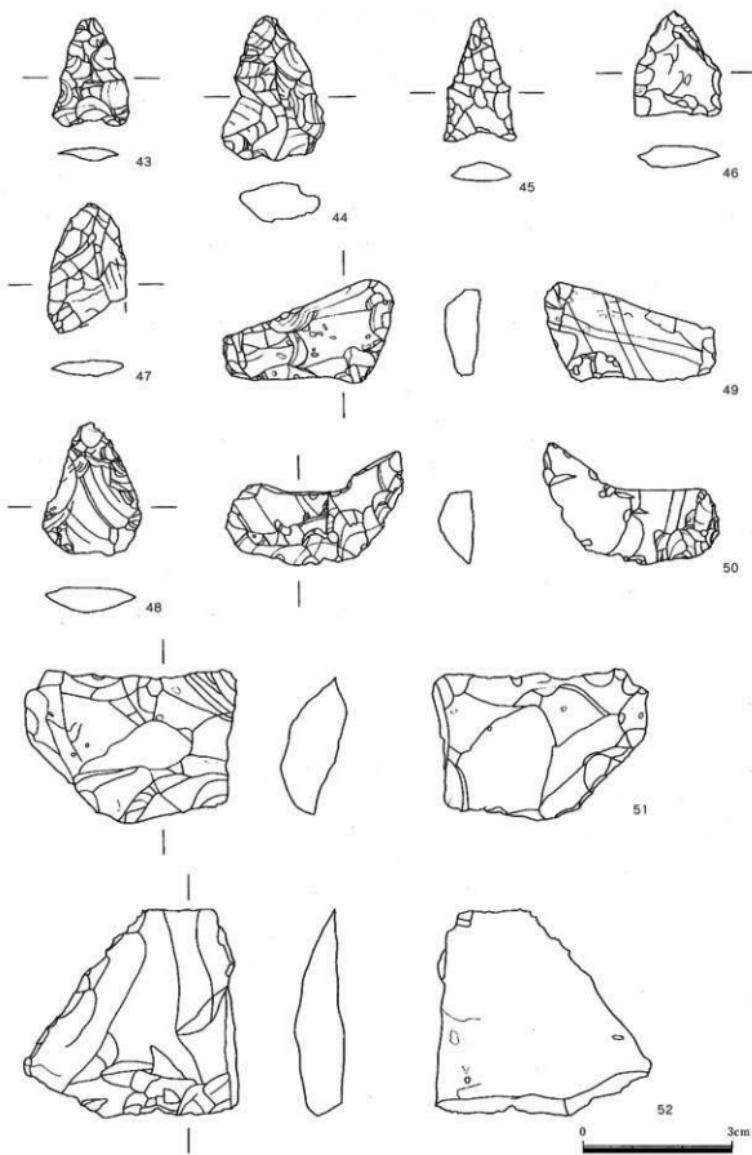


图12 SX103出土遗物实测图（1 / 1）

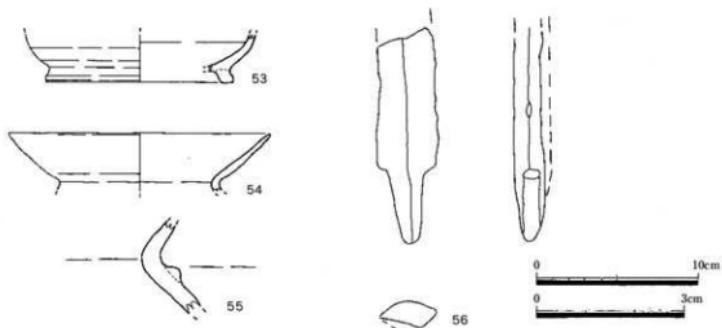


図13 ピット・試掘トレンチ出土遺物実測図 (56は1/1、他は1/3)

はスクレイパーである。49は黒曜石である。縦21mm、横35mm、厚さ7mmであった。50は黒曜石である。縦24mm、横36mm、厚さ7mmであった。自然面を残し側縁に使用によると考えられる剥離を残す。51は安山岩である。縦28mm、横43mm、厚さ11mmであった。52は安山岩である。縦41mm、横44mm、厚さ10mmであった。

ピット (SP)

SP036 (図13) A、B - 2で検出した。53は須恵器の壺身である。底径約11.4cmで、胎土は灰褐色である。内外面共に回転ナデを施す。

SP108 (図13) C - 5で検出した。54は弥生土器の壺である。口縁部のみが残り、口径約16.0cmであった。焼成は良好であるが調整は不明である。

SP110 (図13) C - 5で検出した。55は弥生土器の壺である。焼成は良好で、胎土は赤褐色～淡赤褐色であった。

試掘トレンチ3 (図13) D、E - 1、2で検出した。56は弥生時代前期の有茎式磨製石斧である。長さ約4.4cmが残り、幅1.2cm、石材は玄武岩か。弥生時代前期の遺物はこれだけである。

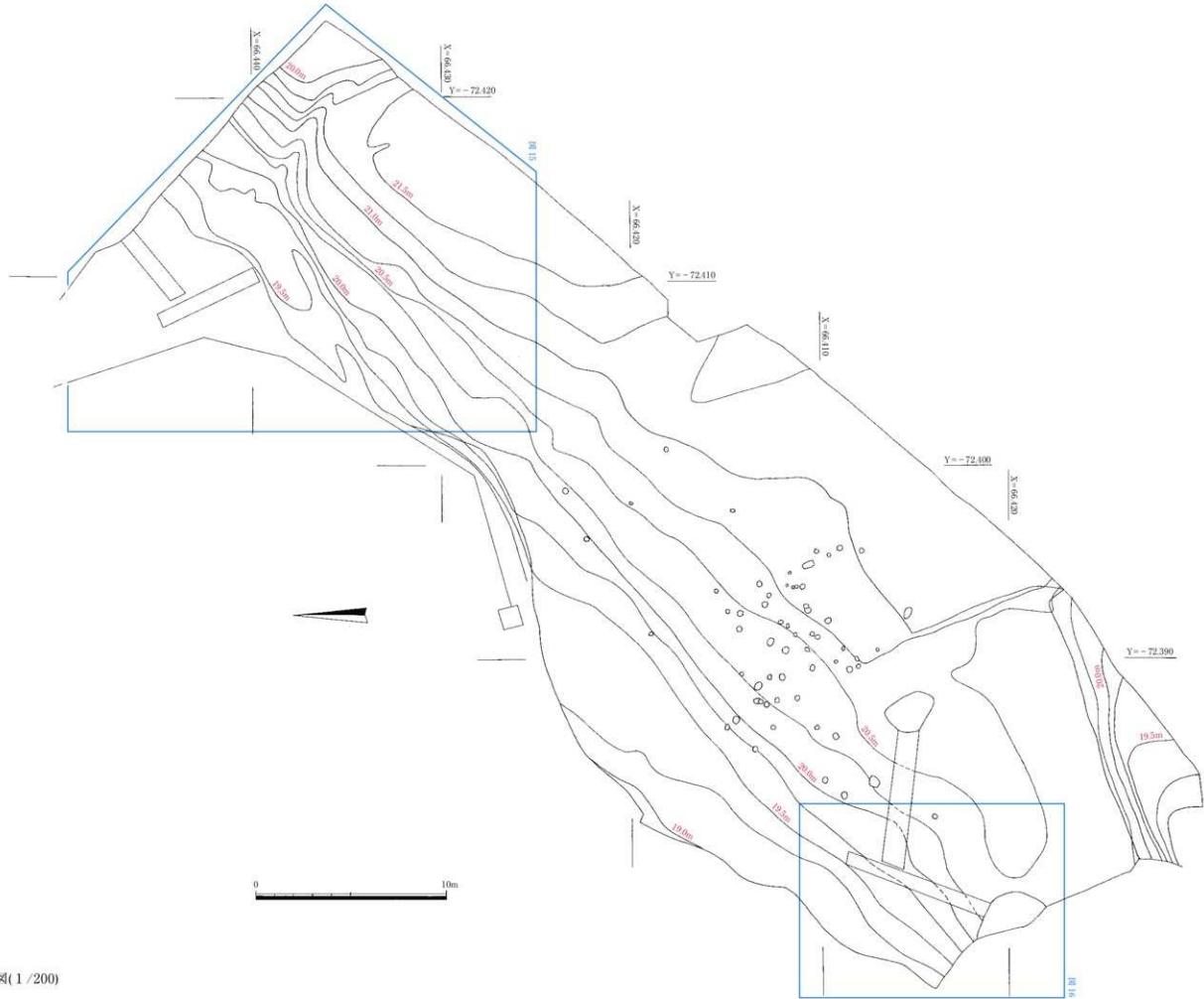


图14 III区全体图(1 / 200)

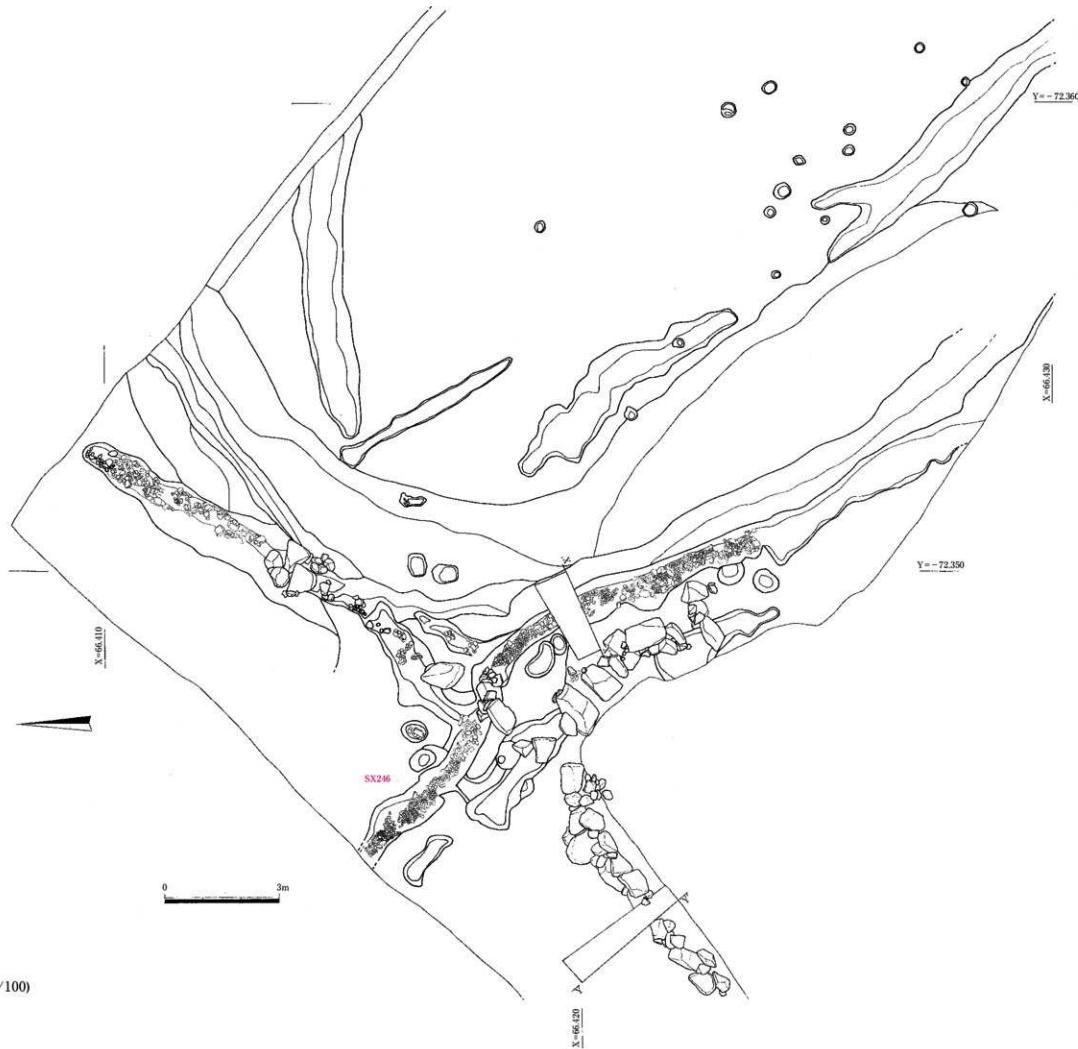


图15 Ⅲ区南西部全体图(1 / 100)

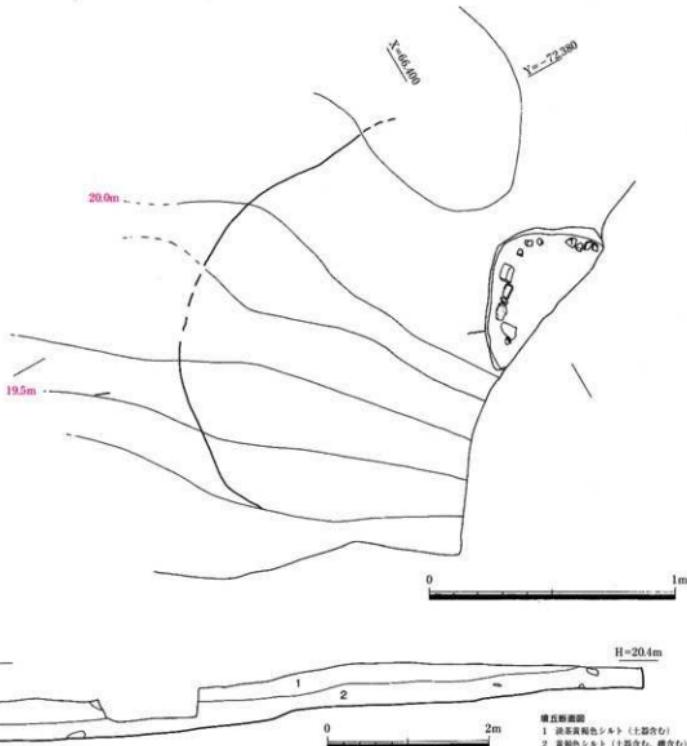


図16 桑原錦田古墳群A群3号墳墳丘測量図(1/20)および墳丘断面図(1/60)

3. III区の遺構と遺物

1) 古墳

位置と現状(図14、16)桑原錦田古墳群A群は尾根上に立地し今回調査した3号墳はほとんどが破壊されており、その一部が残っていた。標高は現況で20.4mを測る。調査はまず石室を掘削・精査し、それと平行して、石室の主軸と直行するようにトレンチを設け、墳丘の依存状況を確認した。

墳丘(図16)古墳築造に伴う地山整形は、周溝の掘削と墳裾の削り出し、及び墳丘基底面の整地からなると考えられるが、地山整形時の基底面のほとんどが削平されている状況であり、墳丘盛土も全く残っていなかった。

横穴式石室(図17)本墳の埋葬施設は西側に向かって開口し、桑原石ヶ元古墳群(元岡・桑原遺

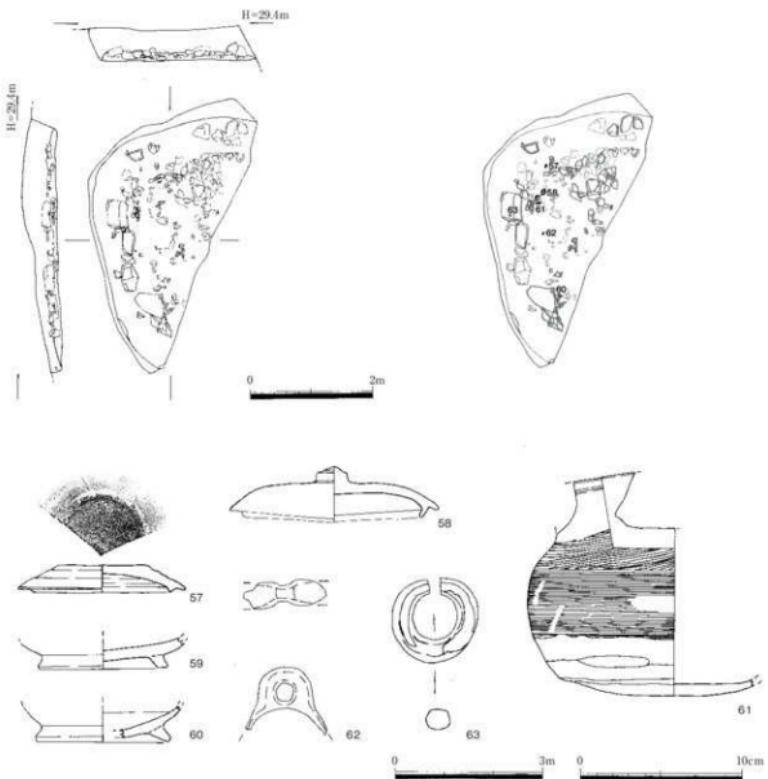


図17 3号墳石室実測図（1/40）および遺物出土状況図（6, 7は1/1、他は1/3）

跡群2（2003）の調査などから、両袖式単室の横穴式石室であると考えられる。石室掘り方の規模は長さ500cm以上、幅350cm以上である。

玄室（図17）奥壁幅250cm以上、左壁長さ275cmであった。壁体の壁石は左壁の一部と奥壁の一部のみ残る。左壁石、奥壁の一部は幅24~46cm、高さ10~16cmを測り、腰石と呼ぶにはためらうほど小ぶりである。

羨道、閉塞施設（図17）羨道は一部が残るのみで、閉塞施設の樋石等は不明である。

遺物（図17）墳丘等は破壊されており、その上に包含層が堆積している状況であった。そのため、石室内だけからの出土となった。

57~61は須恵器である。57、58は壺蓋である。57は高さ1.6cm、最大径約10.2cm、底径約

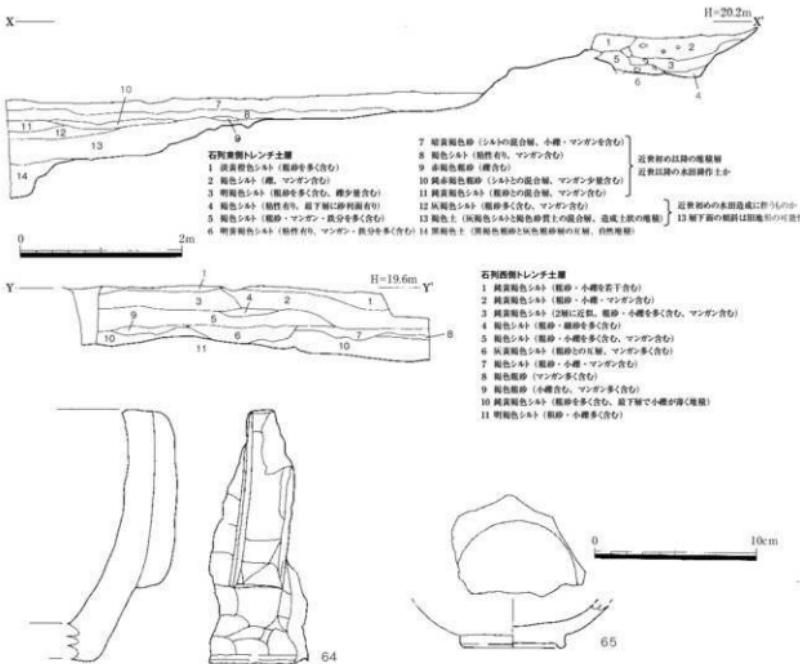


図18 SX246 地境石トレーンチ（1/60）および出土遺物（1/3）

8.4cm である。ロクロナデを施す。58は高さ3.4cm、最大径12.6cm、底径10.8cm である。ロクロナデの後、カキ目を施す。59、60は坏身である。59は底径8.0cm、ロクロナデを施す。60は底径約8.0cmで、ロクロナデを施す。61は高さ約13.5cm、最大径18.0cm、底径4.5cm である。肩部はやや急に移行し最大径は中位に位置する。胴部上から2/3はカキ目、1/3はヘラ削りである。焼成は良好で、胎土は暗赤褐色である。62は鉛か馬具の頭部である。一部に金が残る。63は耳管である。径1.7cmで、銅芯金張りである。

2) その他の遺構、遺物

SX246 地境石 (図18) X - X', Y - Y' は近世初め以降の水田造成に伴うものとされ、X - X' の7 ~ 11層は図化できなかったが青磁片などが出土しており、7・8層は近世水田の耕作土と思われる。12 ~ 13層は人為的造成面の可能性が強く、近世初めの水田造成に伴うものと想定される。また、13層下面の傾斜は旧地形に伴う可能性がある。14層は谷理没層である。また、X - X' の7 ~ 11層、12 ~ 13層はY - Y' の1 ~ 3層、8・10層に対応する。Y - Y' の1 ~ 3層は耕作土と思われ、列石配置後の堆積物である。

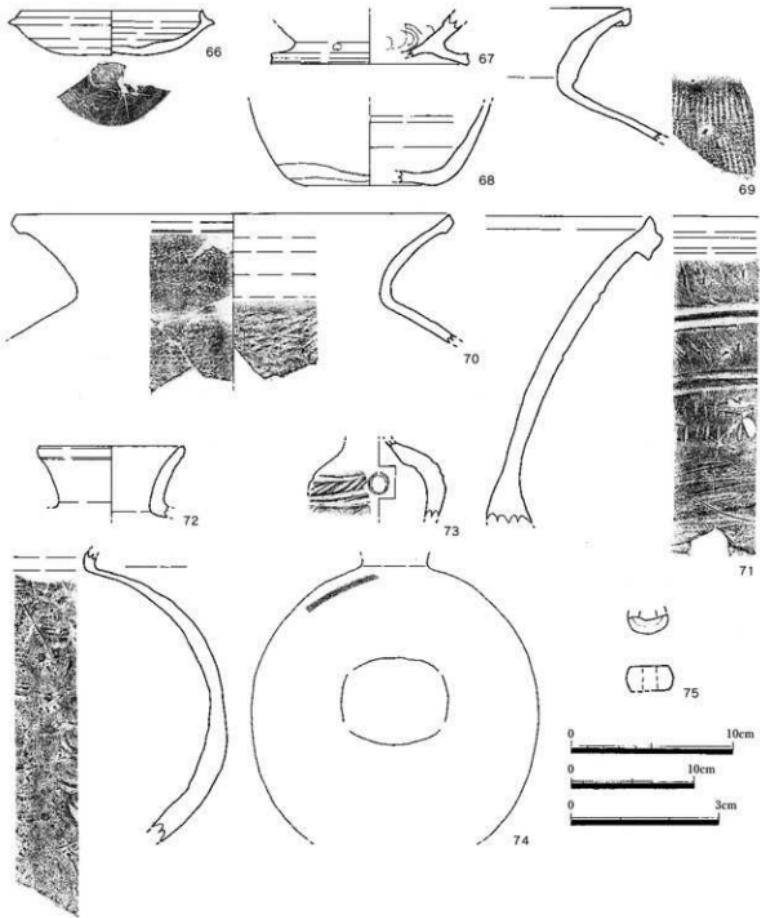


図19 SX201出土遺物1 (74は1/4、75は1/1、他は1/3)

出土遺物 (図18) 64は滑石製の石鍋で、高さは15.3cmである。縦耳を持つタイプで、11世紀後半のものか。65は磁器で底径約6.4cmである。底部は露胎である。

SX201 (図19、20、21) 66～74は須恵器である。66は壊身で高さ2.7cm、口径約11.0cm、最大径約12.6cmである。内外面共にロクロナデを施す。67は長頸壺の底部であろう。底径約12.0cmで、外面の底部にはナデ、内面はタタキ、脚部には穿孔がみられる。68は壺(瓶か)の底

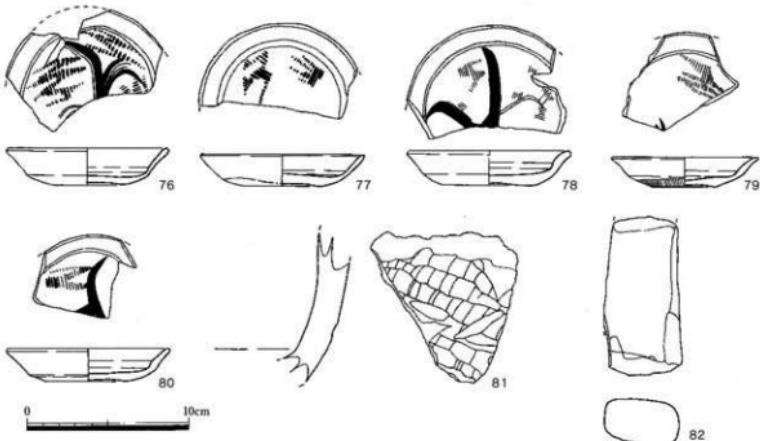


図20 SX201出土遺物2（1/3）

部である。底径約7.8cmを測り、調整はロクロナデである。69、70は壺である。69は口径部が喇叭状に外反する。外面には格子タタキがみられ、内面頸部にかけて一部自然釉が確認できる。70は口縁径が約26.6cmに復元できる。口径部が喇叭状に外反し、内面には口縁部から頸部にかけてナデ調整し、頸部より下は波當て工具痕がみられる。71は大壺である。口径部は長く、喇叭状に外反し、口縁端部は肥厚し外側に屈曲する。頸部の上二段には波状文、その下には刻み目がみられる。72は瓶の口縁から肩部である。口径は9.0cmであり、提瓶の一部か。73は甕である。上から肩部に一条の沈線を巡らせ、その下は斜め平行沈線文を施し、最大径部分を穿孔する。さらにその下には2条の沈線を巡らせる。74は横瓶である。体外面は平行タタキ、内面は波當て具痕がみられる。76～80は同安窯産の青磁Ⅲ-2b類である。内面見込みにヘラ描き文と櫛点描文を施す。底部とその回りのみ露胎である。76は高さ2.3cm、口径約10.0cm、底径約4.0cmである。77は高さ1.9cm、口径約10.0cm、底径約4.6cmである。78は高さ2.2cm、口径約10.0cm、底径約5.6cmである。79は高さ1.8cm、口径約9.0cm、底径3.8cmである。底部から口縁部にかけて1/3に施文がみられる。80は高さ2.0cm、口径約10.0cm、底径約5.0cmである。81は滑石製の石鍋である。82は砥石である。

83～87は黒曜石である。83は他の石鎚と比較すると大きい。先端の一部を欠いているが、縦32mm、横25mm、厚さ5mmである。84～86は狭く深い抉が入る鉈形族である。84は縦22mm、横19mm、厚さ4mmである。85は縦20mm、横12mm、厚さ3mmである。86は先端の一部を欠いている。横15mm、厚さ3mmである。87は石鎚で五角形をなす。縦16mm、横13mm、厚さ3mmである。88は安山岩の石鎚で五角形をなす。縦18mm、横15mm、厚さ5mmである。89～91は黒曜石である。89は狭く深い抉が入る鉈形族で、両面に局部磨製を施す。縦16mm、横11mm、厚さ2mmである。90は石鎚で横17mm、厚さ5mmである。91は石鎚で縦22mm、横11mm、厚さ5mmである。92、93は安山岩製石鎚である。92は縦19mm、横

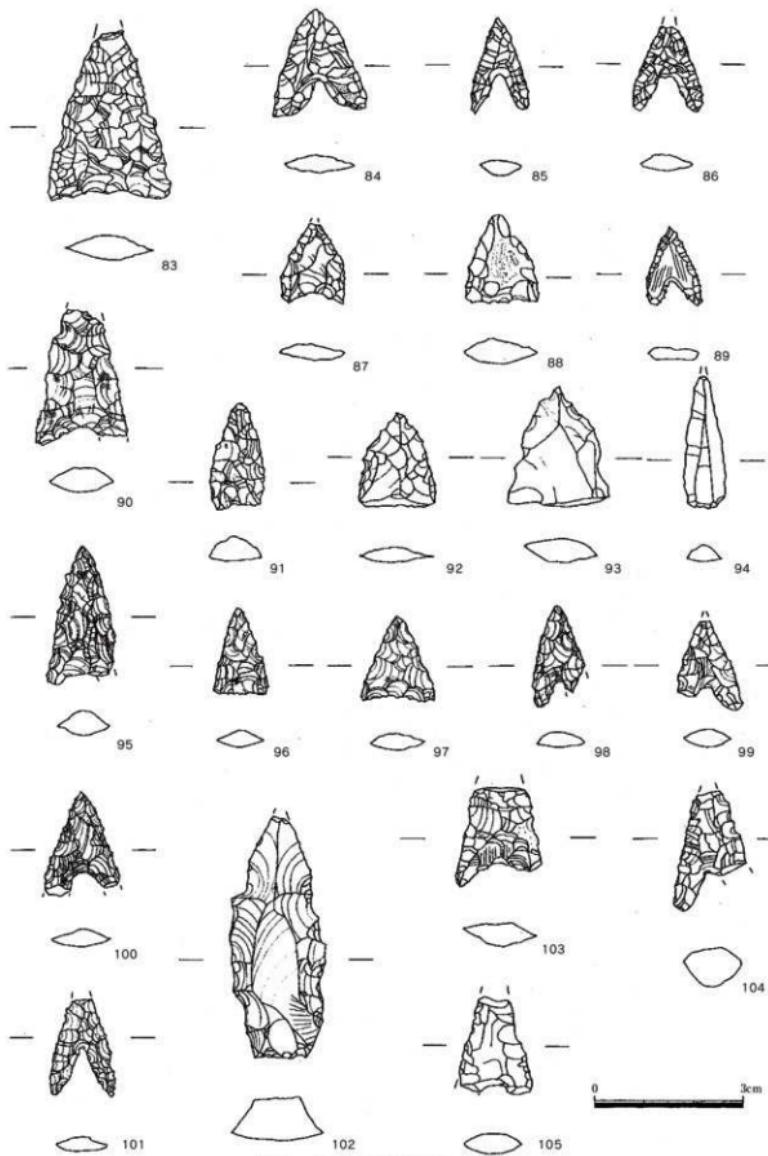


図 21 SX201 出土遺物 3 (1/1)

15mm、厚さ3mmである。93は縦24mm、横20mm、厚さ5mmである。95～105は黒曜石である。95は石鎚で一部欠損する。横12mm、厚さ5mmである。96は石鎚で、縦18mm、横11mm、厚さ3mmである。97は石鎚で縦17mm、横15mm、厚さ4mmである。98～101は狭く深い抉が入る鎌形族である。98は縦20mm、横11mm、厚さ4mmである。100は横15mm、厚さ4mmである。101は横12mm、厚さ3mmである。102は角錐状石器で縦49mm、横19mm、厚さ8mmが残る。103は鎌形族で、横15mm、厚さ4mmである。

石 器 一 観 表								
博図番号	因番号	区	出土位置	器種	石材	縦(mm)	横(mm)	厚さ(mm)
因9	30	I	051	石鎚	黒曜石	(28)	38	7
因12	43	II	包含層	石鎚	黒曜石	22	16	3
因12	44	II	包含層	石鎚	黒曜石	29	22	7
因12	45	II	包含層	石鎚	安山岩	25	15	4
因12	46	II	包含層	石鎚	安山岩	21	17	5
因12	47	II	包含層	石鎚	安山岩	27	16	3
因12	48	II	包含層	石鎚	黒曜石	26	20	6
因12	49	II	包含層	スクレイバー	黒曜石	21	35	7
因12	50	II	包含層	スクレイバー	黒曜石	24	36	7
因12	51	II	包含層	スクレイバー	安山岩	28	43	11
因12	52	II	包含層	スクレイバー	安山岩	41	44	10
因13	56	I	試掘トレンチ3	有茎式磨製石頭 (玄武岩)	(44)	12	(5)	
因21	83	III	包含層	石鎚	黒曜石	(32)	25	5
因21	84	III	包含層	石鎚	黒曜石	22	19	4
因21	85	III	包含層	石鎚	黒曜石	(20)	12	3
因21	86	III	包含層	石鎚	黒曜石	18	15	3
因21	87	III	包含層	石鎚	黒曜石	16	13	3
因21	88	III	包含層	石鎚	安山岩	18	15	5
因21	89	III	包含層	石鎚	黒曜石	16	11	2
因21	90	III	包含層	石鎚	黒曜石	(23)	17	5
因21	91	III	包含層	石鎚	黒曜石	22	11	5
因21	92	III	包含層	石鎚	安山岩	19	15	3
因21	93	III	包含層	石鎚	安山岩	24	20	5
因21	94	III	包含層	石鎚	黒曜石	27	8	4
因21	95	III	包含層	石鎚	黒曜石	(28)	12	5
因21	96	III	包含層	石鎚	黒曜石	18	11	3
因21	97	III	包含層	石鎚	黒曜石	17	15	4
因21	98	III	包含層	石鎚	黒曜石	20	11	4
因21	99	III	包含層	石鎚	黒曜石	(19)	14	4
因21	100	III	包含層	石鎚	黒曜石	(21)	15	4
因21	101	III	包含層	石鎚	黒曜石	(20)	12	3
因21	102	III	包含層	角錐状石器	黒曜石	(49)	19	8
因21	103	III	包含層	石鎚	黒曜石	(20)	18	5
因21	104	III	包含層	石鎚	黒曜石	(24)	15	8
因21	105	III	包含層	石鎚	黒曜石	(20)	15	4

表1 元岡・桑原遺跡群第64次調査出土石器一覧表

4.まとめ

1) I区II区の調査

I区II区は初め包含層のみの調査であったが遺構が確認された。その包含層(SX051,081,103)は、一部須恵器が出土しているが紛れ込みであろう。したがって第2次調査でみつかった包含層と同じ弥生時代後期～古墳時代初めの時期である。包含層SX103の下層から黒曜石、安山岩の石器が多数出土した。出土したのはSX103と搅乱が切り合う付近で多数見つかっている。

その下に6本柱のSB001、4本柱のSD002、003の掘立柱建物がみつかっているが、第2次調査では4本柱の掘立柱建物が多数検出されている。の中には縄文時代の遺物が入っている建物跡もあるが、今回みつかった柱穴では縄文時代の遺物は確認できなかった。また、遺物が小さく実測できたものが1点しかないが、おそらく弥生時代後期後半～古墳時代初めのものであろう。

溝SD105は第2次調査のSD3036と同じであろう。今回の調査では一部分しか確認できなかったが、弥生時代後期の遺物が出土している。

その後、断絶し、周囲では8～9世紀に第64次調査の周りで製鉄遺跡群が展開する。

第2次調査でも指摘されているが、第64次調査区でも疊交じり包含層の状況から洪水や土石流があった可能性は否定できない。

2) 3区の調査

3区も包含層が厚く堆積し、石器が出土したが、上層からの出土であり、包含層の時期は7世紀～中世にかけてであろう。

桑原錦田古墳群A群の3号墳であるが、桑原錦田古墳群A群B群共に残りが非常に悪い。A群の1号墳は奥壁と床面がわずかに残るだけであった。墳形はおそらく円墳と考えられ、遺物は出土していない。判断材料が乏しいが、6世紀後半～7世紀初頭におさまるとされる。2号墳は单室の横穴式石室を設け、時期は7世紀後半である。B群の1基は円墳で6世紀後半以降に築造されたと考えられる。

桑原錦田古墳群全体で考えると、古墳の築造は6世紀後半以降である。これは第64次調査のⅠ区Ⅱ区を挟んで形成される桑原石ヶ元古墳群でのⅢ期(6世紀第3四半期～第4四半期)、Ⅳ期(7世紀以降)にあたる。Ⅲ期は多数の古墳が築かれるが、Ⅳ期はその数が極端に減少する。桑原石ヶ元古墳群は5世紀中葉頃には造墓が開始され、Ⅲ期にピークを迎える。桑原錦田古墳群は4基しか確認されていないが、Ⅲ期後半、Ⅳ期に造墓が開始されることから、墓域の移動が考えられるのではないか。

〔参考文献〕

元岡・桑原古墳群2－桑原石ヶ元古墳群の調査－ 2003年 福岡市教育委員会

元岡・桑原古墳群15－第33次・40次・41次・44次・47次調査の報告－ 2009年 福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財年報 Vol.11 1998年 福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財年報 Vol.12 1999年 福岡市教育委員会

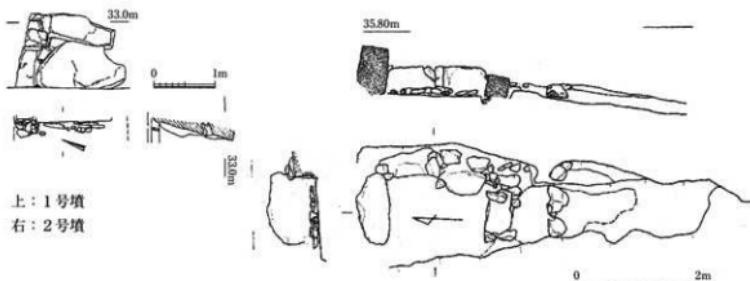


図22 桑原錦田古墳群A群石室実測図(1/80)



1. I・II区全景（上空から）



2. I・II区全景（上空西から）



1. I 区全景（上空西から）



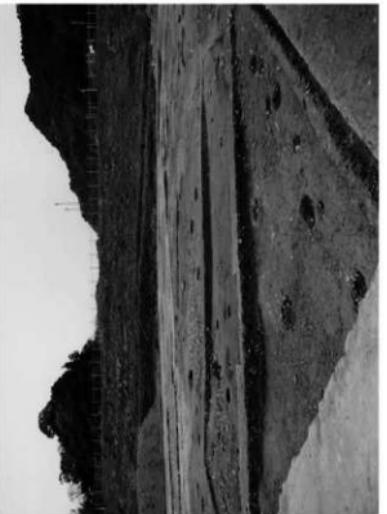
2. SB001 (南から)



1. SK007 (南から)



2. SK107 (東から)



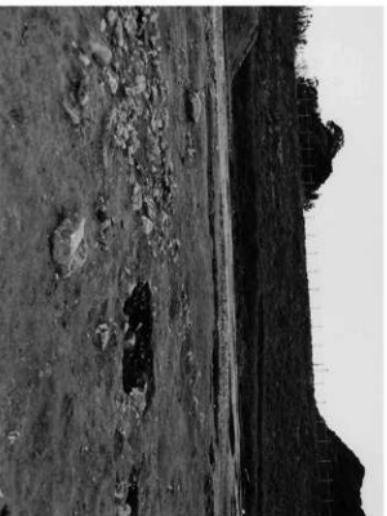
3. SX051 土層断面 (南東から)



3. SX081 土層断面（南東から）



2. SX051-2 陶質土器出土状況（東から）



1. SX051 土層断面（南東から）

1. III区全景（東から）



2. 桑原錦田古墳群 3号墳石室（北から）



3. 桑原錦田古墳群

3号墳土層断面（南から）





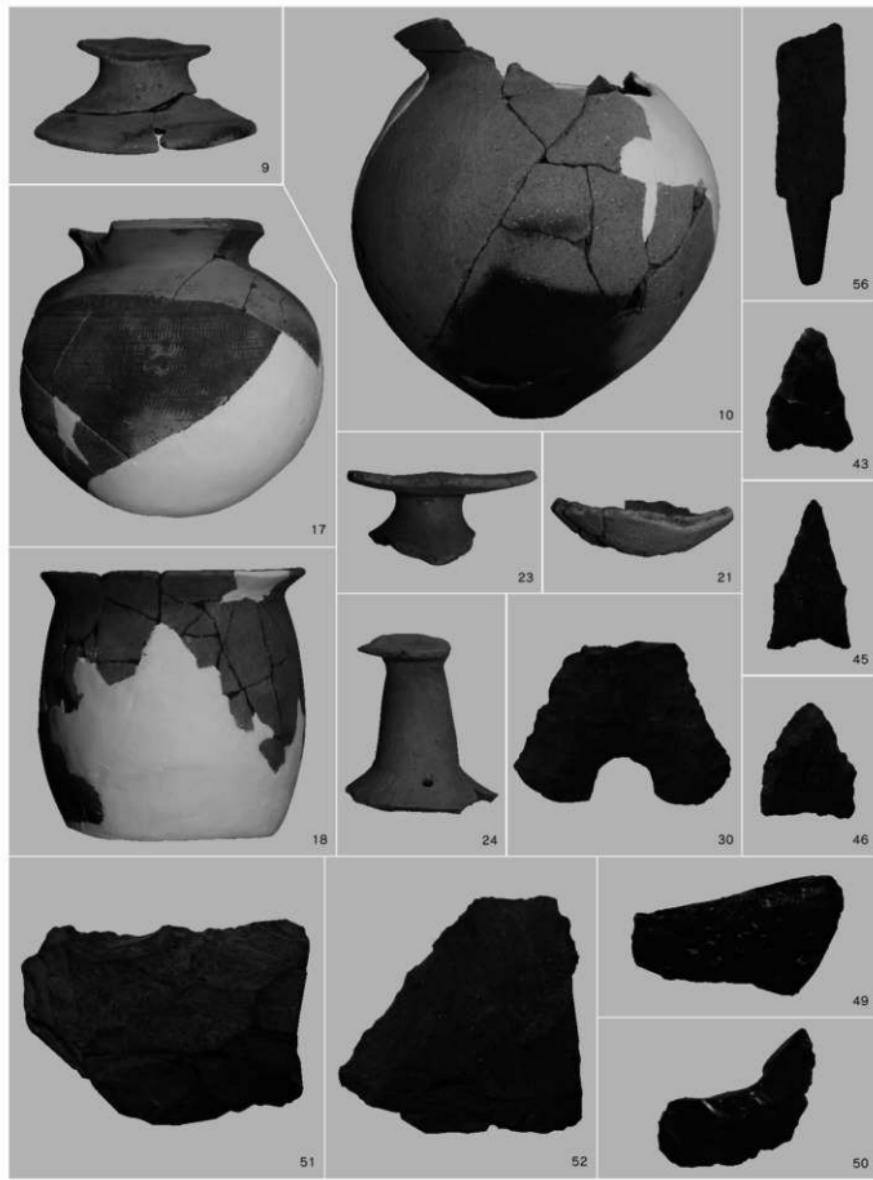
1. 地境石 (北東から)



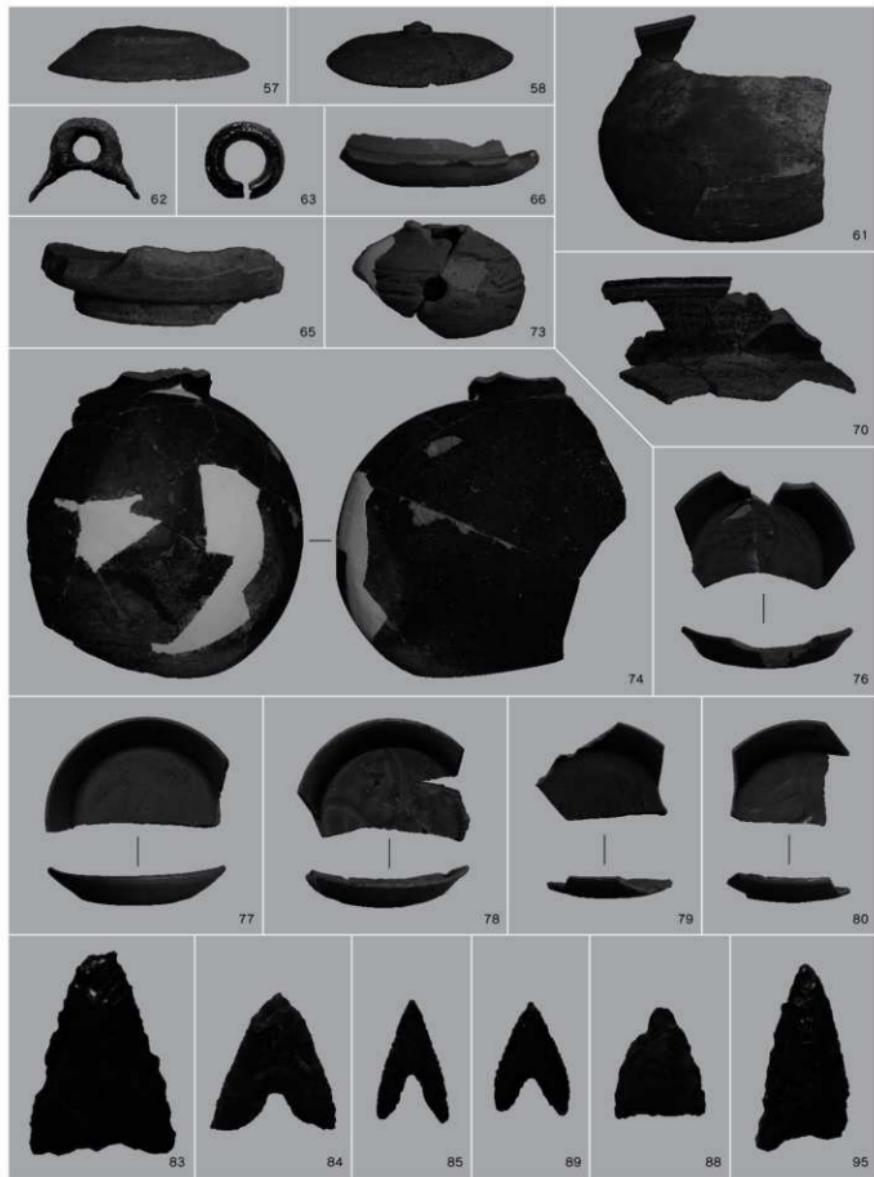
2. 地境石 X - X' 土層断面 (東から)



3. 地境石 Y - Y' 土層断面 (南から)



出土遺物（1）



出土遺物（2）

報告書抄録

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
		市町村	道路番号					
もとおか くわはらいせきぐん 元岡・桑原遺跡群 だい じ 第 64 次	ふくおかんふくおかし 福岡県福岡市 にしこおかあざくわばら 西区大字元岡・桑原	40137	2782	30° 35' 00"	130° 12' 56"	2013.10.1 ~ 2014.4.30	2900	記録保存調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
元岡・桑原遺跡群	集落	弥生時代～中世	掘立柱建物、溝、 土坑、古墳	弥生土器、土師器、 須恵器、陶磁器	弥生時代中期から後期に かけての集落、古墳 1 基、 中世の陶磁器などが出土した。			
要 約	元岡・桑原遺跡群は、福岡市西区大字元岡・桑原地内に所在し、玄界灘に突出する糸島半島東側基部の丘陵部に位置する。今回の調査では初め弥生時代の包含層と古墳 1 基と思われていたが、掘立柱建物などが検出され、陶質土器などが出土した。また古墳からは、耳環、鎌などが出土した。							

もとおか くわはらいせきぐん 元岡・桑原遺跡群 27

— 第 18 次・第 60 次・第 64 次調査の報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1302 集

2016(平成 28)年 3 月 24 日発行

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号
(092) 711-4667

印刷 石橋印刷株式会社
福岡市博多区東比恵 3-21-10
(092) 411-0544